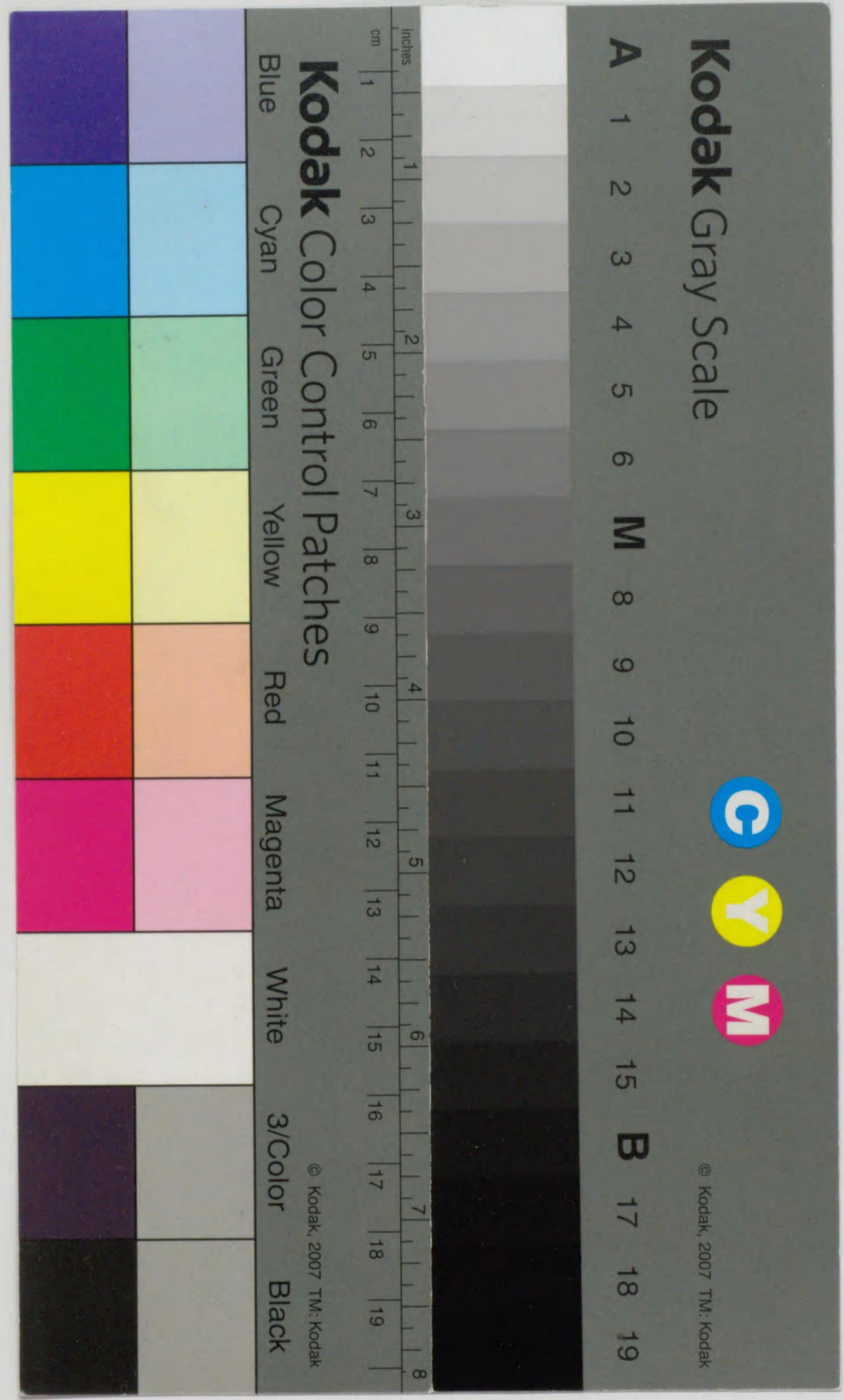




601-16  
1200501530217  
601  
6



**Kodak** Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

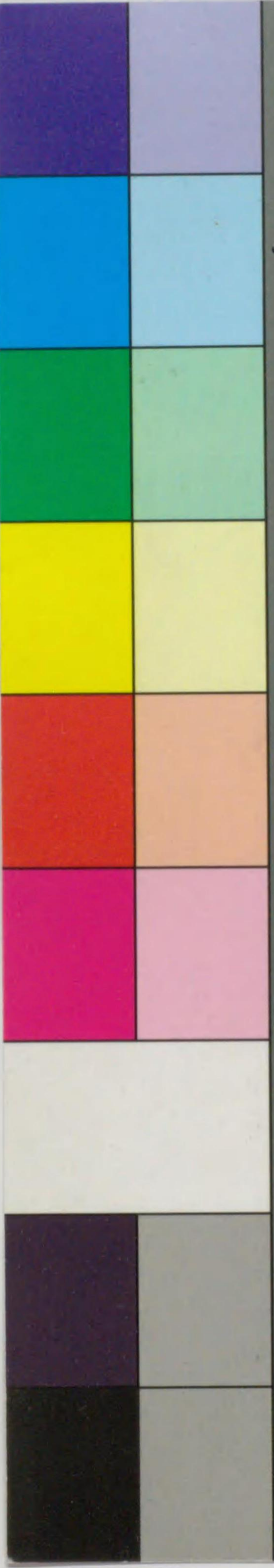
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

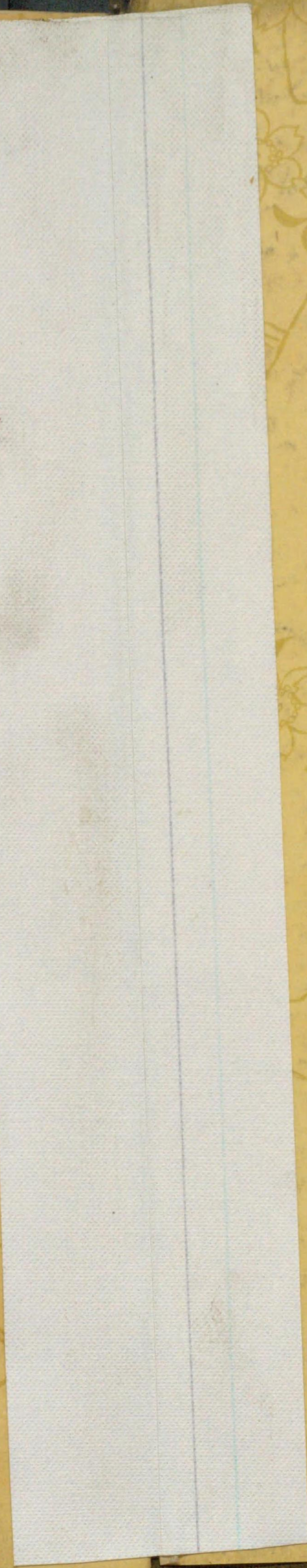
**Kodak** Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

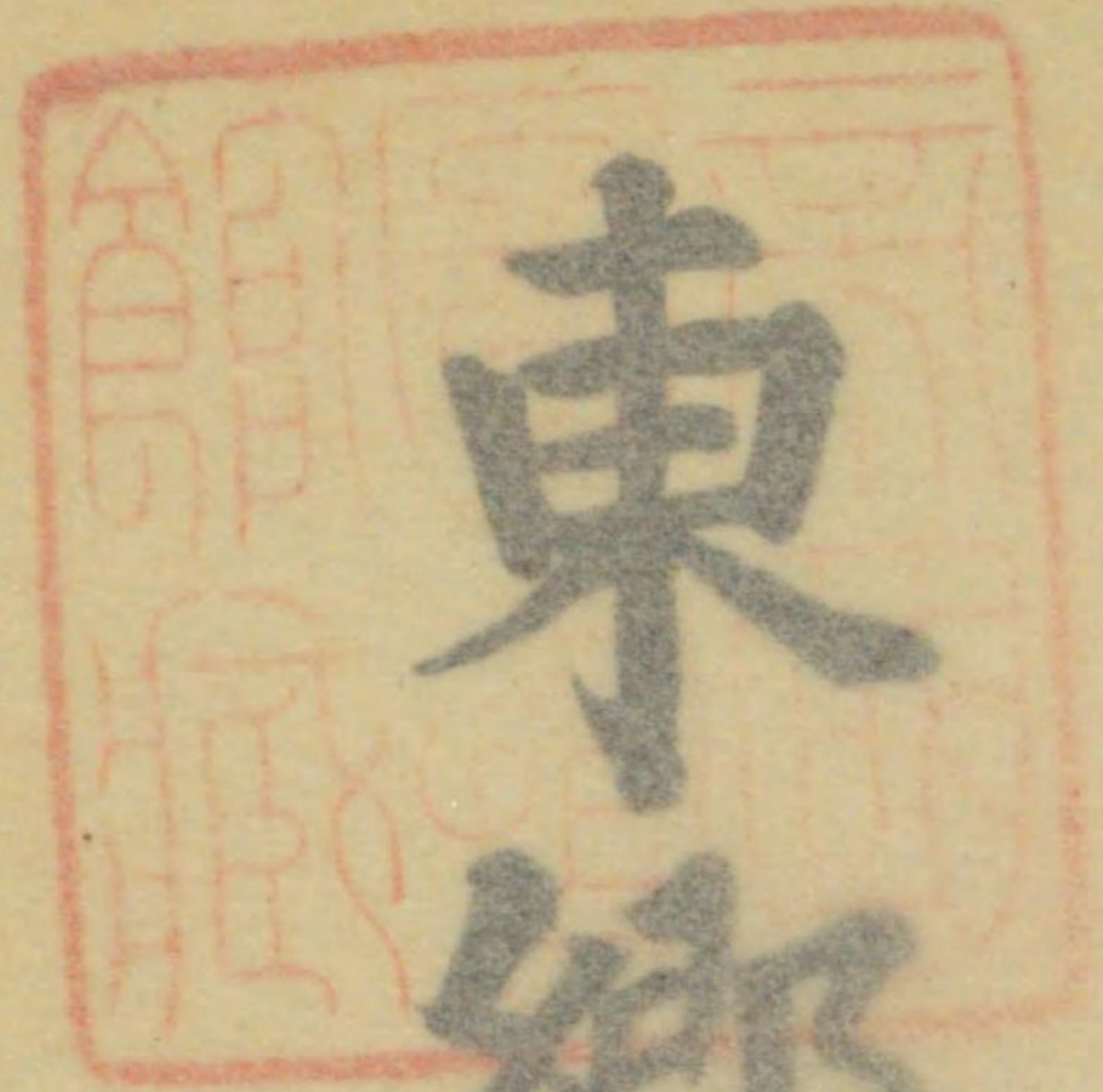
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black











東郷平八郎全集

家達







東郷平八郎全集

家達







日本海軍艦に於ける三景艦 昭和二十八年五月二十七日午後一時五十分、横濱の横濱港の艦に在り、  
 艦長努力せよとの入信、三景艦上、小物、入信、即ち軍艦司令官の命令、左は加藤艦長、右  
 方状況を記録するは、伊藤中佐、横濱艦上、下五つが伊藤中佐、海軍各師団、伊藤中佐、(軍艦長、伊藤)





日本海々艦に於ける三笠艦機 明治三十八年五月二十七日午後一時五十分「皇國の興隆」の一艦に在り各員一層奮勵努力せよとのノ旨誠令や三笠の機上高く掲げられんとす。圖中東郷司令長官の向て左は加藤參謀長右方戦況を記録するは秋山中佐、羅針機を前にして立つが伊地知艦長、海圖を仰喚する舟目航海長等。(東郷艦本船圖)



601-16

東郷平八郎全集 第二卷 目次

寫眞及筆蹟

東郷元帥の誕生地	.....	(一)
東郷平八郎二十三歳當時及二十九歳當時	.....	(二)
二十七歳當時及練習船ウースター號、同試験答案書	.....	(三)
東郷 井戸	.....	(四)
浪速艦長時代	.....	(五)
三笠艦の破損箇所	.....	(六)
旅順に於て兩將軍會合	.....	(七)
閉塞されたる旅順口	.....	(八)
旅順口に於て捕獲されたる露艦	.....	(九)
東郷大將の身邊を犯せし彈丸	.....	(一〇)

目次





東郷大將愛用の双眼鏡及時計……………(一〇)

旅順口内に收容の露艦……………(一一)

日本海々戦直前の送迎會……………(一二)

日本海海戦時の光景……………(一三)

軍令部着の快報……………(一四)

三笠艦の奮闘……………(一五)

三將軍記念揮毫の扇面……………(一六)

東郷大將花環を受く……………(一七)

愛用の外套……………(一七)

伊勢神宮參拜……………(一八)

内親王凱旋軍歡迎……………(一八)

凱旋軍の入京(上、下)……………(一九)

聯合艦隊諸將星……………(二〇)

前田正名氏との撮影……………(二〇)

羽根田の鴨獵……………(二三)

コンノート殿下との記念撮影……………(二四)

兩内親王送別記念……………(二四)

軍令部長時代の硯函……………(二五)

小笠原邸招待の元帥……………(二六)

ロジエスト中將を見舞ふ……………(二七)

保存せられたる三笠艦……………(二八)

ランプトン中將歡迎會……………(二九)

乃木東郷兩將軍と前田氏への書簡……………(三〇)

ウースター訪問……………(三一)

ハイドパーク少年團檢閲……………(三一)

シャトルに於ける歡迎……………(三二)

小笠原子爵へ贈られたる刀劔……………(三三)

元帥佩用の元帥刀及軍刀……………(三四)

元帥佩用の元帥刀及軍刀……………(三五)



Z 信號と煙突の破損……………(三六)

博多旅館に於ける元帥……………(三七)

英國皇太子殿下歡迎……………(三八)

東郷會創立……………(三九)

筆 蹟(一)……………(四〇)

同 蹟(二)……………(四一)

横須賀に於ける三笠艦甲板……………(四二)

同 上 内部將官室……………(四三)

東郷元帥三笠邸前にて……………(四四)

銅像除幕式……………(四五)

筆 蹟「武」……………(四六)

筆 蹟(四)……………(四七)

同 蹟(五)……………(四八)

東郷乃木同席の際の揮毫……………(四九)

筆 蹟(七)……………(五〇)

洗旗池の碑面……………(五一)

赤穂義士になぞらへたる筆蹟……………(五二)

鹿兒島市長への禮狀……………(五三)

經文題字扉……………(五四)

書 簡(一)……………(五五)

同……………(五六)

同……………(五七)

同……………(五八)

筆 蹟(八)……………(五九)

通信葉書……………(六〇)

慶事に寄す……………(六一)

元帥描畫二種……………(六二)

述懷の和歌……………(六三)



國民に語る……………(六)

元帥最近の感懐……………(六七)

唯々専心懸命であり度い……………(六七)

世に處するの道は……………(六九)

學生は本文に精進したい……………(七一)

女は自儘を慎みたい……………(七二)

放任主義ではいけなくなつた……………(七三)

利を利とせず義を利としたい……………(七四)

唯勝つことに専念……………(七五)

先方の手並が分つてゐた……………(七六)

日露戦役中最も心配したことは……………(八〇)

日本海の丁字戦法は必要だつた……………(八三)

歌詠をやるわしの心境……………(八四)

折に觸れての感懐……………(八七)

元旦に少年へ與ふ……………(八七)

元帥の人物試験……………(八八)

怠慢は才子病……………(八九)

恥を知れ……………(九〇)

才よりも力よりも眞心……………(九二)

東郷元帥も君が代を歌ふ……………(九六)

小笠原海軍中將の御講話……………(九六)

小國民を前に元帥の訓話……………(九八)

答……………(九八)

日本海々戦滿廿週年の追懐……………(一〇〇)

主人が居なくなつては申譯ない……………(一〇三)

大西郷を語る……………(一〇六)

堪忍が第一ぢや……………(一一三)



旗艦は先頭に立て……………(二四)

海 戦 記……………(二七)

大 海 報……………(二九)

- 一、旅順攻撃の第一報——二、旅順口攻撃の第二報——三、旅順口閉塞隊の報告——四、血書の閉塞隊志願——五、旅順閉塞隊の結果——六、旅順口猛撃の勝報——七、旅順口攻撃の捕虜——八、旅順口の間接射撃報告——九、第二回旅順口閉塞の報告——一〇、旅順口第八次攻撃の報告——一一、第三回旅順口閉塞の報告——一二、旅順口強行偵察の報告——一三、吉野、初瀬の沈没報告——一四、旅順口退去後の報告——一五、西山分遣隊状況の報告——一六、西山分遣隊の詳報——一七、第五驅逐隊の報告——一八、旅順口外爆沈の敵艦——一九、旅順口強行偵察の報告——二〇、旅順口強行偵察——二一、麾下各隊の状況報告——二二、陸上屯在の敵砲撃報告——二三、水雷爆發のため死傷報告——二四、旅順口強行偵察報告——二五、機械水雷爆沈の報告——二六、旅順口外の敵艦隊攻撃——二七、旅順口外敵隊攻撃の勝報——二八、第十二水雷艇隊攻撃の報告——二九、旅順港無電柱の撃破報告——三〇、軍艦海門沈没の報告——三一、第六艇隊敵艦隊襲撃の報告——三二、驅逐隊砲戦の報告——三三、水雷艇隊襲撃の報告——三四、敵驅逐隊攻撃の報告——三五、驅逐隊沈没の確報——三六、廣瀬中佐負傷の報告——三七、敵十四艦を歴

- 迫攻撃——三八、旅順口脱出の敵艦邀撃の報告——三九、敵旗艦大損傷の確報——四〇、敵驅逐艦捕獲——四一、旅順口脱出の敵艦邀撃——四二、敵艦「バルラダ」號の轟沈——四三、赤城艦等勇奮の報告——四四、叢雲水雷命中の確報——四五、我水雷艇猛撃の報告——四六、我水雷艇隊の旅順口砲撃の壯舉——四七、我水雷艇の旅順口夜襲の壯舉——四八、我水雷艇隊更に襲撃——四九、水雷艇隊襲撃の報告——五〇、旅順敵艦隊主力の滅亡——五一、我水雷猛撃結果の續報——五二、閉塞當時の情況——五三、日本海戦の第一報——五四、日本海戦敗殘敵艦の報告——五五、日本海戦敗殘艦の續報——五六、日本海戦敗殘敵艦の報告——五七、我追撃艦の南方搜索報——五八、日本海戦に元帥の與へたる感狀——五九、敵特務艦沈没の報告——六〇、日本海々戦詳報——六一、日本海々戦經過の奉告

清佛戰爭戰況報告記……………(二九)

- 一、石舟沈没の位置——二、福州景況御届——三、松祖山島及香港の景況——四、シヤーフヒーキ碇泊中の狀景——五、清佛開戦に付御國旗掲揚の伺——六、虎門塞近邊砲臺の位置報告——七、香港へ法艦出入の義——八、淡水港の景況——九、淡水港陸戦攻撃の情況——一〇、淡水攻撃の電信譯——一一、鷄籠及淡水佛艦砲撃——一二、上海景狀の報告——一三、上海着艦の義御届——一四、閩河口工投描の義御届

布哇政變出張記……………(三九)



臺灣征討記……………(二四五)

- 一、浪速、高千穂、淡水港投描——二、五月廿六日の淡水港状況——三、午前十時の浪速の活躍——四、六月四日浪速の活躍——五、浪速水雷長の活躍——六、淡水港掃除の効果——七、蘇澳に於ける浪速の活躍——八、宜蘭に於ける浪速の活躍——九、香山港に於ける活躍——一〇、布袋嘴陸隊指揮官への訓辭——一一、浪速の布袋嘴進軍の状況——一二、打狗に於ける浪速の活動——一三、安平に於ける活躍——一四、東郷司令官濟遠を恒春方面に派す

海 戦 挿 話……………(二六五)

- 元帥苦闘の黄海々戦……………(二六五)
- 元帥と林泰曹……………(二六九)
- 然う信じたからだ……………(二七九)
- 疾きこと風の如し……………(二九二)
- 元帥と高陞號事件……………(二九六)
- 高陞號事件と林泰曹……………(三〇〇)

逸 話……………(三〇四)

- 三司令長官の返答……………(三〇五)
- 伊藤侯の書簡……………(三〇六)
- 海 戦 餘 談……………(三〇七)
- クロバトキンを讃む……………(三〇九)
- 注意周到の一例……………(三一〇)
- 無類の強情……………(三一〇)
- 羽根田の鴨獵……………(三一〇)
- 信 と 命 名……………(三一三)
- 魔 除 け……………(三一四)
- 二人となし……………(三一四)
- 英國一少女の書面……………(三一五)
- 外國青年將校の握手……………(三一六)
- 容易に人を棄てず……………(三一七)
- 病氣に對する勇者……………(三一七)



使用の硯箱……………(三八)

乾物の大將……………(三九)

倫敦よりの端書……………(四〇)

招待攻め……………(四〇)

足るべき筈なし……………(四一)

何時も變らぬ人氣……………(四二)

沈黙の神様……………(四三)

奇特の老翁……………(四五)

定宿は三島館……………(四六)

老車力をあはれむ……………(四七)

實戦に關する二教訓……………(四八)

限りなき温情……………(四九)

殆んど酒を斷つ……………(五〇)

狩獵を廢す……………(五一)

一個の好々爺……………(五二)

揮毫……………(五二)

持ち歸つてお捺しなさい……………(五六)

和歌……………(五七)

信仰……………(五九)

日蓮崇敬……………(六一)

山亭三笠……………(六一)

一睨強賊を走らす……………(六二)

東郷花……………(六三)

強健なる體質……………(六五)

東郷會……………(六五)

素朴の英雄……………(六七)

自我を超越す……………(六九)

偉中の偉……………(七一)



嶄新なる戦術……………(三五二)

フランスの老農の如し……………(三五四)

短評 一 束……………(三五六)

至大最高の人物……………(三五九)

瞽女を勞はる……………(三六九)

用意周到……………(三七二)

細心……………(三七三)

謹書御物中に選入せらる……………(三七四)

無限の感激……………(四七五)

愛重の刀劍……………(三七六)

ジョッフル元帥との奇遇……………(三七八)

日蓮宗門の感謝……………(三七九)

大震災を免かれし元帥邸……………(三八〇)

二七の不動會……………(三八二)

見るに忍びず……………(三八五)

山色連天……………(三八六)

秩父の銅像……………(三八六)

乃木家との關係……………(三八九)

櫻花を好む……………(三九一)

日本海々戦の追憶のラデオ……………(三九三)

賣り申す……………(三九六)

軍艦三笠の保存……………(三九七)

先帝陛下と東郷元帥……………(四〇七)

ルーズヴェルト氏と元帥……………(四〇八)

元帥とムツソリニー……………(四一二)

身のまほり一切を自分で……………(四一七)

従僕の熱誠元帥を動かす……………(四一七)

兩元帥の謙讓振……………(四二〇)



元帥の博學……………(四三)  
 英國留學時代の元帥……………(四三)  
 元帥と國民の同情……………(四五)  
 小笠原家の家寶……………(四七)  
 元帥の越中禪……………(四九)  
 ノビレ少將と元帥……………(四〇)  
 國寶を殺すな……………(四三)  
 旗洗の池に就て……………(四三)  
 元帥の味覺趣味……………(四四)  
 御大禮時の元帥……………(四六)  
 目出度い事だ……………(四七)  
 元帥の贈られた刀……………(四八)  
 元帥の上村大將評……………(四九)  
 元帥の筭掘り……………(四九)

元帥と侍醫……………(四二)  
 小笠原子爵令嬢と元帥……………(四四)  
 元帥一世一代の始末書……………(四五)  
 東郷さんの哄笑……………(四六)  
 元帥とネルソンの遺髪……………(四九)  
 元帥思ひの大北氏……………(五〇)  
 元帥の御家庭……………(五二)  
 元帥の大喝……………(五四)  
 哀憐草木に及ぶ……………(五六)  
 一 斷 千 金……………(五七)  
 何食はぬ顔……………(五八)  
 禁 酒 制 食……………(五九)  
 日宗諸山揮毫……………(五九)  
 武士道の典型……………(六〇)



外人の東郷観……………(四六三)

  英國民の東郷観……………(四六五)

  日本名士の來訪……………(四六六)

  東洋のネルソン東郷大將來訪……………(四六七)

  東郷は語らず……………(四六八)

  皇帝陛下に拜謁……………(四六九)

  歴史的壯觀……………(四七〇)

  百八十五隻の戦艦整列……………(四七五)

  弩級戦艦十七隻……………(四七六)

  皇  禮  砲……………(四七九)

  外國軍艦及び合衆國の巨艦……………(四八〇)

  當時の誌上に描かれたる東郷大將(其一)……………(四八一)

  觀  艦  式……………(四八五)

ウオーセスタア健兒……………(四八八)

  東郷大將に招かる……………(四九〇)

  東郷大將バロウ市訪問……………(四九一)

  グラスゴオに於ける東郷大將……………(四九五)

  東郷大將グ及クライド訪問……………(四九六)

  東郷大將グラスゴオ訪問……………(四九七)

  造船所訪問……………(四九九)

  今日のプログラム……………(五〇一)

  グラスゴオに於ける東郷大將……………(五〇二)

  東郷大將エデンバラ訪問……………(五〇六)

  東洋のネルソン……………(五〇七)

  當時の誌上に描かれたる東郷大將(其二)……………(五〇八)

  東  郷  大  將……………(五〇九)

  ニューウカッスルに於ける送別午餐會……………(五一三)



市長官邸に於ける午餐會……………(五四)

東郷大將の演説……………(五五)

東郷大將シエクイール訪問……………(五七)

素晴しき新計畫……………(五八)

リヴァールに於ける東郷大將……………(五四)

今日の訪問者東郷大將と乃木大將……………(五五)

濫面の戦士……………(五七)

眞の英雄……………(五九)

興味深き三人……………(五一)

戴冠式出席の日本代表者……………(五二)

沈黙の叙事詩……………(五三)

無言にて碁を闘はす……………(五三)

戴冠記念夜會……………(五四)

スピセットに於ける觀艦式上の壯觀……………(五六)

式前の拜觀……………(五六)

溢れたる活氣と色彩の妙……………(五八)

艦列内を航行す……………(五九)

外國軍艦……………(五一)

皇帝陛下御到着……………(五三)

艦橋上の皇帝陛下……………(五四)

東伏見宮殿下の御演説……………(五四)

東郷海軍大將の演説……………(五七)

東郷乃木兩大將少年團を檢閲す……………(五七)

パロウの祭、日本海軍將校の訪問……………(五八)

日本海軍の勇士、ラーセスタア訪問……………(五九)

東郷大將レイキ地方に来る……………(五九)

東伏見宮殿下御歸國遊ばさる……………(五九)

東郷大將……………(五九)



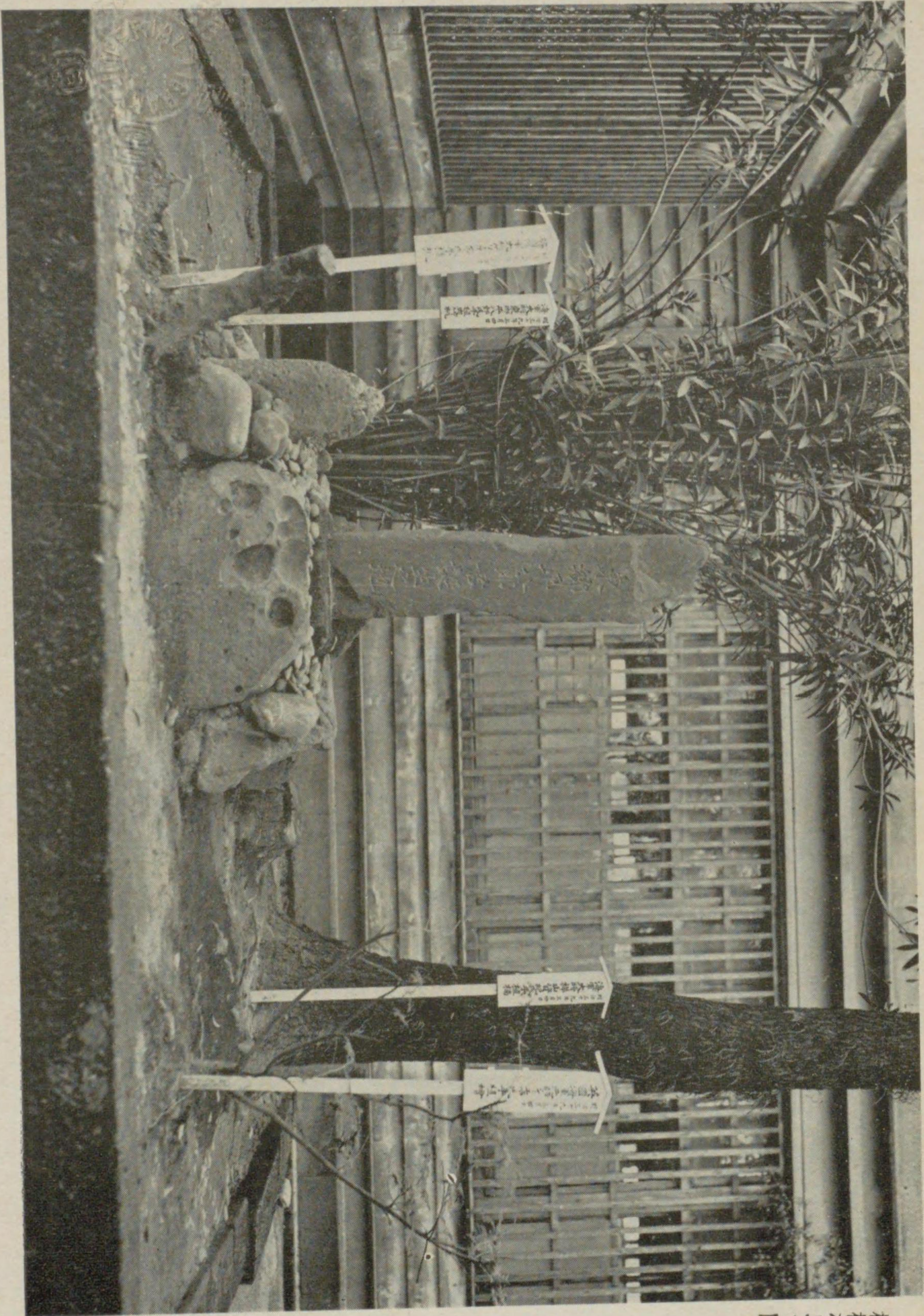
寫眞及筆蹟

目次

東郷海軍大將訪問す……………	(五五)
日本水兵接待……………	(五七)
日本軍艦グリノックに到着……………	(五九)
東郷海軍大將……………	(六一)
東郷伯スコットランド訪問……………	(六〇)
東郷海軍大將ロシスを訪問す……………	(六二)

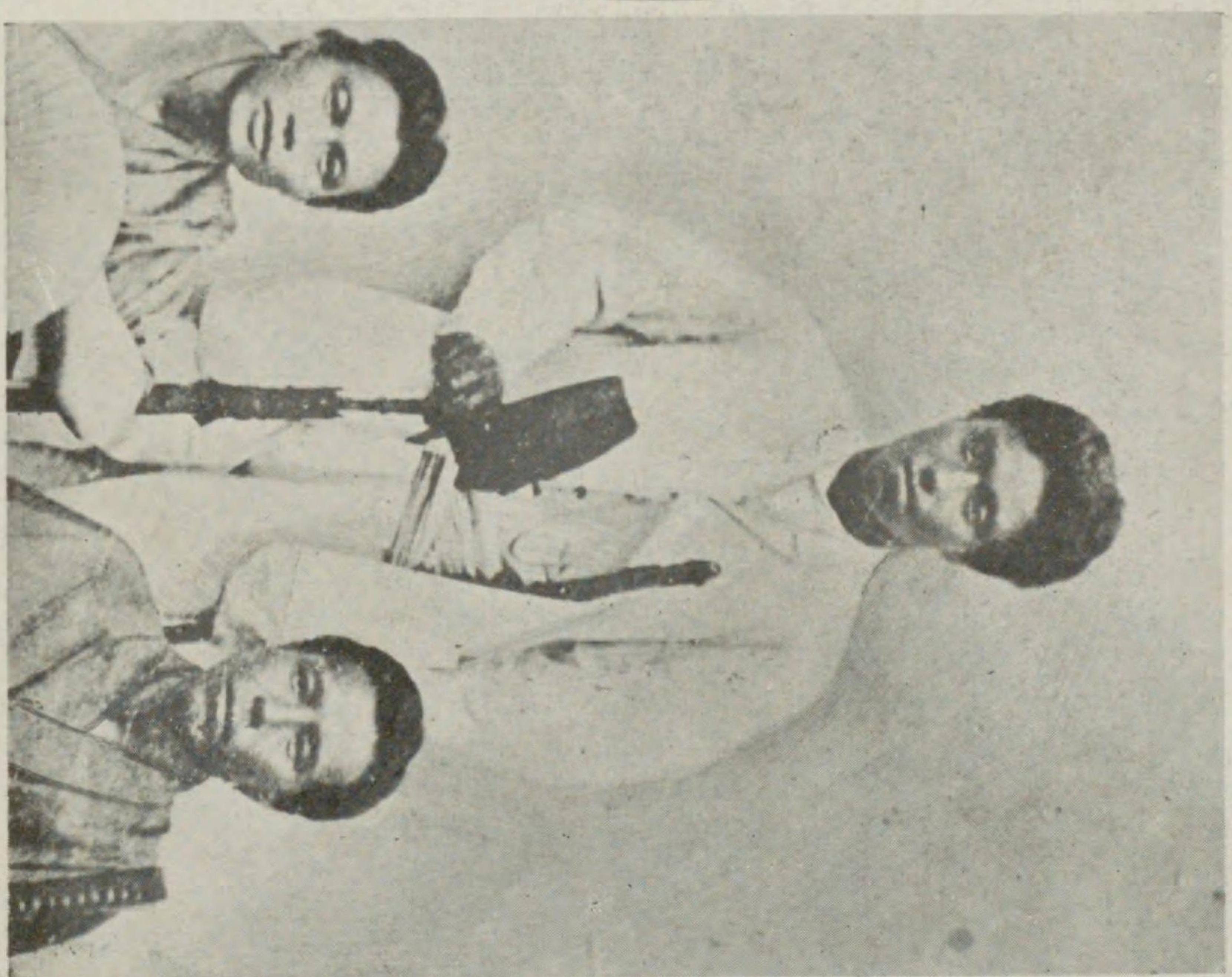
目次終



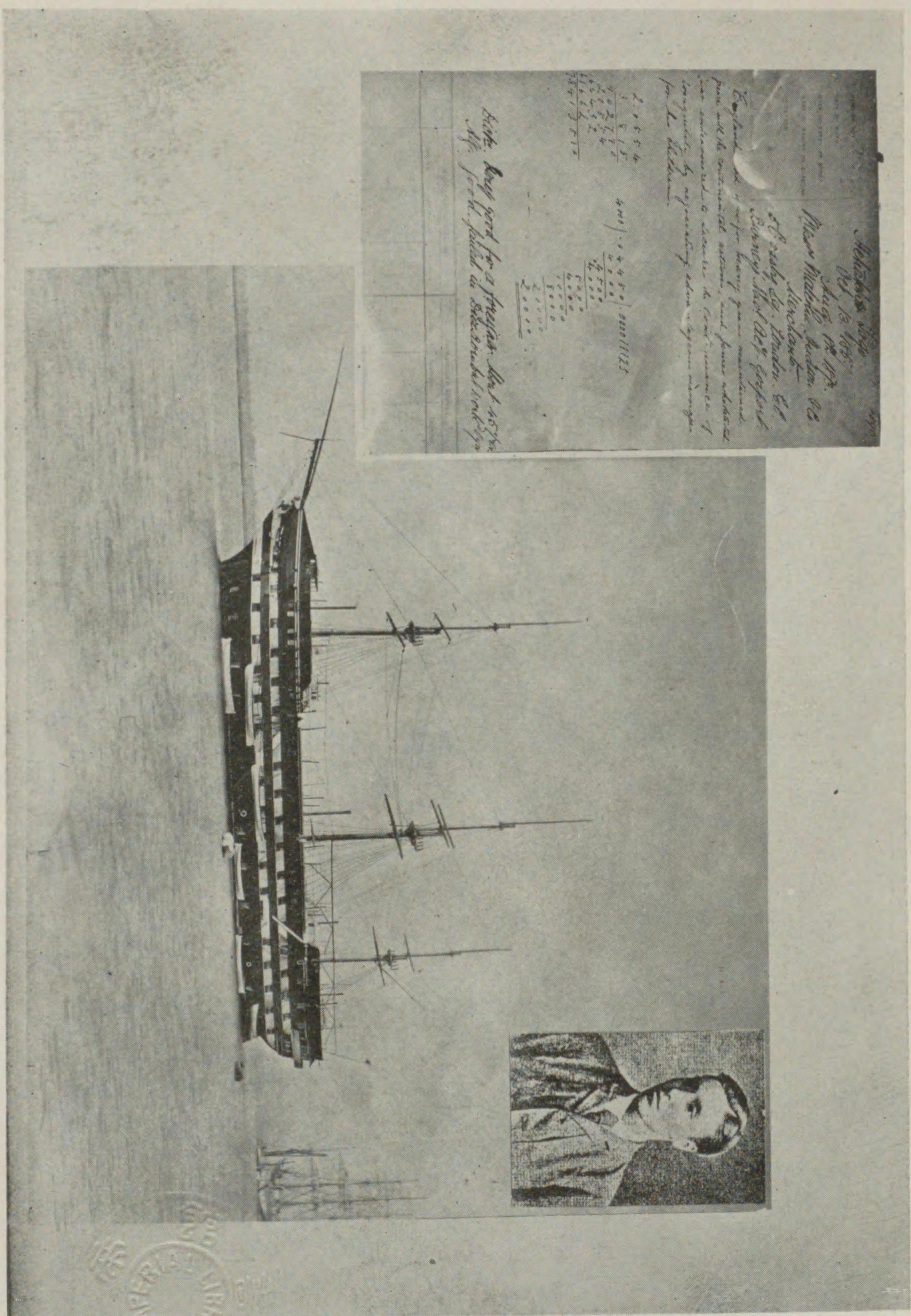


東郷元帥の誕生地は鹿兒島市加治屋町縣立第一高等女學校内にあり。各名士の手  
植樹を以て圍まる



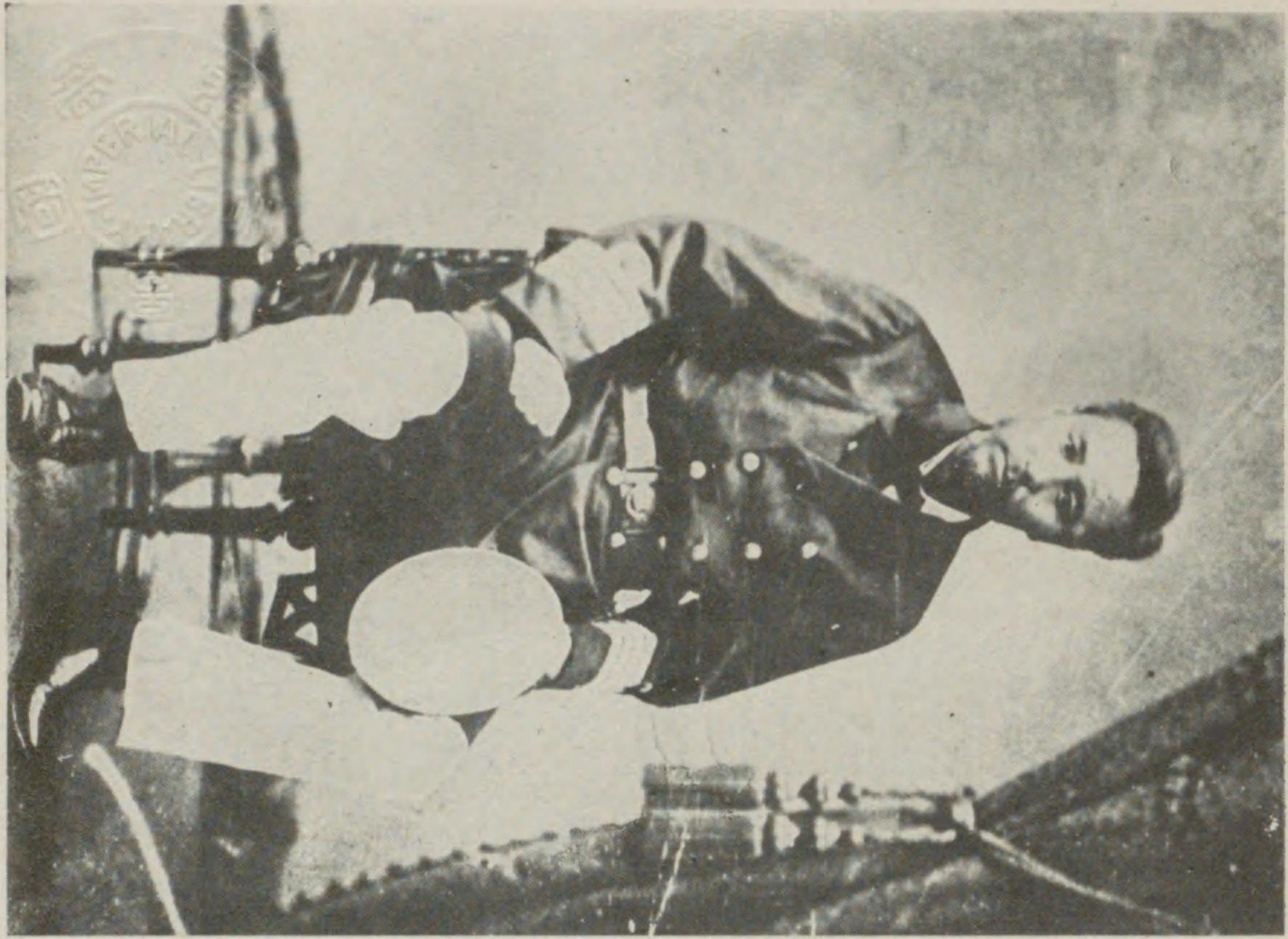


(右) 明治二年三月春日艦東京灣に入りし際の撮影、立てるが元帥(當時春日乗組、三等士官二十三歳)右は同乗組軍醫長前田敏吉、左が同艦長赤塚源六

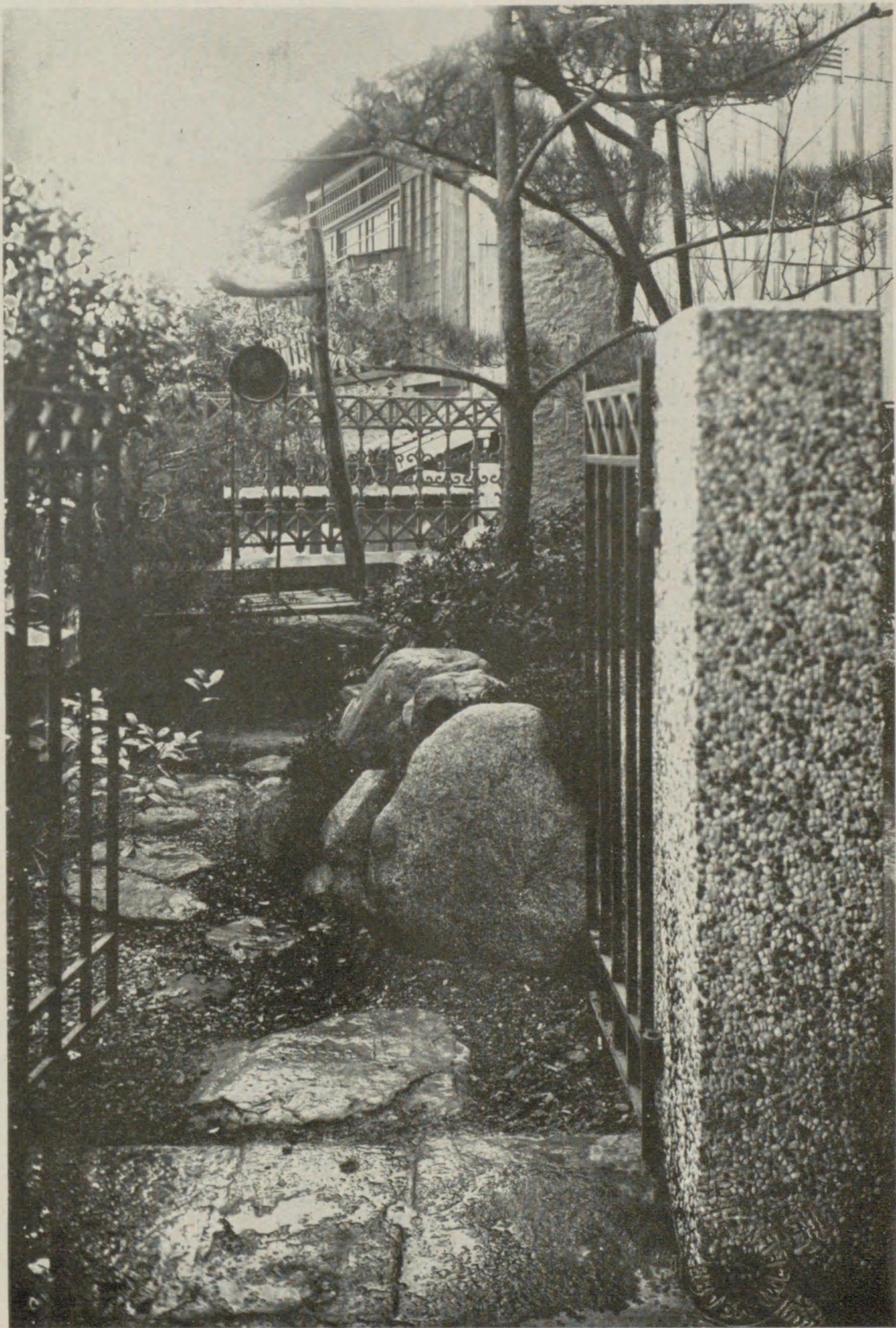


(右) 明治六年(二十七歳)の東郷平八郎(中)練習艦リスマス1号(左)同船に於ける試験の答案書



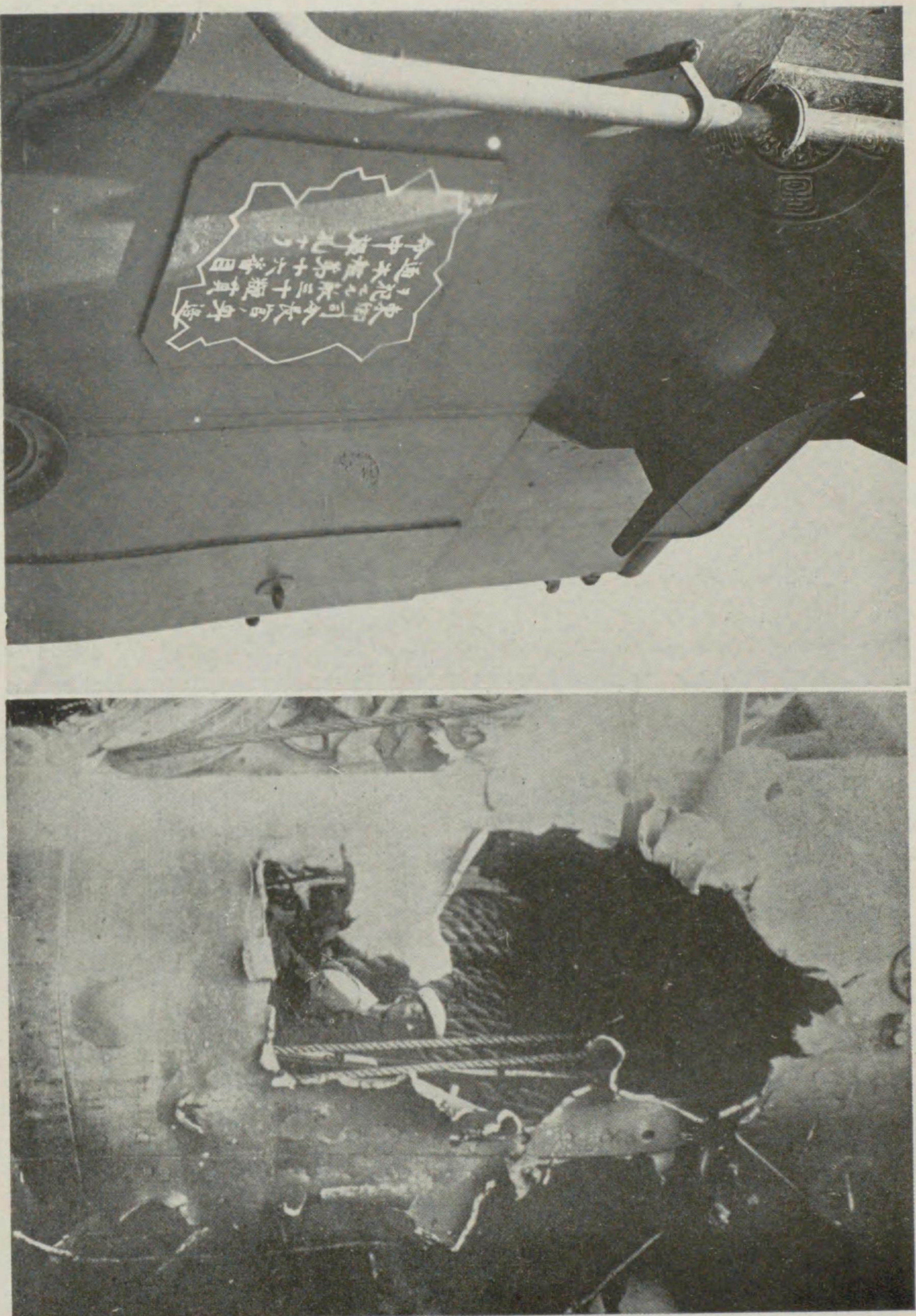


(左) 浪速艦乗組員の一部、前列より二列目向つて左より一番目加藤友三郎氏、  
同三番目東郷艦長(明治廿七年)  
(右) 明治二十七年浪速艦長たりし東郷元帥(四十八歳)

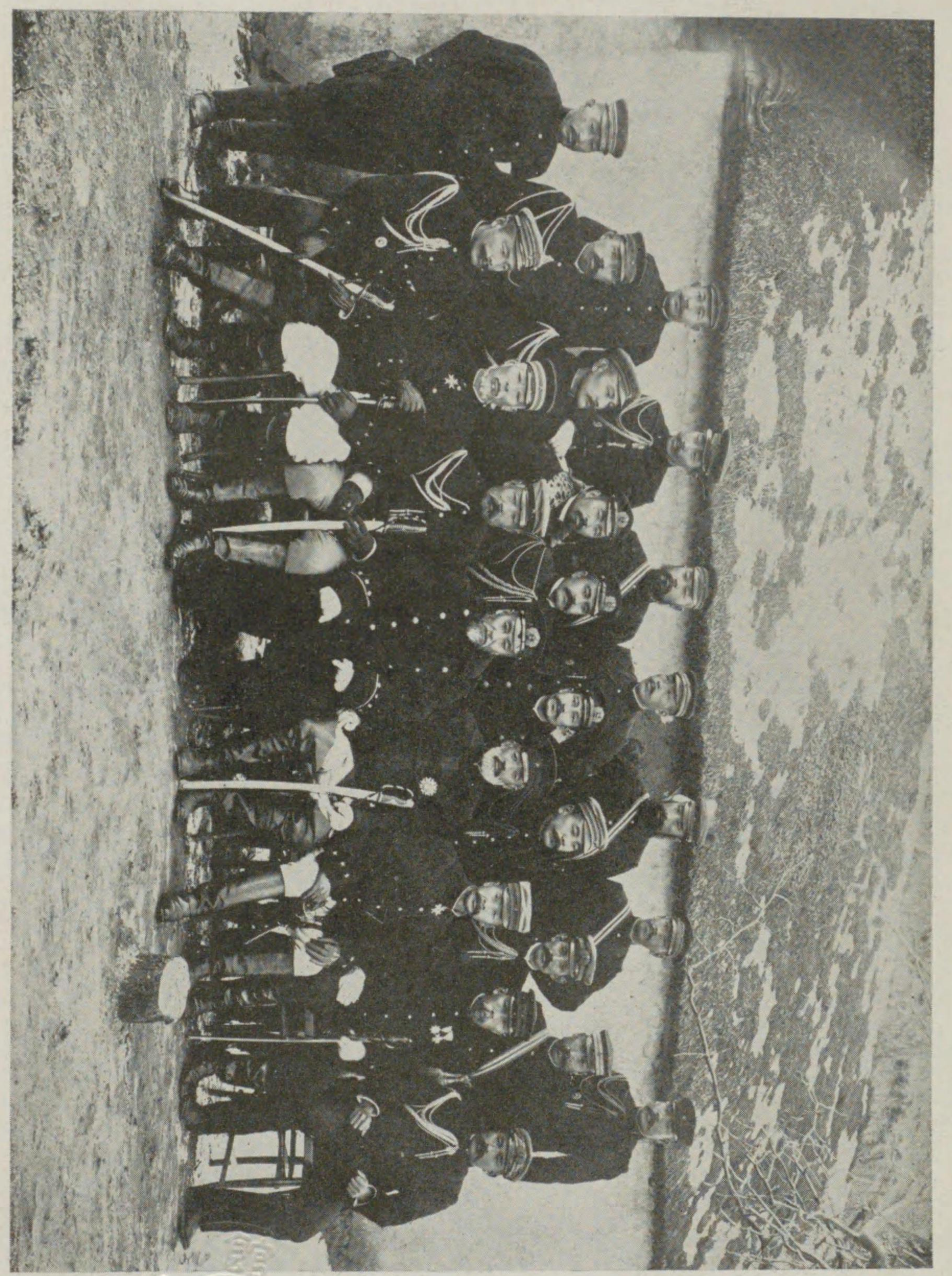


明治八十一年東郷中佐の遺蹟として、大艦軍頃しりた佐中郷東年八十治明  
往しなと園公を近附其はてに在現てり残も今戸井しせなを浴水冷朝毎中在滞程歳  
るらせ稱と戸井郷東めたるす念記を時



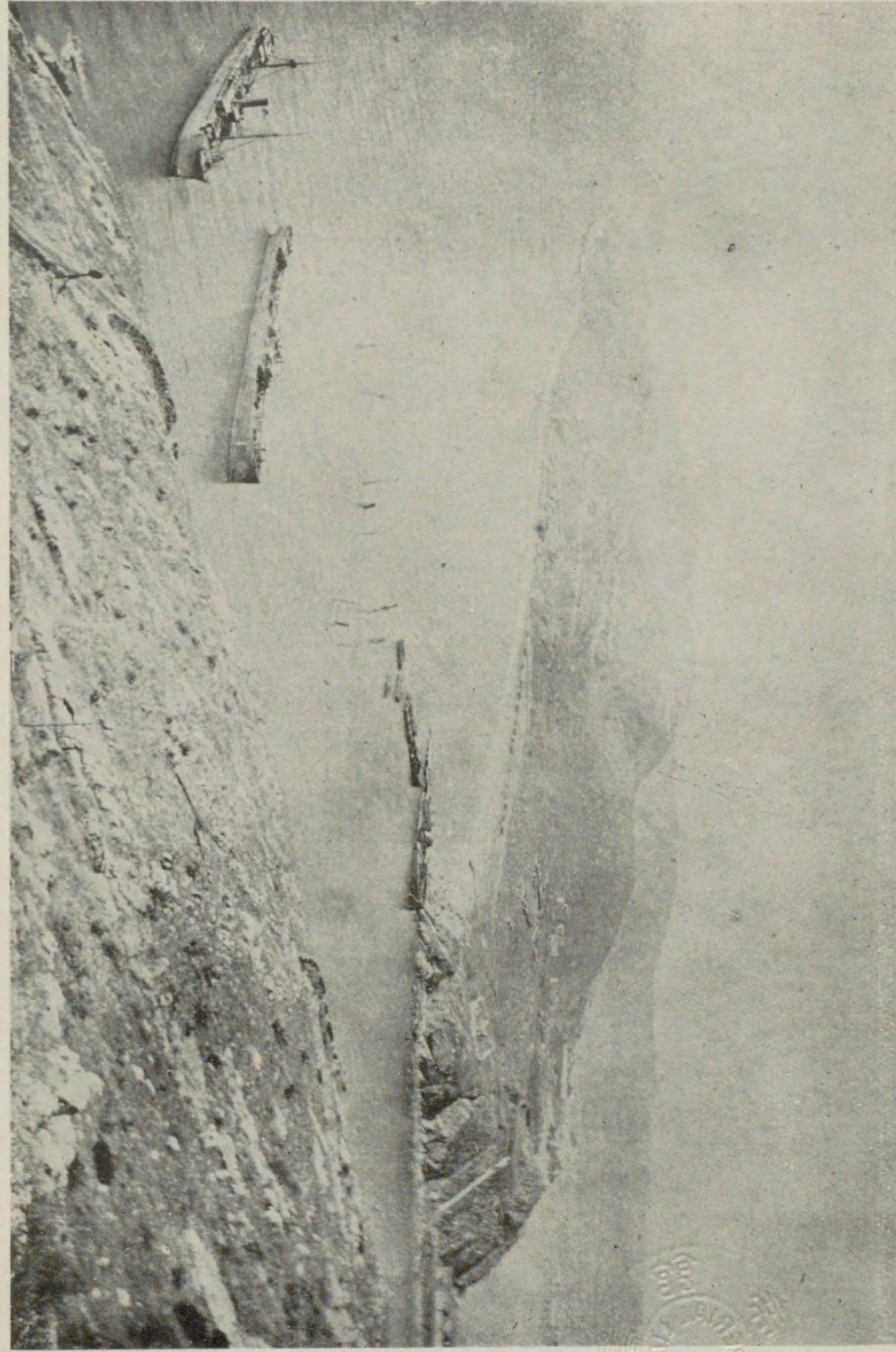


(右) 明治三十七年八月十日黄海海戦に於て破損を受けたる三笠の大橋 (左) 東郷司令長官の身邊に於ける敵三十糎貫通三笠艦十六番自命中彈孔を示す。修復後横須賀にて撮れるもの



明治三十七年十二月、旅順に於て東郷乃木兩將軍會合記念撮影、兩將軍を圍む諸將星



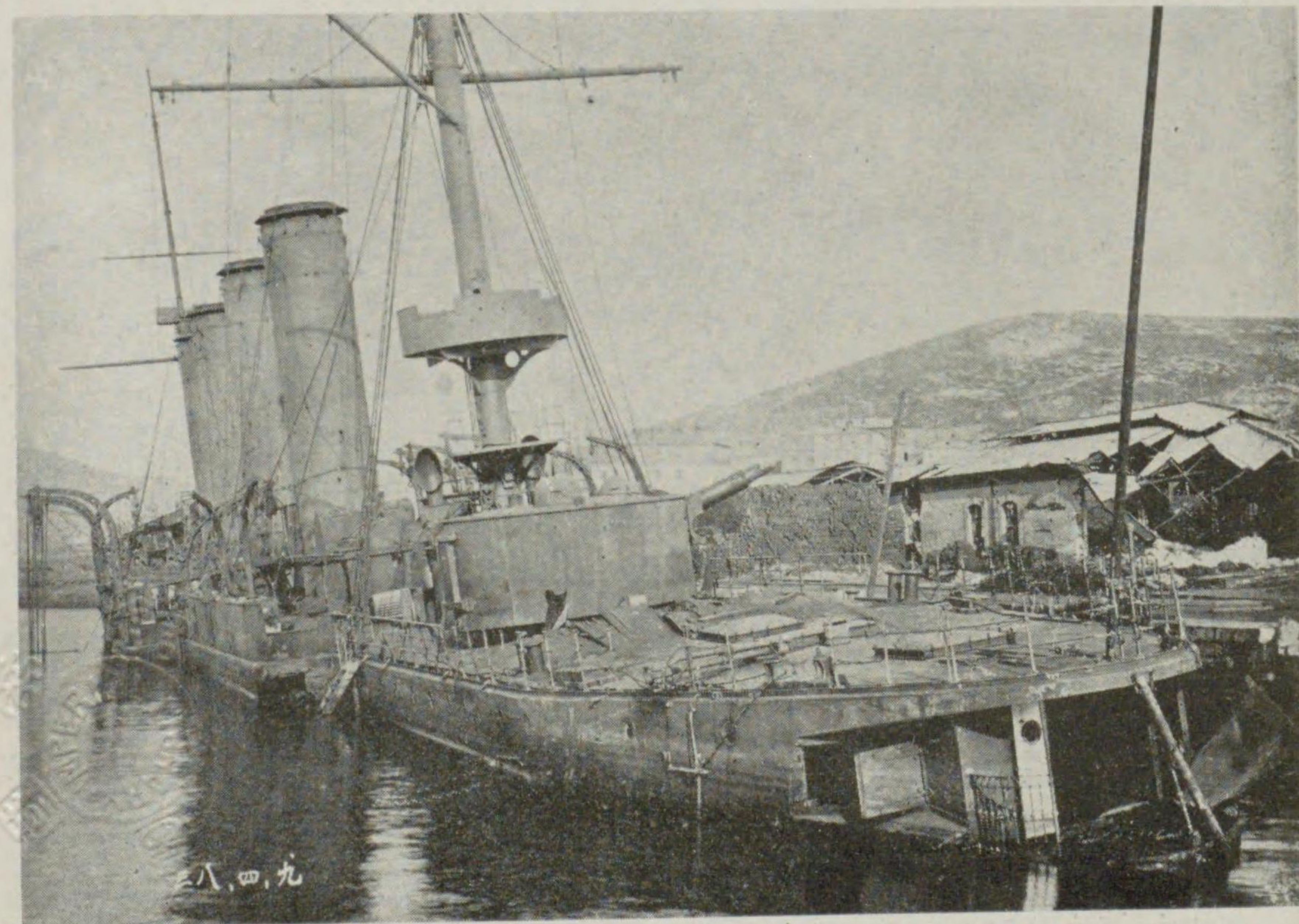
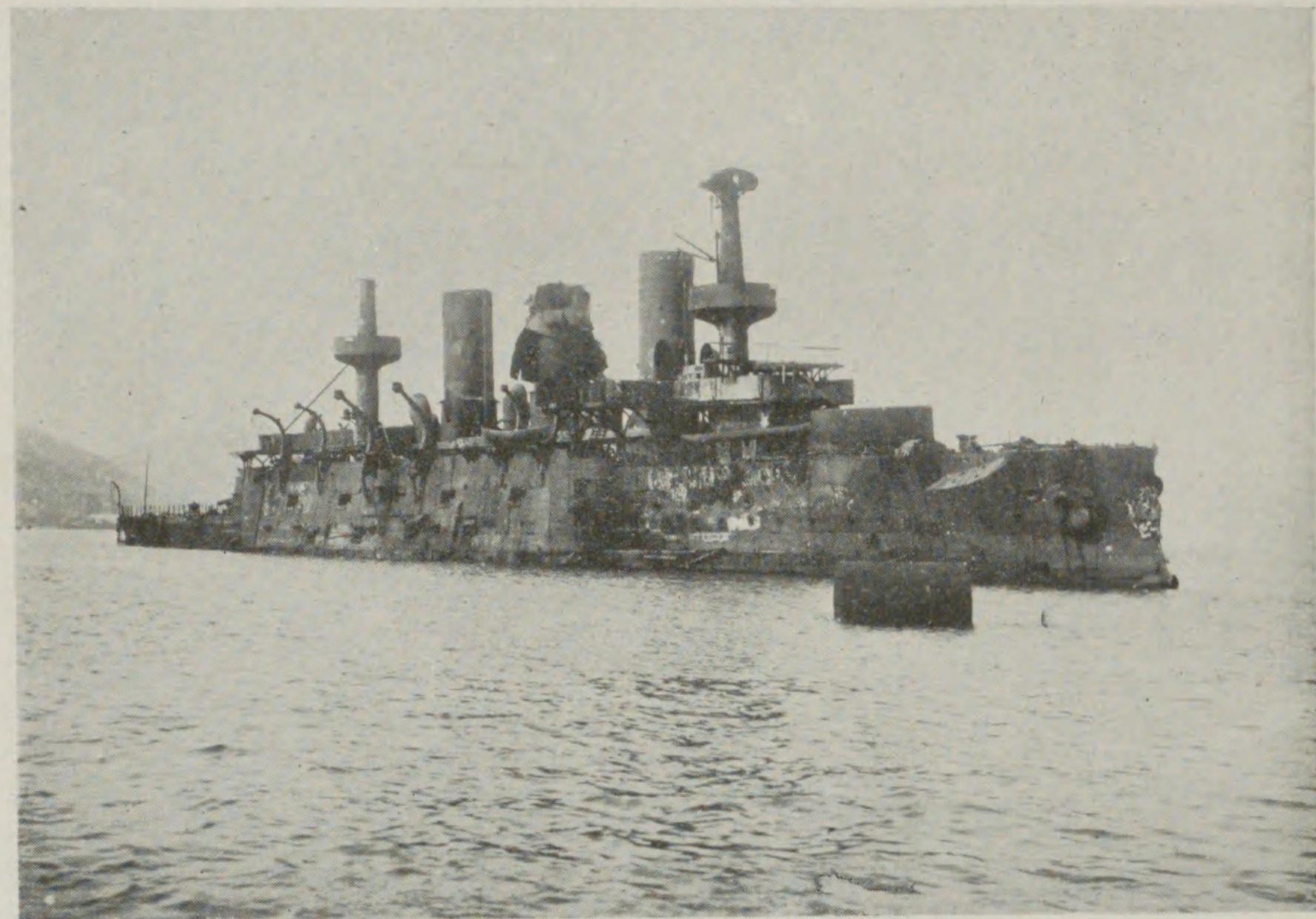


閉塞されたる旅順口、千代丸、福非丸、綱彦丸、米山丸、報國丸等見ゆ



旅順港に捕獲せられたる露艦、右よりメレンスカエイト、ホルタロ、レトウキサゼ、ホビエリダ、バラダの諸艦（三十八年四月八日撮影）





六年八十三治明噸〇七六二一、トーエウスレ艦露容收るせ没沈に内港順旅(上)  
上浮日四廿月六、噸〇〇八七シヤーバ艦露同(下) 上浮日九廿月

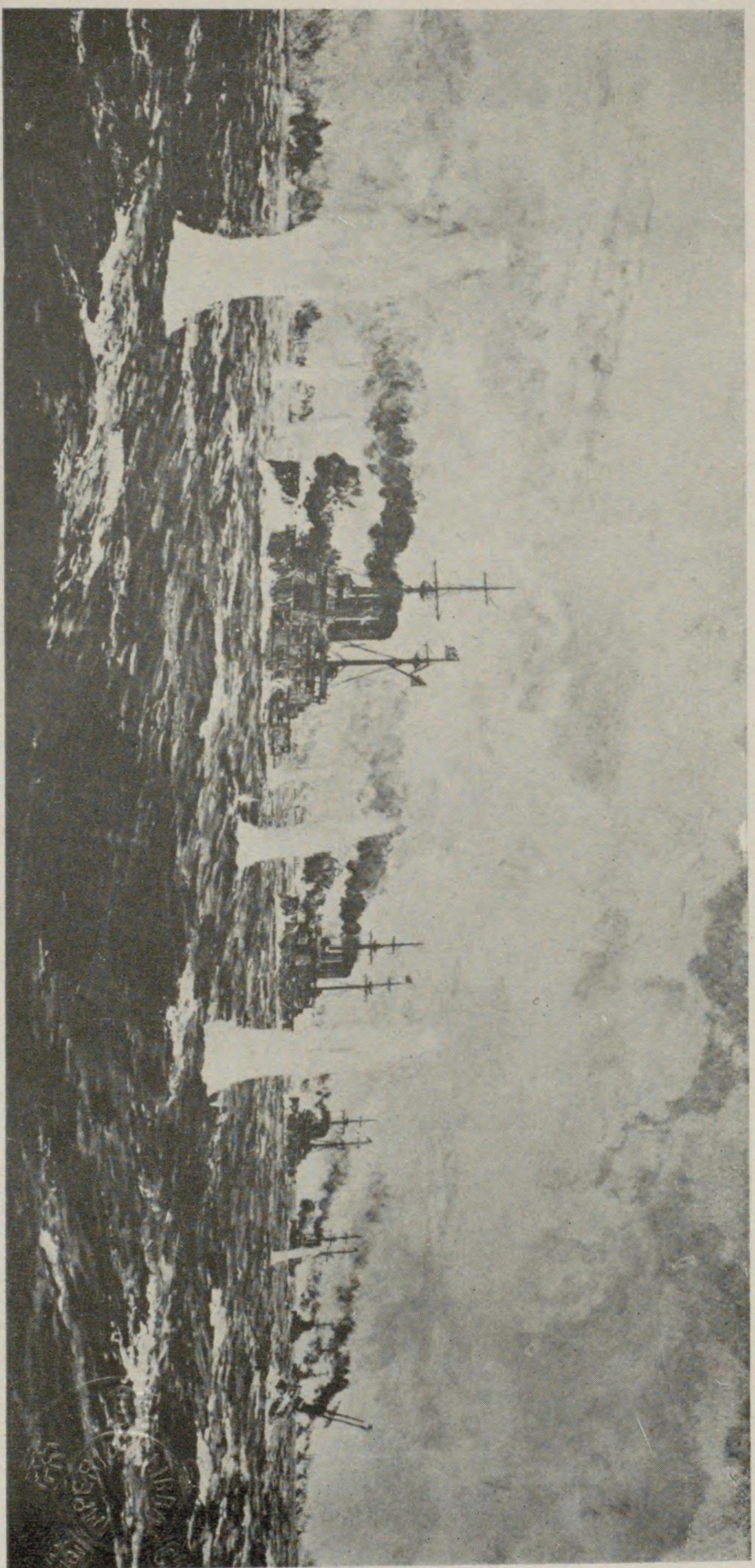


、片彈しせ來飛に下脚の官長令司郷東中戰々海本日七廿月五年八十三治明(上)  
、しべる見てり依に眞寫の下はさき大のそ、のもるたれさ化物置てしと念記的蹟奇  
計時及鏡眼双の用愛官長令司郷東時當戰海と片彈上同(下)





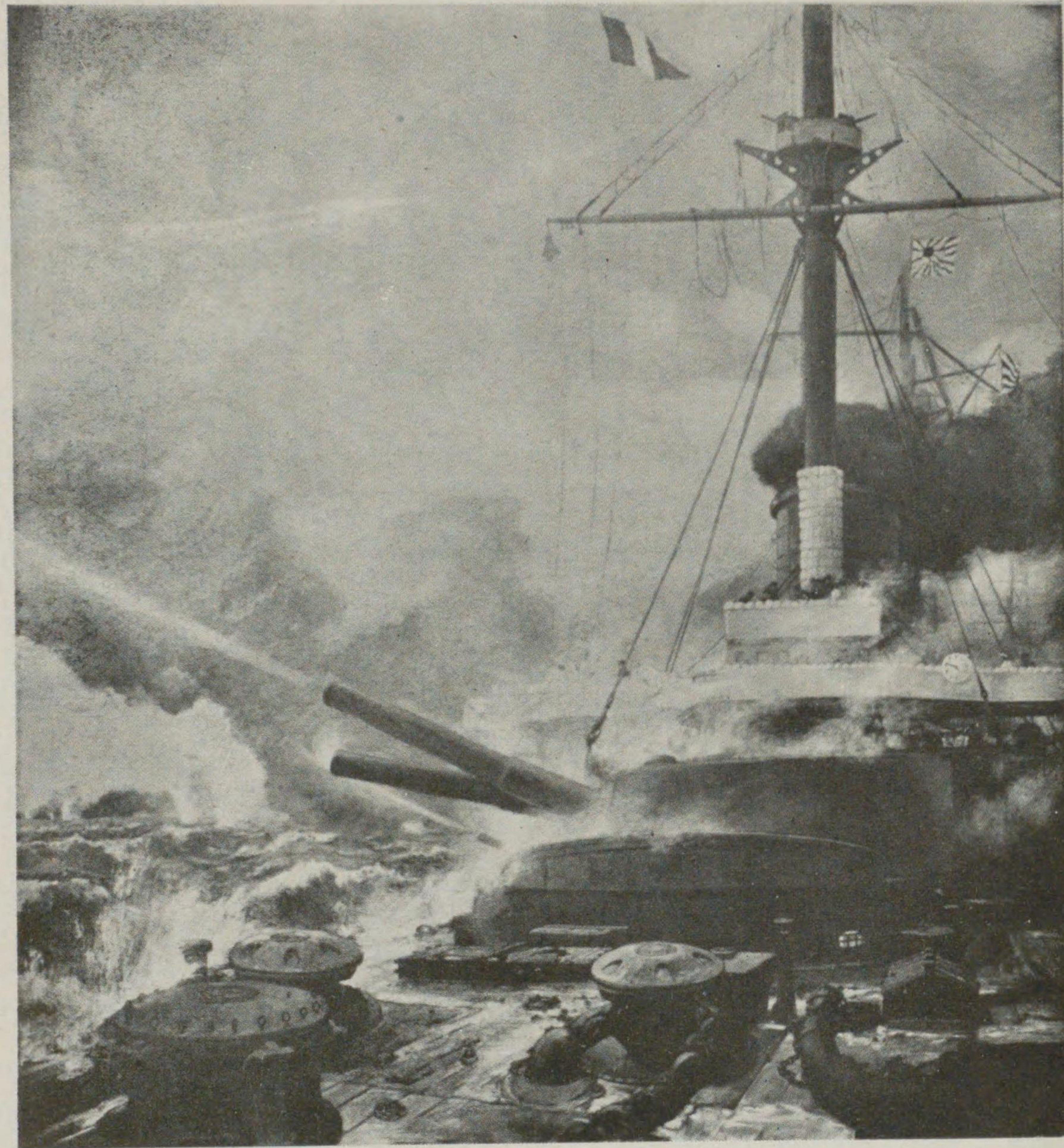
日本海軍直前、麻布狸穴町川村伯爵に於て海軍將校送迎會催さる、前列向つて右より二番目柴山大將四番目東郷大將、六番目上村大將、後列左より樺山伯、伊東元帥、島津忠濟伯、島津伯、松方正義伯、島津男



りよ繪油作郎大鑑城東

景光の時戦附頃分十四時二後午





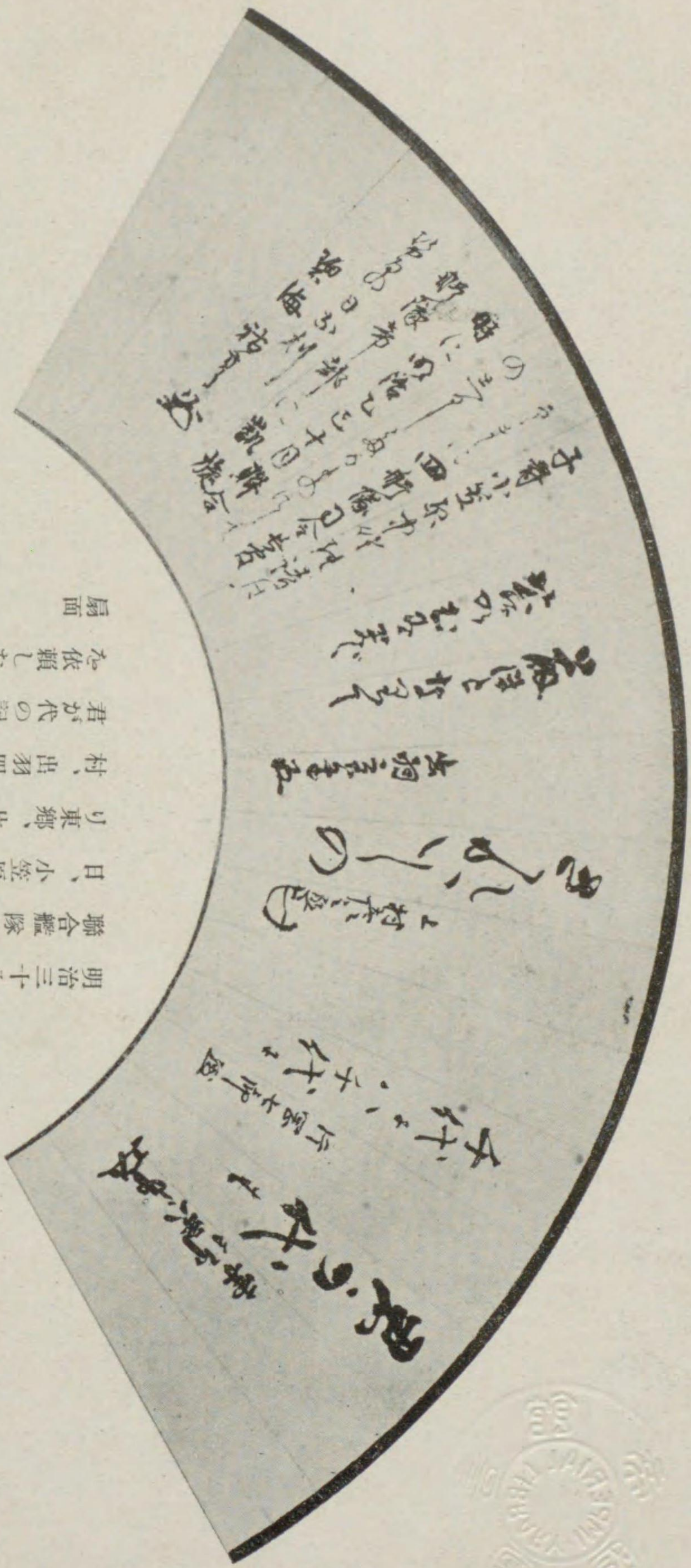
巨弾縦横に迸り火柱林の如く跳り百雷一時に轟くかと思はるゝ午後二時四十分頃の戦ひ愈々酷なる時、言語に絶せる壯絶又凄惨なる當時の歴史的状況を積年の苦心に依つて描ける中村不折畫伯の三笠艦奮闘の油繪

畫伯がこれを描くためには、海軍省の厚意に依り軍艦に乗り演習を具さに見學したる上、畫筆を執りたりといふ。(聖徳記念繪畫館壁畫)

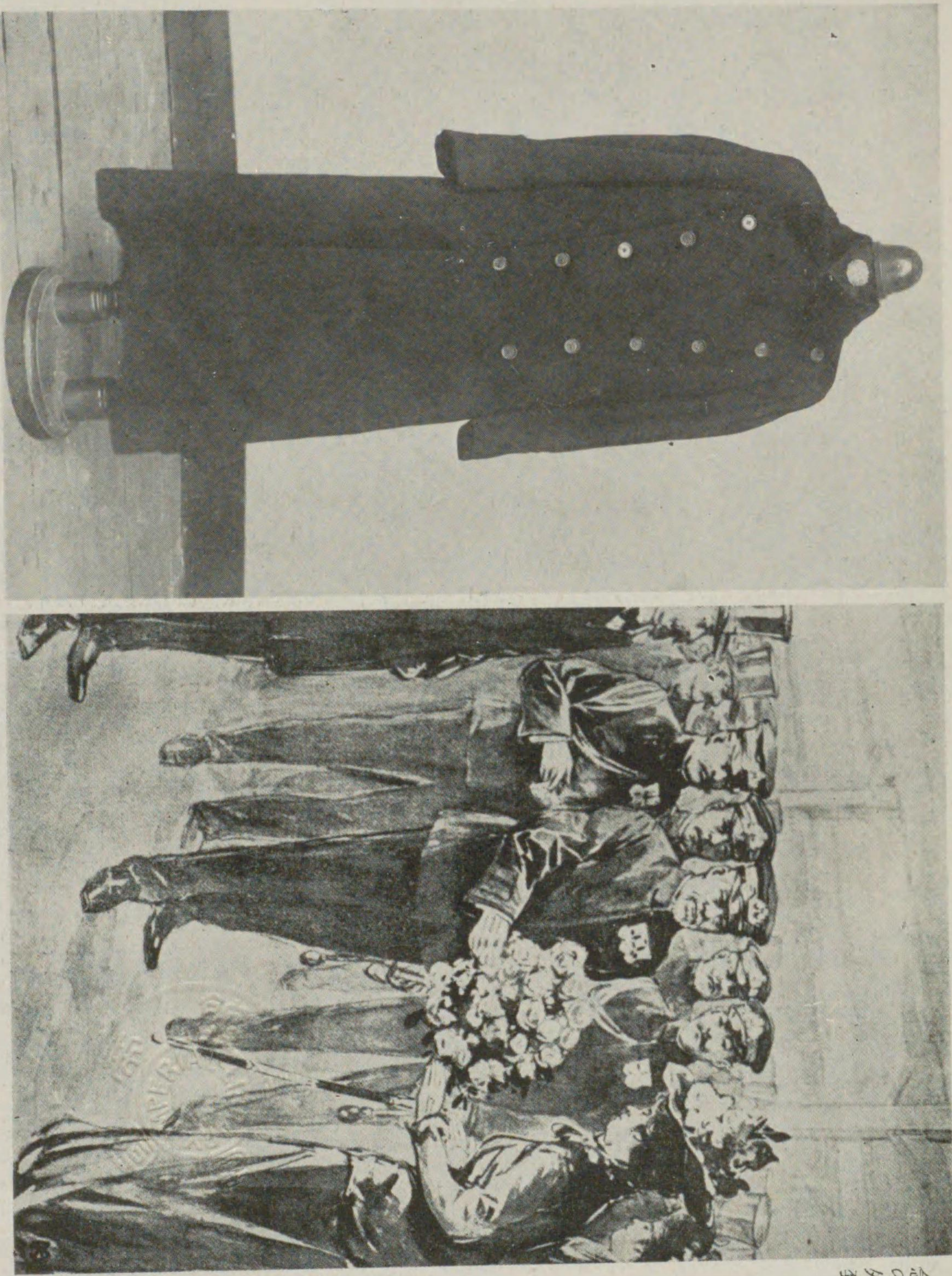
部 長	次 長	作 戰 班	課 報 班
五月廿七日	日午七時	電報譯	受信者 司令部
日午七時	四十分	聯合艦隊ハ直ニ出動之ヲ擊沈滅セントス本日天気晴朗	發信者 聯長
局發	本部著	聯合艦隊ハ直ニ出動之ヲ擊沈滅セントス本日天気晴朗	海軍

右印の段上、文譯の報快の史歴の電着に部令々軍海分十四時七前午日七廿月五謀參部財がソイサの筆給、郎太源下山、長次郎五院集伊、享祐東伊長部令軍リ



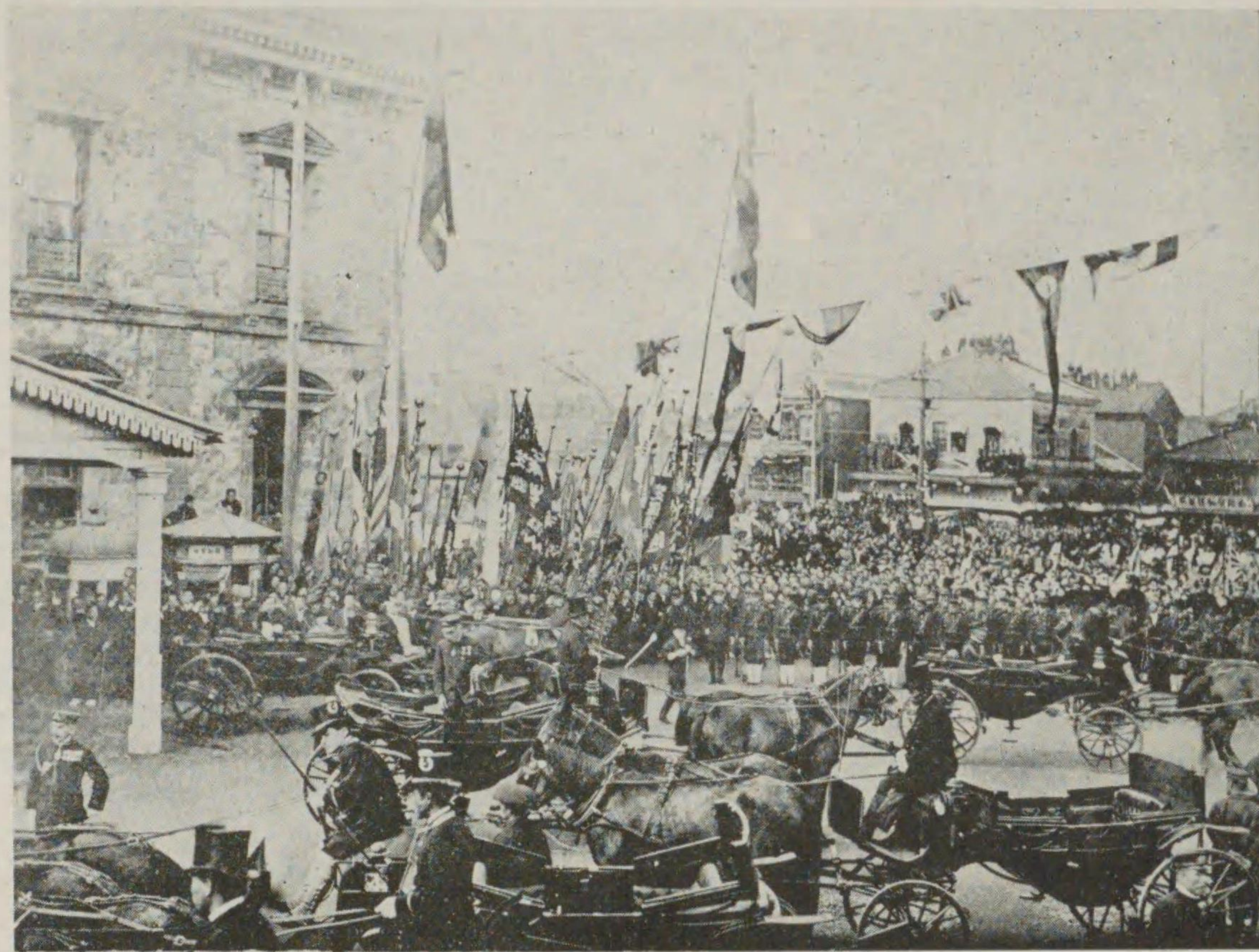


明治三十八年十月  
 聯合艦隊凱旋當  
 日、小笠原中佐より東郷、片岡、上村、出羽四將軍に君が代の記念撰送を依頼したる折の扇面

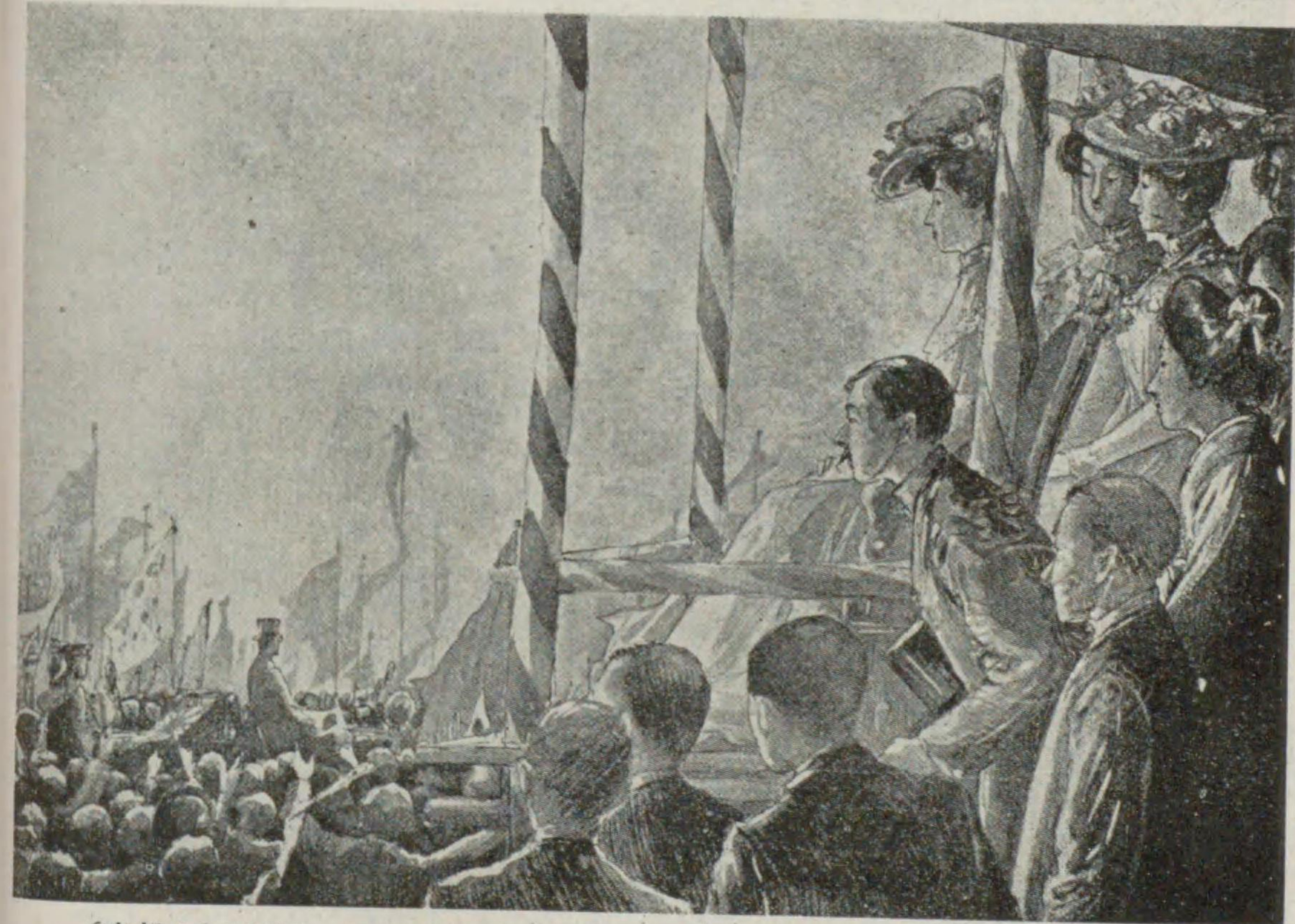


(右) 明治三十八年十月廿二日、東郷大將は海戦の經過を陛下に伏奏せられたる上村中將以下を隨へて新橋に着するや鍋島侯爵夫人は海軍協會婦人部を代表し花輪を献けたり(木村光太郎畫) (左) 日露海戦當時東郷司令長官の着用したる記念の外套





況盛大の迎歡京入旋凱上同(下) 着驛橋新旋凱の下以官長令司隊艦合聯(上)

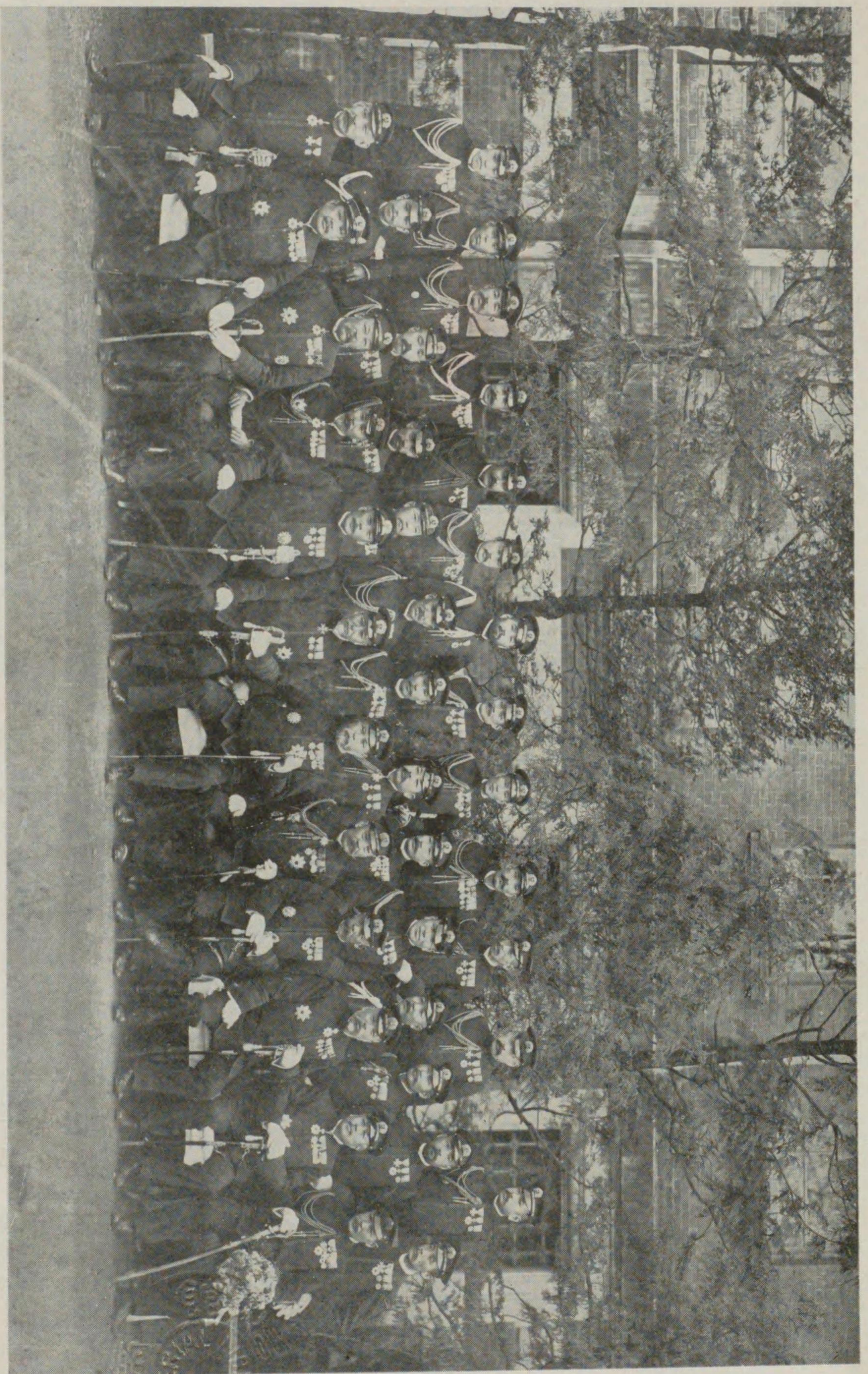


(畫郎太鉦城東) づ詣に廟大勢伊め停に灣勢伊を隊艦中途の旋凱は將大郷東(上)  
 の旋凱の將大郷東て於に櫓樓の前門省軍海下殿妃宮各及王親内兩日二十月十(下)  
 (畫觀國竹尾) ふ給せばなそ見を容威

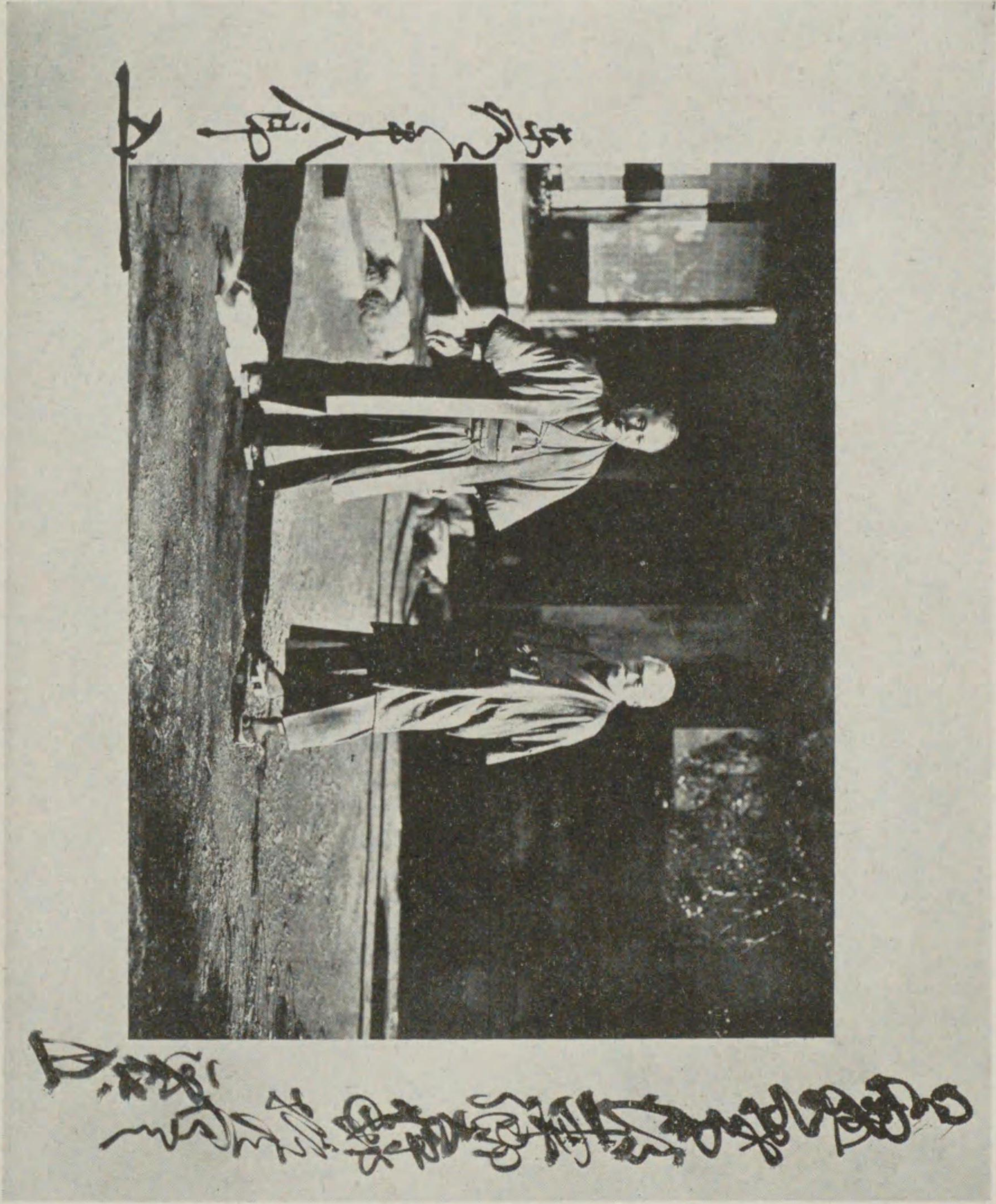


前列向つて右より  
 山下軍令部参謀 木佐木人事局々員 谷口軍令部参謀  
 齋藤次官 船越人事局々員 田中軍令部参謀  
 出羽第四艦隊司令長官 江頭軍令部参謀 平賀軍令部参謀  
 片岡第三艦隊司令長官 永田聯合艦隊副官 上臈軍令部参謀  
 伊東軍令部長 高木軍令部参謀 小笠原軍令部参謀  
 山本大臣 名和人事局々員 竹内軍令部参謀  
 東郷聯合艦隊司令長官 加藤聯合艦隊参謀長 財部軍令部参謀  
 上村第二艦隊司令長官 藤井第二艦隊参謀長 飯田聯合艦隊参謀  
 伊集院軍令部次長 山本聯合艦隊機關長 佐佐木軍令部副官  
 實吉醫務局長 山屋第四艦隊参謀長 森軍令部参謀  
 村上經理局長 増田軍令部参謀 丸山軍令部参謀  
 橋元人事局長 加藤海軍省副官 佐野軍令部副官

中列向つて右より  
 後列向つて右より



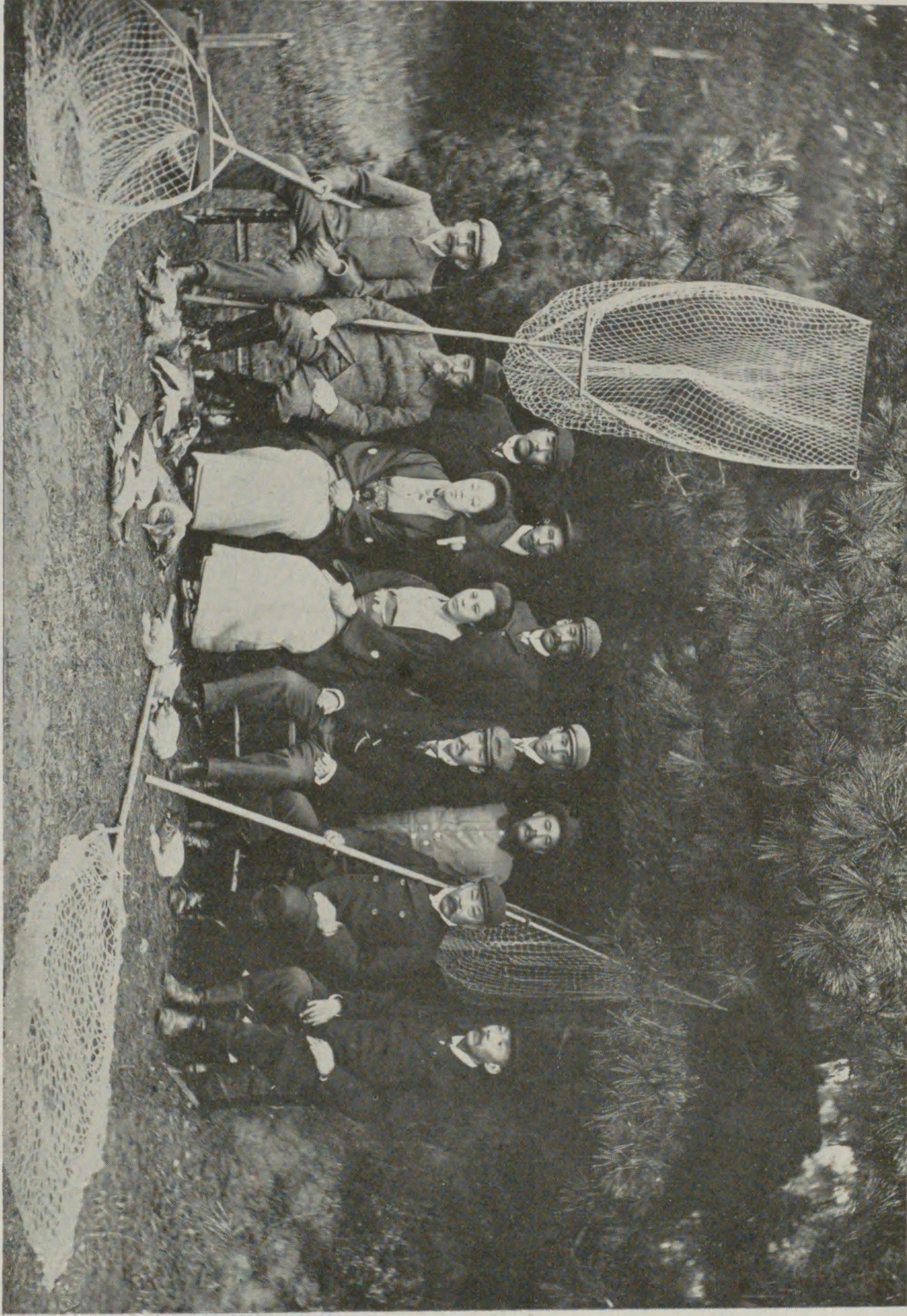




日露戦役後東郷邸に於て前田正名氏と共に記念撮影、元帥と前田氏とは少よりの竹馬の友たり

東郷平八郎

前田正名



明治三十八年十二月六日東郷司令長官慰勞の意にて黒田長成侯の所有地羽根田にて鴨獵を催さる、前列向つて右より寺尾博士、伊東大將、黒田侯爵、東郷大將夫人、黒田侯夫人、東郷大將、伊集院軍令部次長、後列左より長田軍令部副官、黒田家々職、太田貴族院書記官長、小笠原子爵、金山貴族院書記官





明治三十九年英國皇族アーサー・オブ・カンブリッジ親王殿下鹿兒島立寄の際南  
洲翁墓前に於ける記念撮影、前列白髪の人がシームス元帥、中央コンソート殿下  
次が島津忠重公爵、その背後に東郷大將、向つて左が黒木大將、

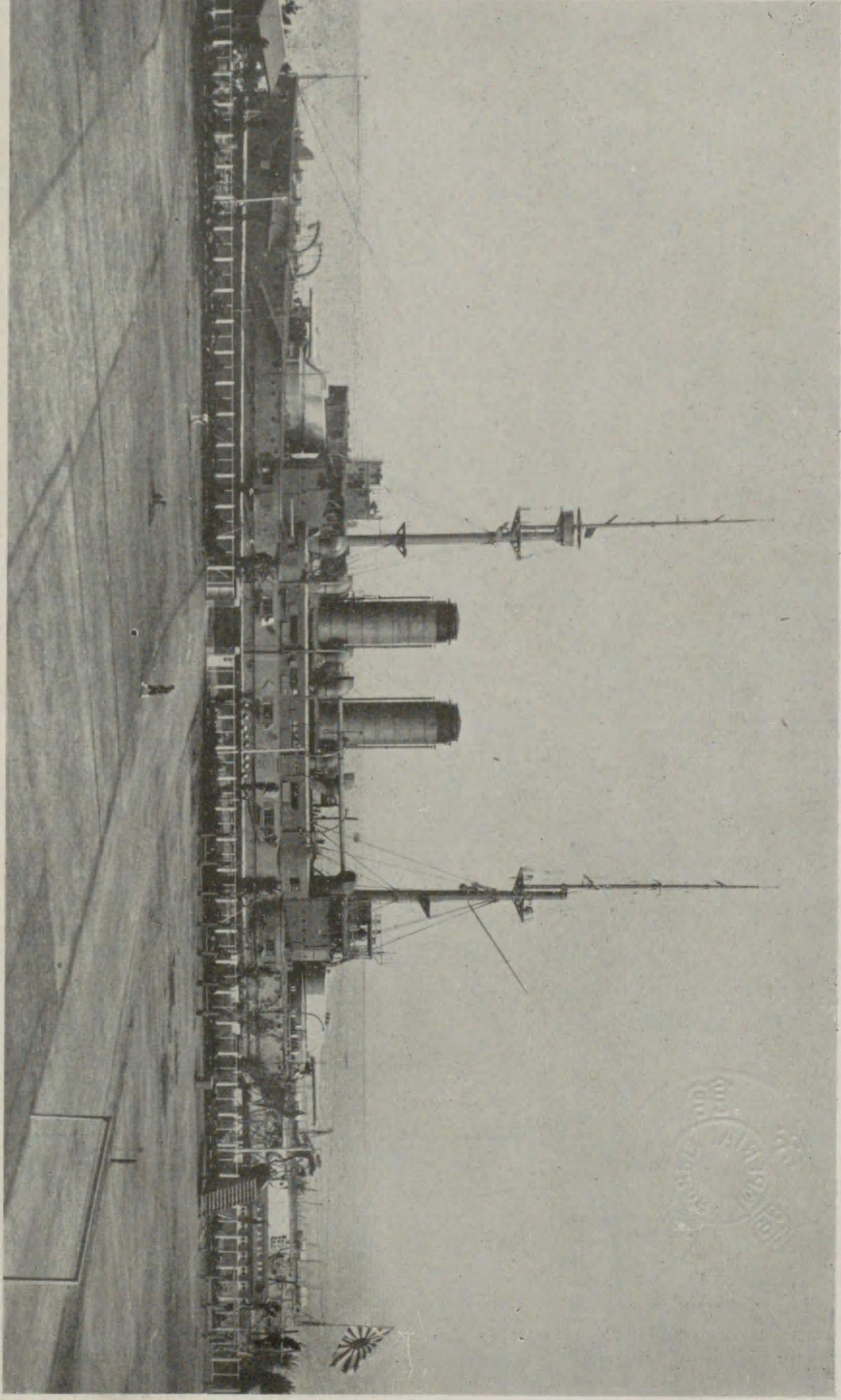


明治三十九年六月、高輪御殿に於て兩内親王御降臨御送別記念撮影にして中央白  
衣を召して立たれたる向つて右が昌子内親王（明治天皇第六皇女）左が房子内親  
王（同第五皇女）の兩殿下、その左が東郷大將、殿下の右側が伊東元帥、中央座  
したる白ズボンの左側が小笠原子爵、其他高位高官の人々

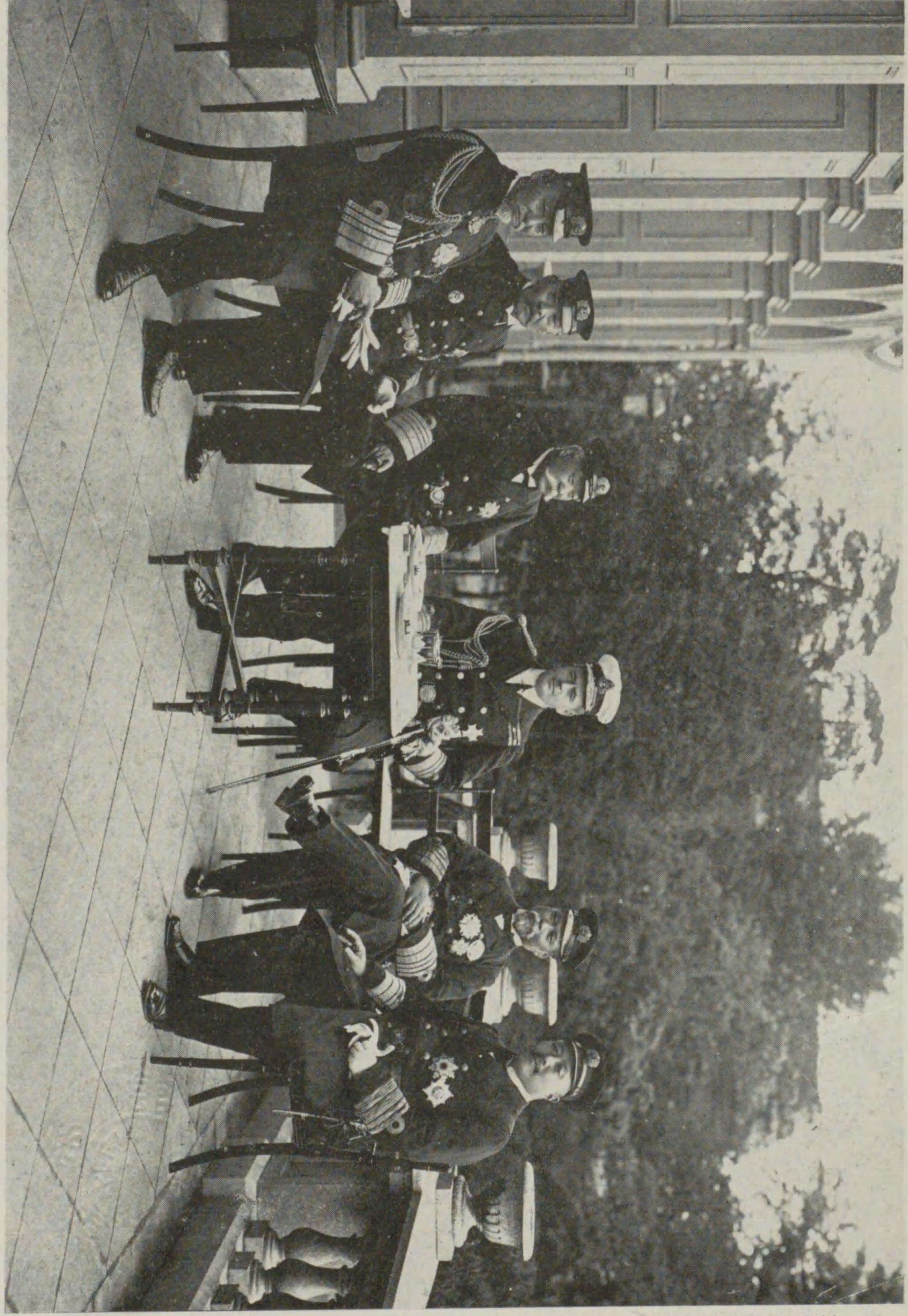








景全艦笠三るたれらせ存保に賀須横



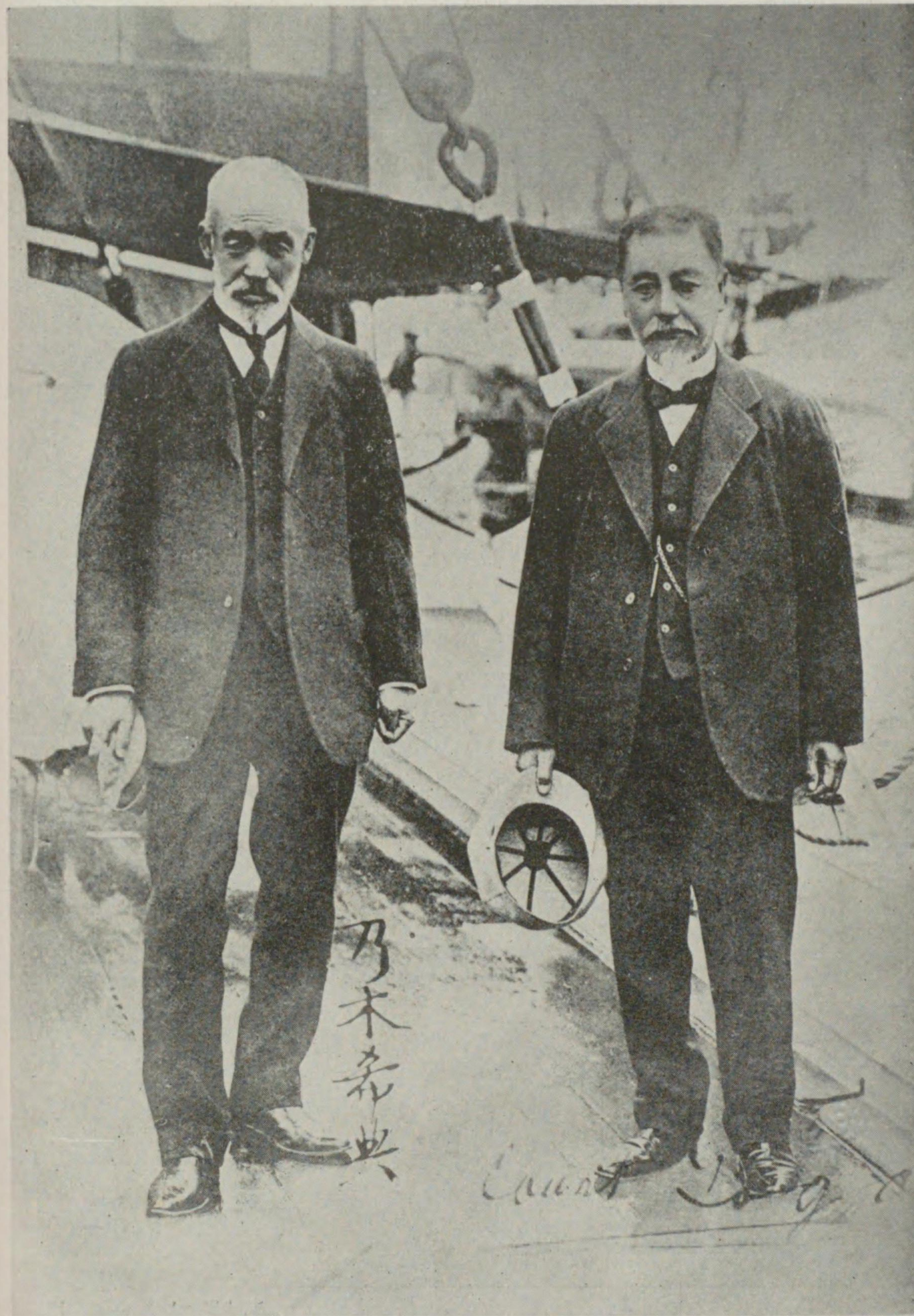
明治四十年元華族會館に於てラントン中將歓迎會記念撮影、向つて右より齊藤海軍大臣、山本大將、英國東洋艦隊司令長官ラントン中將、井上大將、伊東元帥、軍令部長東郷大將。



取馬開の折々を云ふは此の船情  
 之の終る下火酒日し貴味米の海  
 昨夕日本料理の事 致下娘の西  
 一り其地へ行キ後大奴評の事  
 叔又花の盛りの昨今極な事  
 清川少佐の撰歌の境より右の橋  
 也改可披奇好くありし  
 日月廿九日と云ふ事ありし  
 前田老賢光  
 年八月廿九日



明治四十四年四月十三日加茂丸船上より  
 前田正名宛の簡書、署名希典とあり  
 乃木將軍の  
 (下)なる同船甲板に於て清川少佐撮影



明治四十四年英皇國冠式參列のめ出。發  
 加茂丸船上にて乃木東郷兩將軍記念撮影及署名



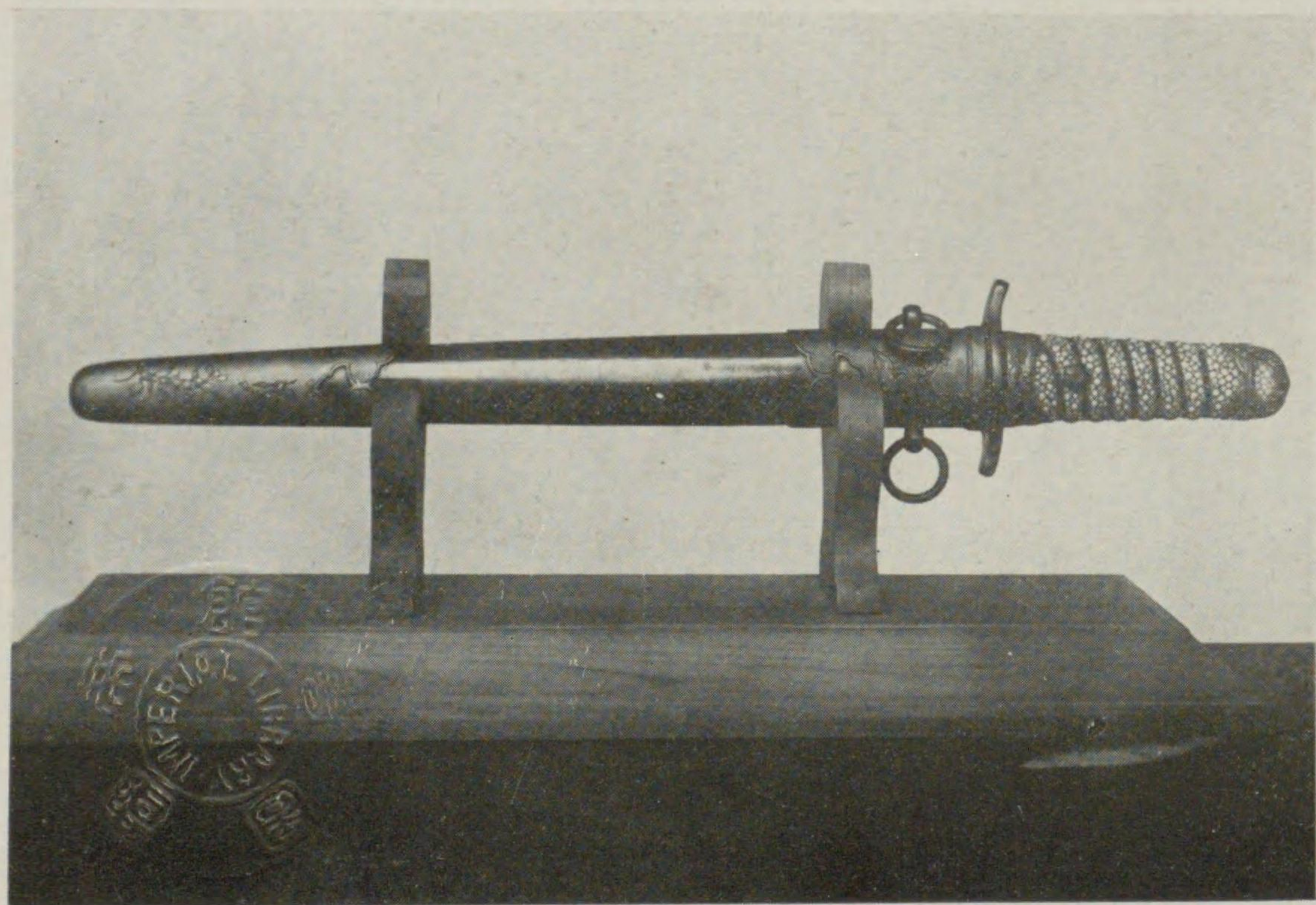
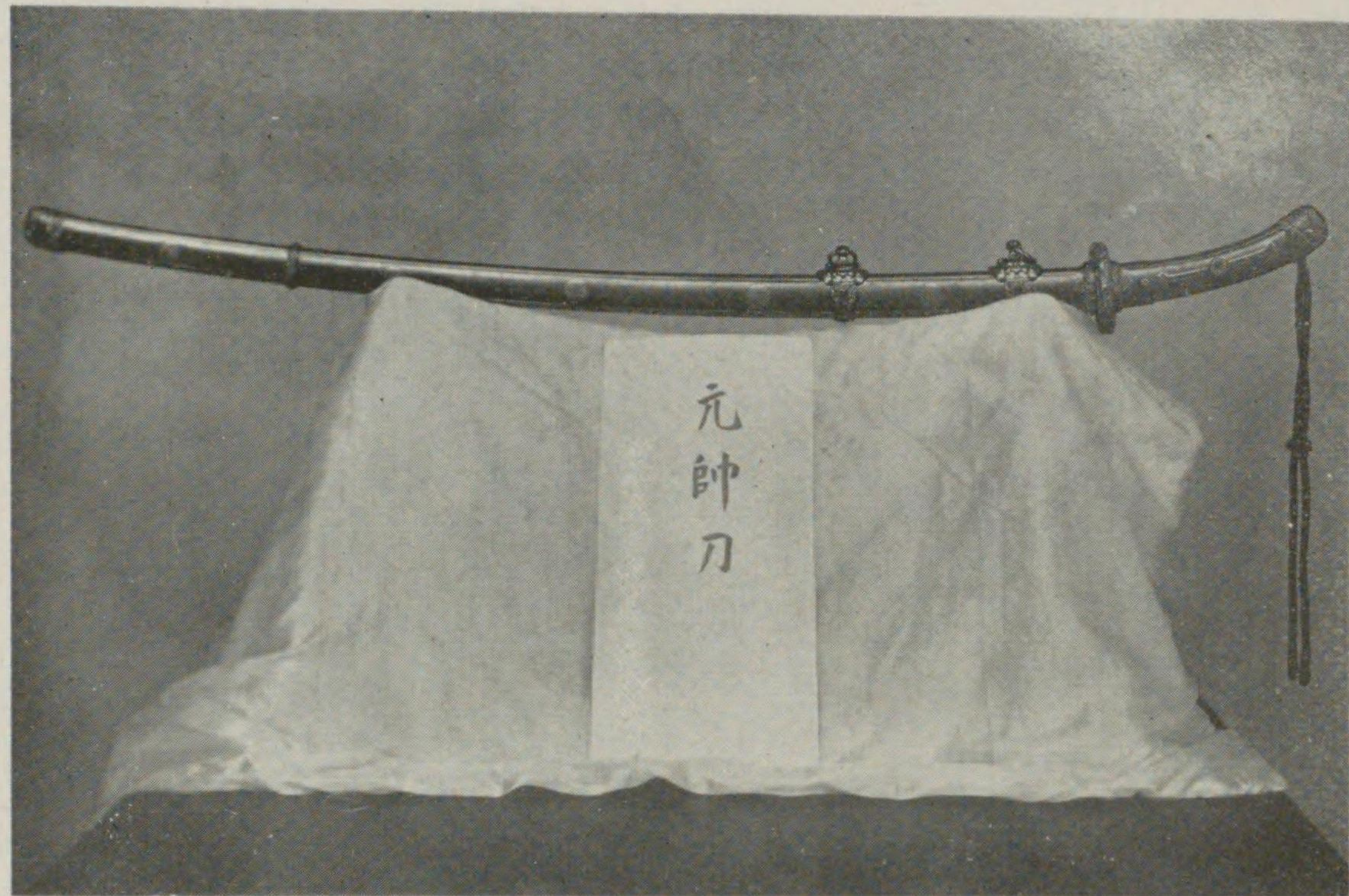


況盛の迎歡衆大着到市ルトヤシ國米將大郷東日八十二月八年四十四治明(上)  
乘同と長市ルトヤシに中車方前、景光の行通市同(下)

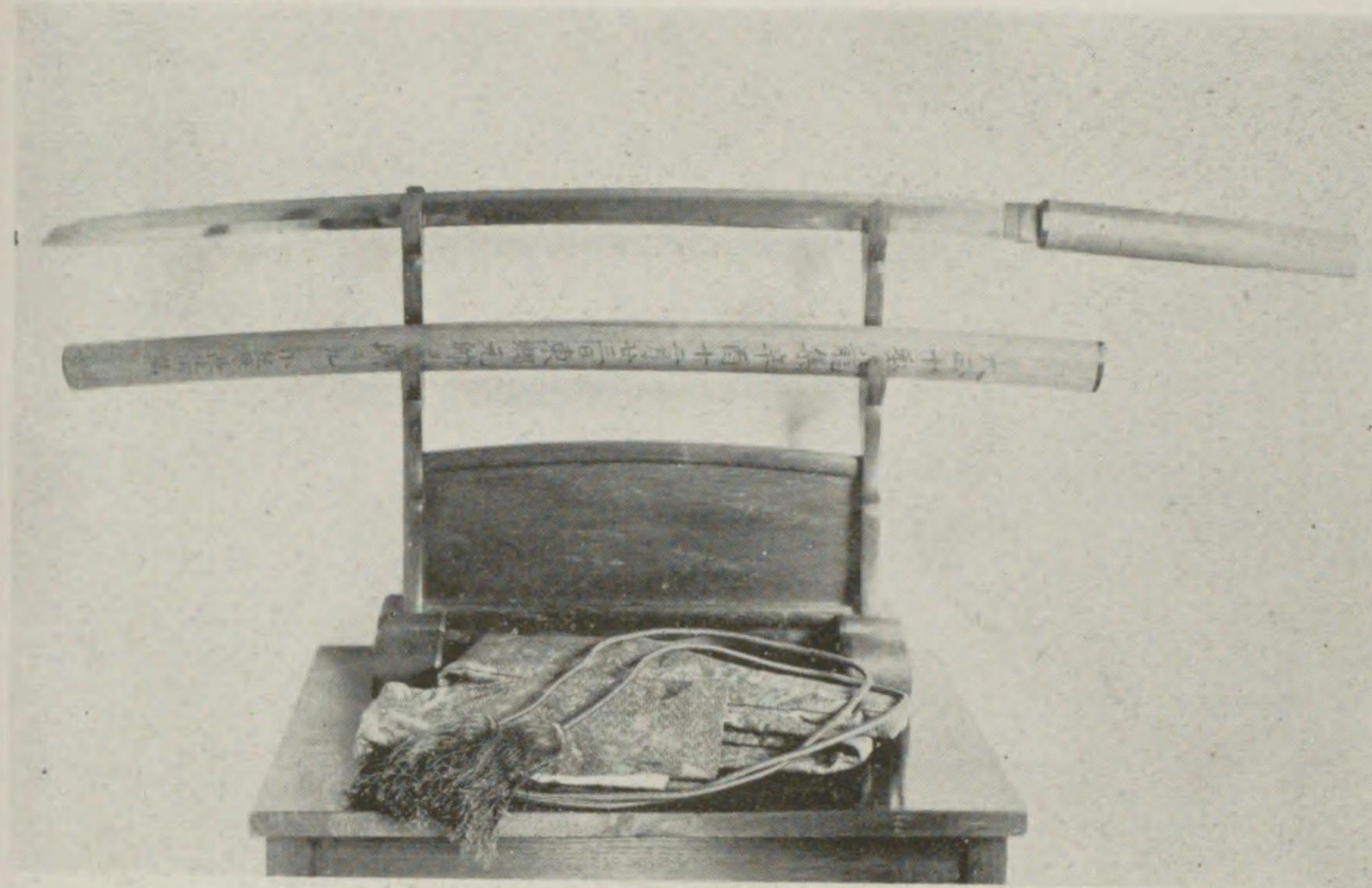


東るせ示訓際の間訪號一タスウのし懐昔てに國英日十三月六年四十四治明(上)  
軍年少敦倫るけにクーパドイハ日一月七年同(下)人夫使大藤加は服白、將大郷  
將大木乃は目人三りよ右、將大郷東るせ閲檢を





刀軍の用佩中時戦露日(下) 刀帥元の用佩帥元郷東(上)



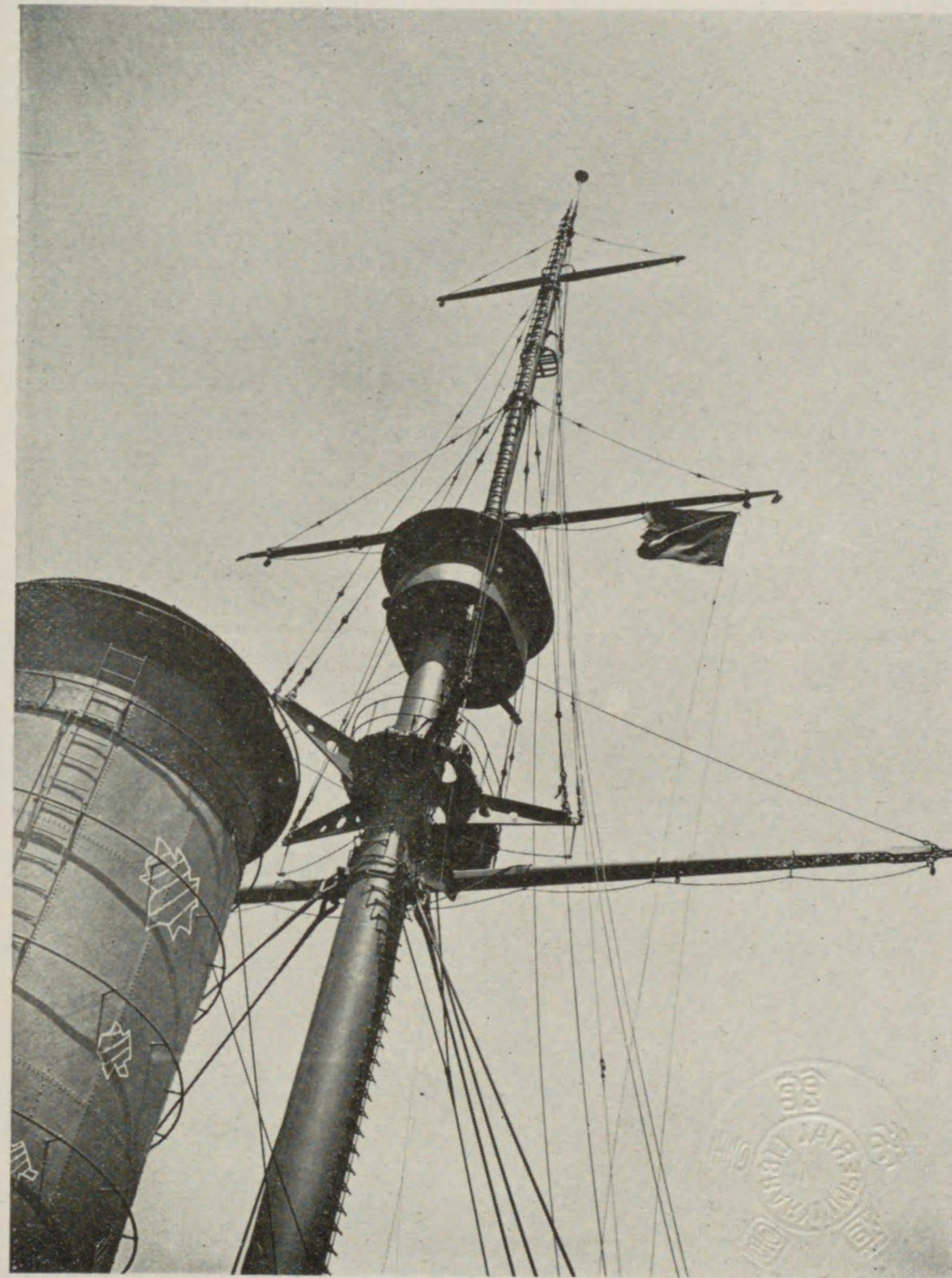
辛永正清  
 刀臺振  
 右進呈波音  
 以飲及成方  
 以也  
 東郷元帥  
 大正五年三月三日  
 小笠原長生殿

これらへ添に劍刀(下)劍刀の用愛代時年青帥元郷東るたれら贈へ爵子原笠小(上)  
 (りな冶鍛名の摩薩はと清正正水主)蹟筆の帥元るた



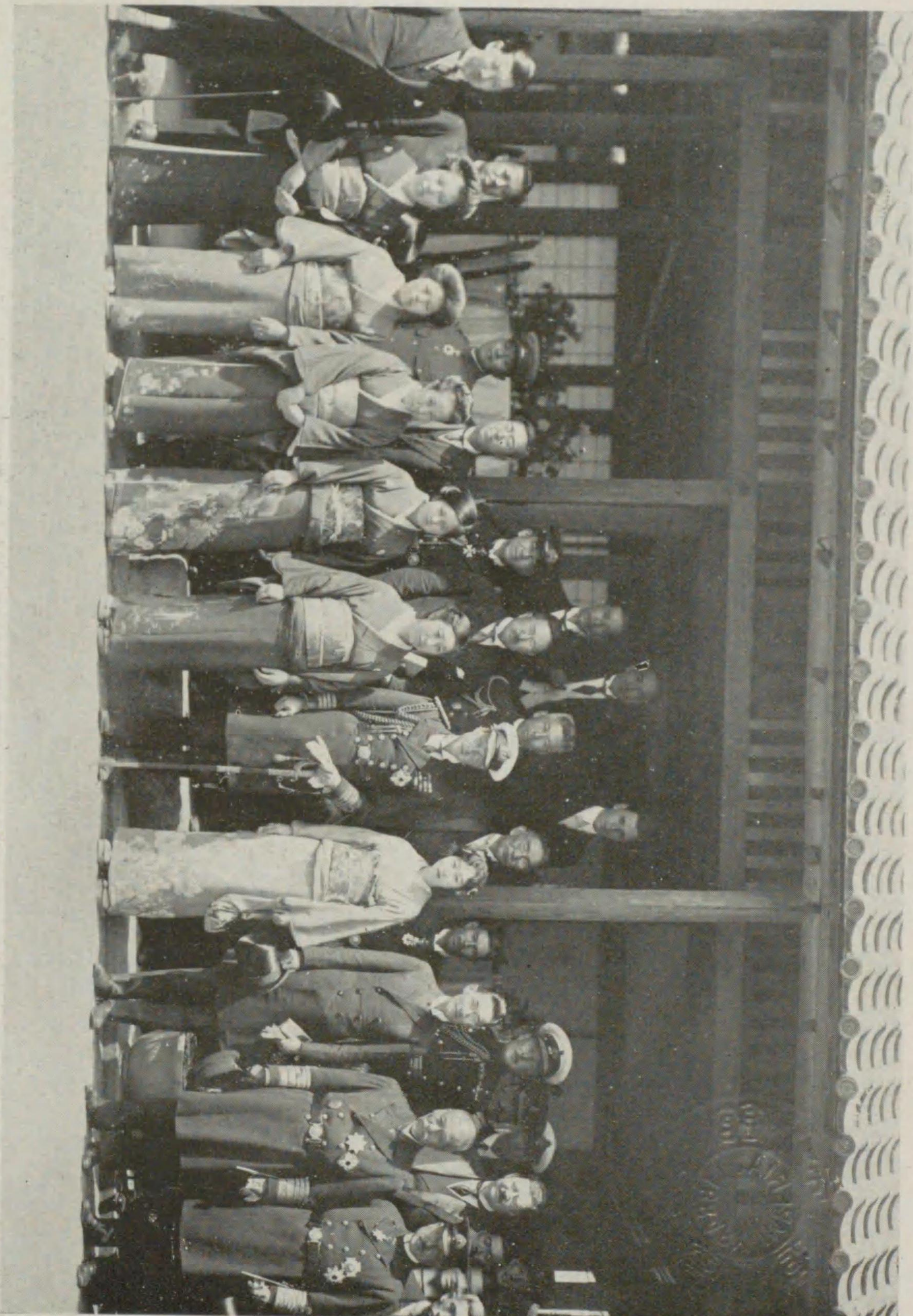


將中生長原笠小列前、てに宿旅の多博際の從扈學見御州九下殿宮東月三年九正大  
氏諸の方直崎山士博學理、官副帥元田太右列後、帥元郷東

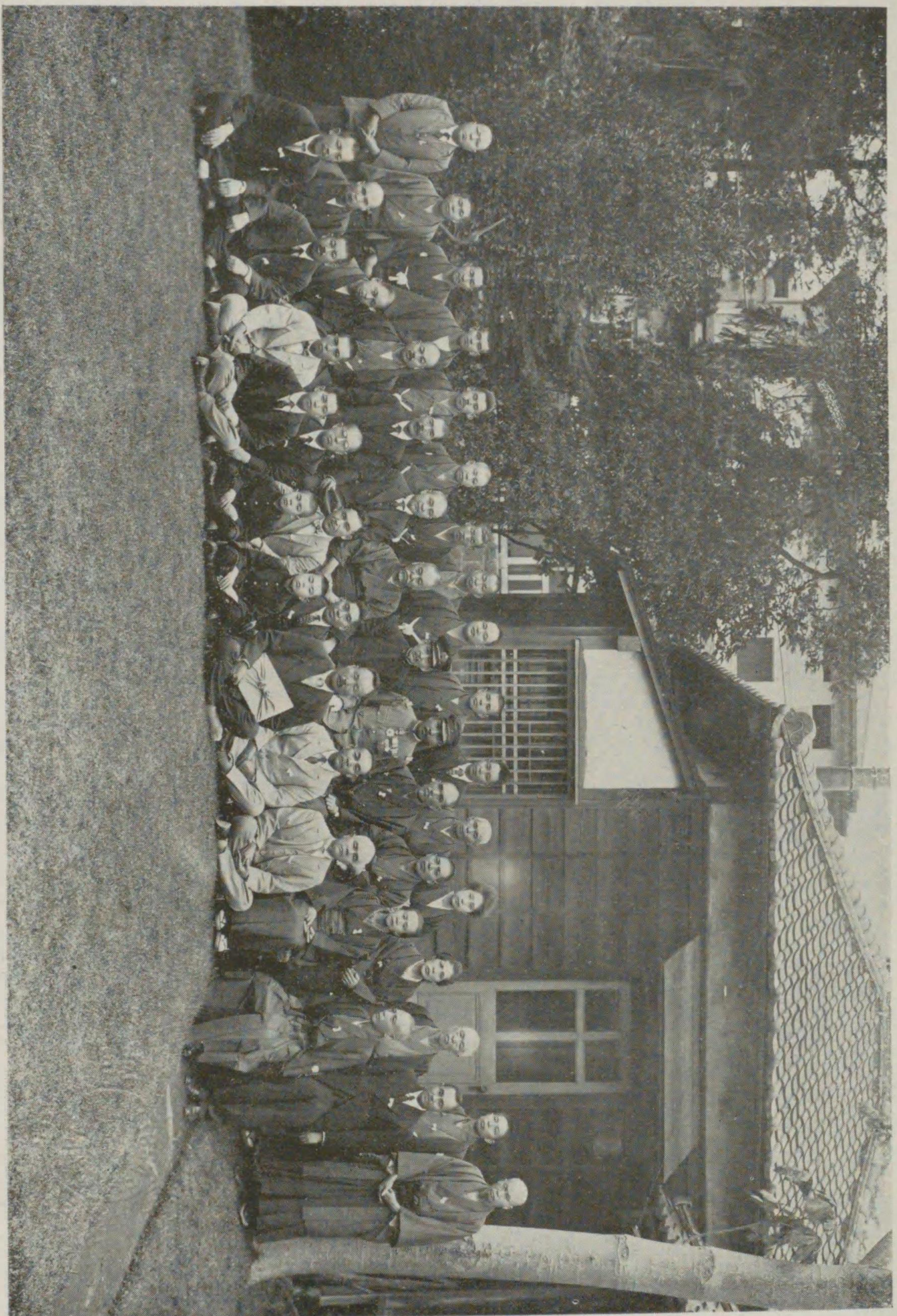


復修) のもるせ示を孔弾はるけ描く白に突煙、號信 Z るたれらげ揚に橋の艦笠三  
(影撮てに賀須横後





大正十一年五月九日鹿兒島磯島津邸に於て英國皇太子殿下歓迎記念撮影、前列右より財部大將、東郷元帥、島津康久氏、徳川爲子嬢、英國皇太子ワエリス殿下、島津治子夫人、左端が徳川頼貞氏



大正十二年春東郷會創立、當時の記念撮影、元帥邸にて、窓の見ゆるは元帥の書齋なり。元帥を圍める東郷會の人々




小室原長宗藏  
 為小室系中佐 宗印書  
 振 頌 靈 國 祚 永 萬 歲 之 日  
 壯 鬼 怒 神 泣  
 神 魚 婿  
 平八郎重五

濱松市の渡邊兼次郎氏は恰かも大震災の折元帥邸に行きおはせ死力を盡して防火に努めたる功に依り元帥より賞眞の如く多くの書を贈られたり座せるが渡邊氏

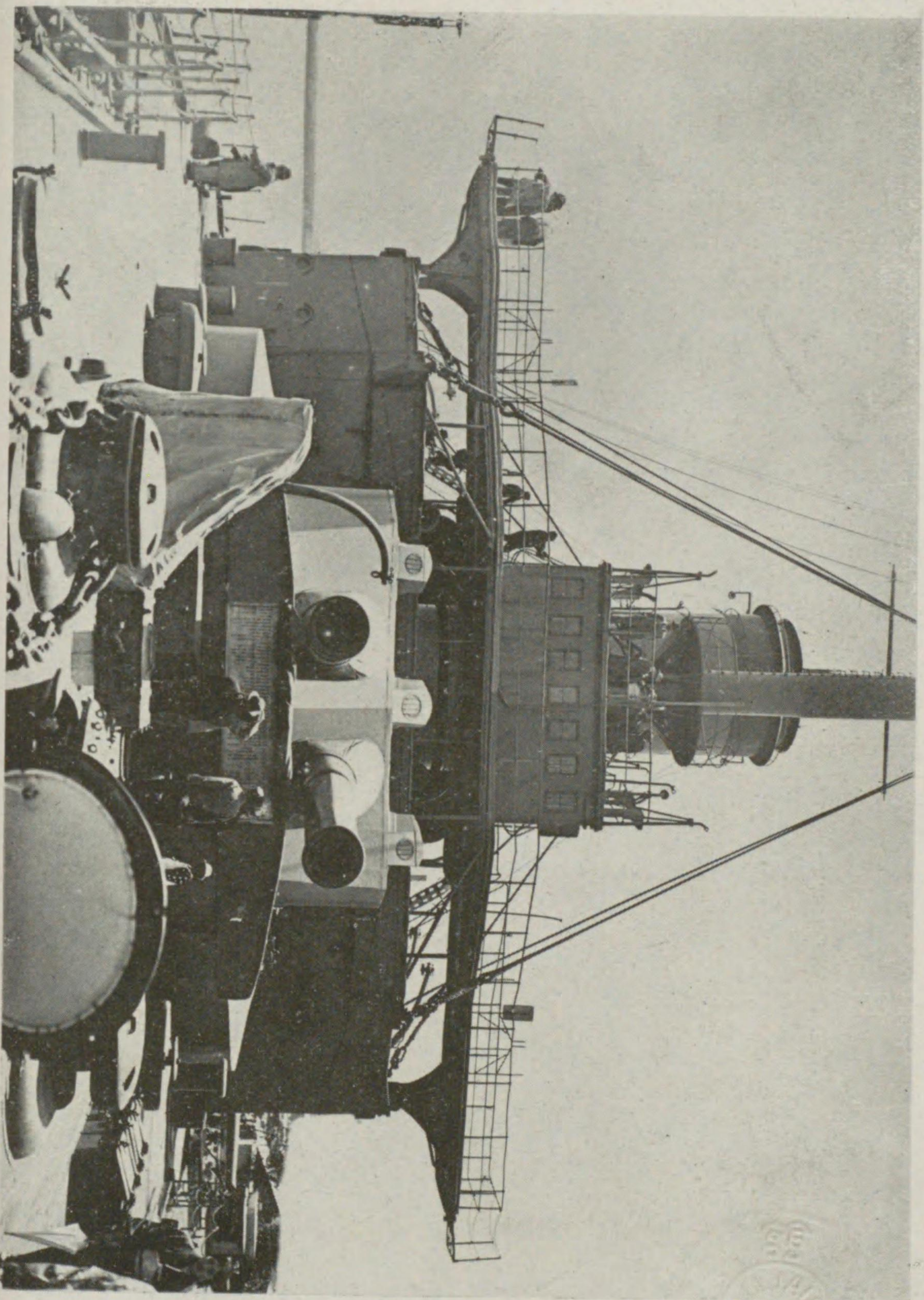
文天祥正氣歌  
 天地有正氣 雜然賦流形  
 下則為河嶽 上則為日星  
 於人曰浩然 沛乎塞蒼冥  
 留多路奮備 莫念和吐明廷  
 時窮節乃見 一一垂丹青  
 在齊太史簡 在晉董狐筆  
 在秦張良椎 在漢蘇武節  
 為嚴將軍頭 為孫侍中血  
 為嚴維揚畫 為顏常山舌  
 或為遠東情 情操厲冰雪  
 或為出師衣 鬼神泣壯烈  
 或為渡江楫 慷慨吞胡羯  
 或為擊賊笏 逆豎頭破裂  
 是氣所磅礴 凜烈萬古存  
 當其貫日月 生死安足論  
 地維賴以立 天柱賴以尊  
 三綱實繫命 道義為之根  
 嗟予遘陽九 隸此實不力  
 楚囚纓其冠 傳車送窮北  
 鼎鑊甘如飴 求之不可得  
 陰房闕鬼火 春院闕天黑  
 牛驥同一皁 鴛鴦共浴食  
 一朝蒙霧縶 分作溝中瘠  
 如此再寒暑 百沴自辟易  
 哀哉沮洳場 為我安樂國  
 陰陽不能賊 仰視浮雲白  
 悠悠我心憂 蒼天曷有極  
 哲人日已遠 典刑在宿昔  
 風簷展讀書 古道照顏色  
 大正甲子春 小室原長宗藏

苟明大義心入空道  
 矣悲不與起斯心奮發  
 故神明古今有言敬而

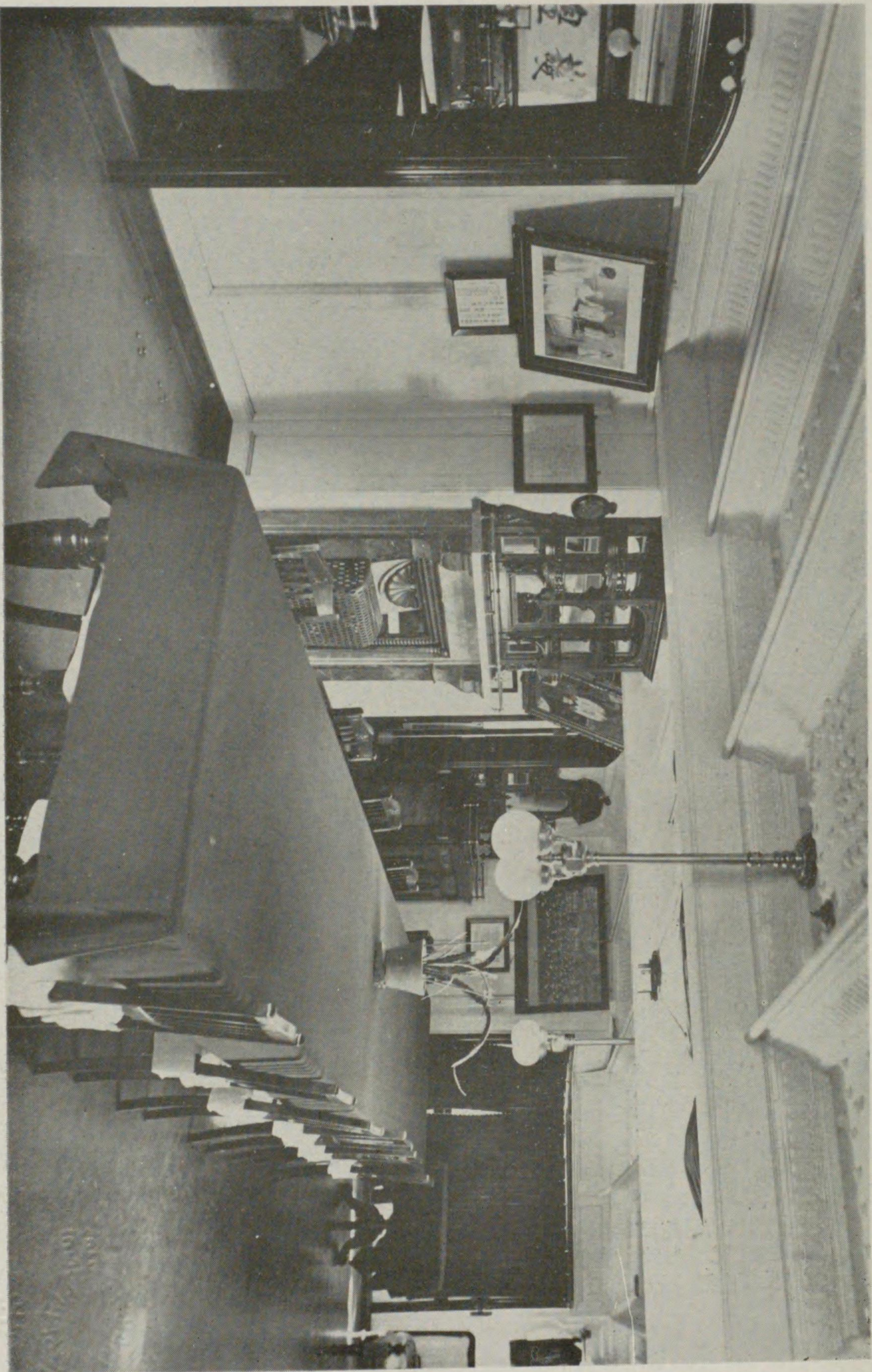
古丹心日月懸 春風生福壽  
 義勇 行 勵







横須賀に保存せられたる三笠艦は内外共に修復して公の觀覽に供せしめ往時の大  
功を忍ばしめたり。寫眞はその甲板にして正面が司令塔

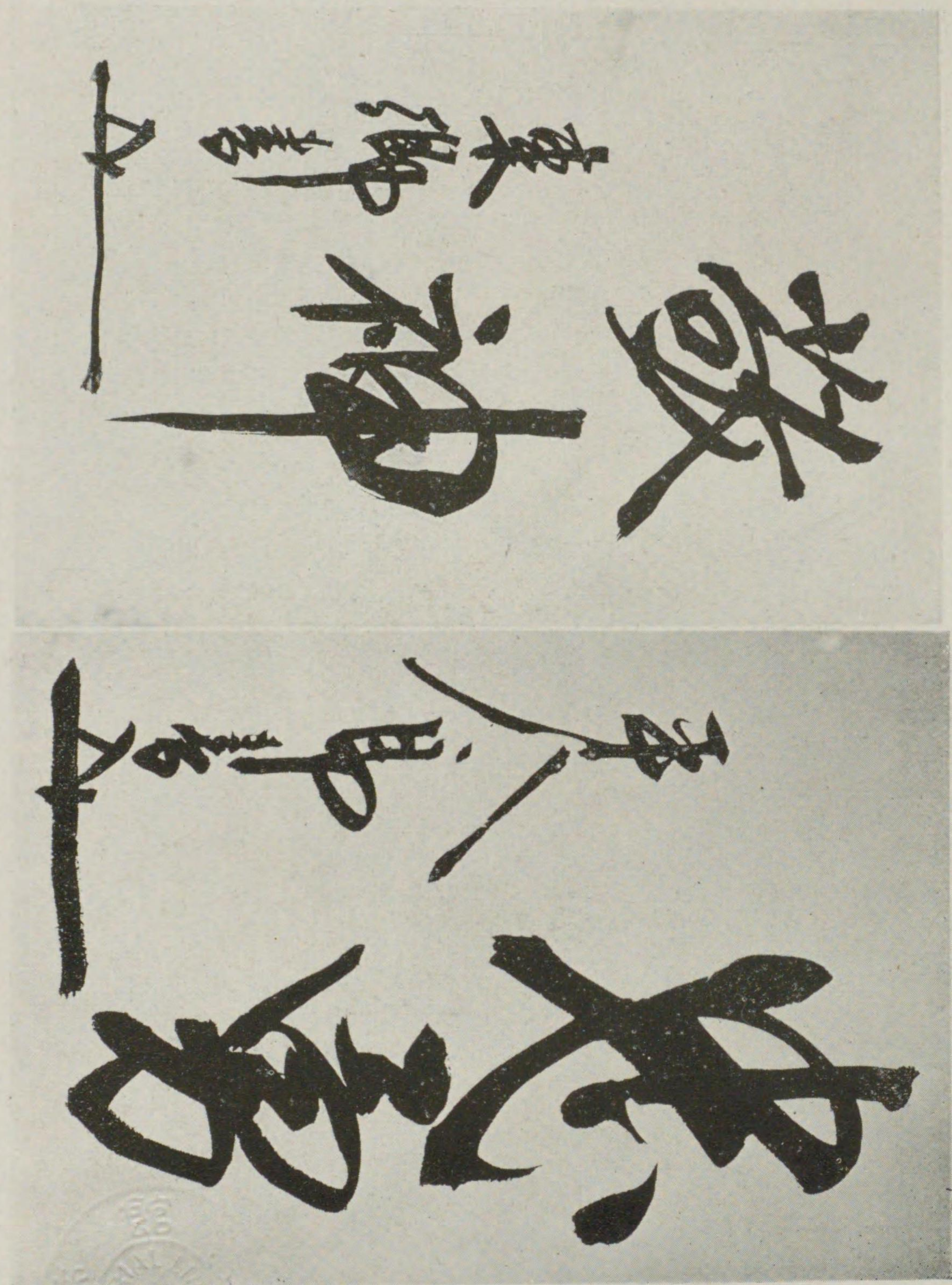
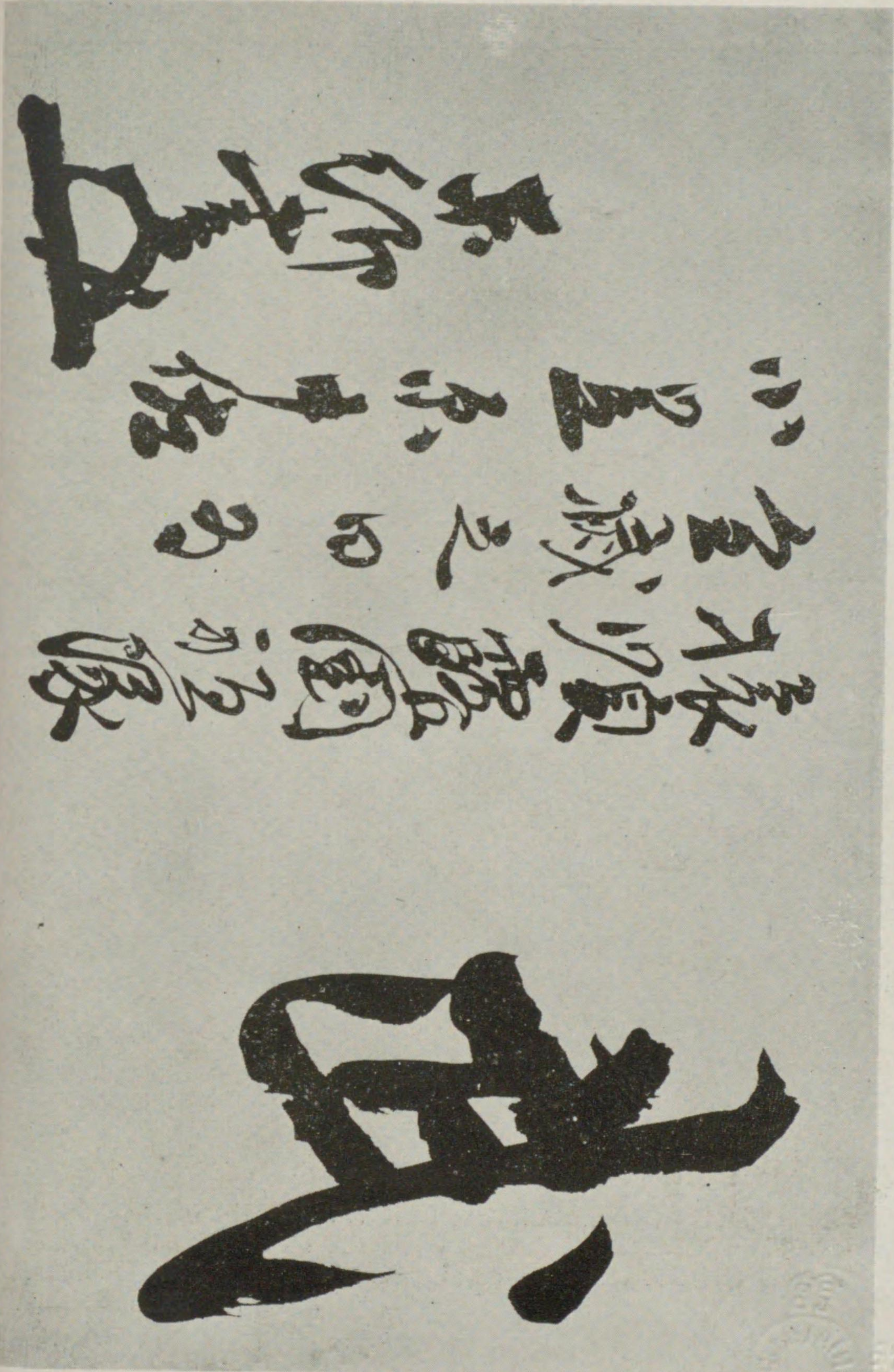


同上三笠艦内將官室 左側の壁に掲げられたる額面は東郷大將が敵將ロジエント・  
ウエンスキイを見舞へる繪畫なり











勇怯勢  
也強弱  
形也

添希典馬

涼洲  
存  
百古

伯爵東郷平八郎

のもの毫揮際の席同軍將兩木乃、郷東

皇國の興廢此の一戦小在り  
各員一層奮勵努力力せよ

日本海軍戦後為小笠原参謀囑

東郷平八郎

△



小笠原参謀囑



日本海軍戦直後の書にして此の句揮毫の嚆矢なり



接敵艦見之故言報聯  
 合艦隊欲直出動較手滅  
 之本日天候晴朗而波高  
 右日本海海戰第一報告  
 中軍書



# 洗旗池

丙午四月遊小笠原邸書  
 海軍大將東御平八郎



東京市外代々幡町幡ヶ谷なる洗旗池は小笠原子爵邸内に在り、往時八幡太郎源義家此處に立寄り池にて血染の旗を洗へるより人傳へて洗旗池の稱あり、明治三十九年四月、右の故事により小笠原子爵より東郷大將に揮毫を依頼せる折の碑面の書なり



帝國ホテル接客係長富森長太郎氏は赤穂四十七義士中の一人富森助右衛門氏の六世孫なるが、同氏の畫帳に現代一流名士を四十七義士になぞらへて揮毫を乞ひ既に完成せり。こゝにはその一部を掲ぐ

大石内藏助

東郷来印書

大石主税

小笠原長生書

堀部彌兵衛

志澤榮

富森助右衛門

六世孫長太郎書

潮田又之丞

土肥頼繼謹書

間島兵衛

河野隆中

磯貝吉左衛門

侯爵小村欣一



檀摩海地有因  
 授爵一奉命也  
 為日世世河  
 之有之國精  
 鳳洲之志也  
 先上之修持  
 世之出世也  
 也  
 心字之日  
 經音義  
 深川推海殿  
 者川貞壽殿  
 唐原島高長  
 者川貞壽殿

りなのもの存保（し）と願扁に室長市在現（し）に狀抄換るす對に同觀留授りよ長議會市島兒鹿川集、長市島兒鹿川有月十年十四吉明

妙法蓮華經方便品第二  
 爾時世尊從三昧安祥而起告舍利弗諸佛智慧  
 甚深無量其智慧門難解難入一切聲聞辟支佛  
 所不能知所以者何佛曾親近百千萬億無數諸  
 佛盡行諸佛無量道法勇猛精進名稱普聞成就  
 甚深未曾有法隨宜所說意趣難解舍利弗吾從  
 成佛已來種種因緣種種譬論廣演言教無數方

明治四十二年二月十六日  
 為小笠原子爵  
 南無妙法蓮華經  
 海軍大將三位大勲位勳一等伯爵東鄉平藏

日蓮宗の信者東郷大將が經文の扉に揮毫されたもの、經文は小笠原子爵筆（本文参照）















切砥琢磨德潤其  
身人非如玉玉如  
其人

杉浦重剛謹書

史正冬言春平八師

年七歲



小笠原長五郎



元帥畫、杉浦重剛氏讚

思ふ事世にほろぬくを  
玉汝は緒の  
まこころを流くを

史正冬言春平八師

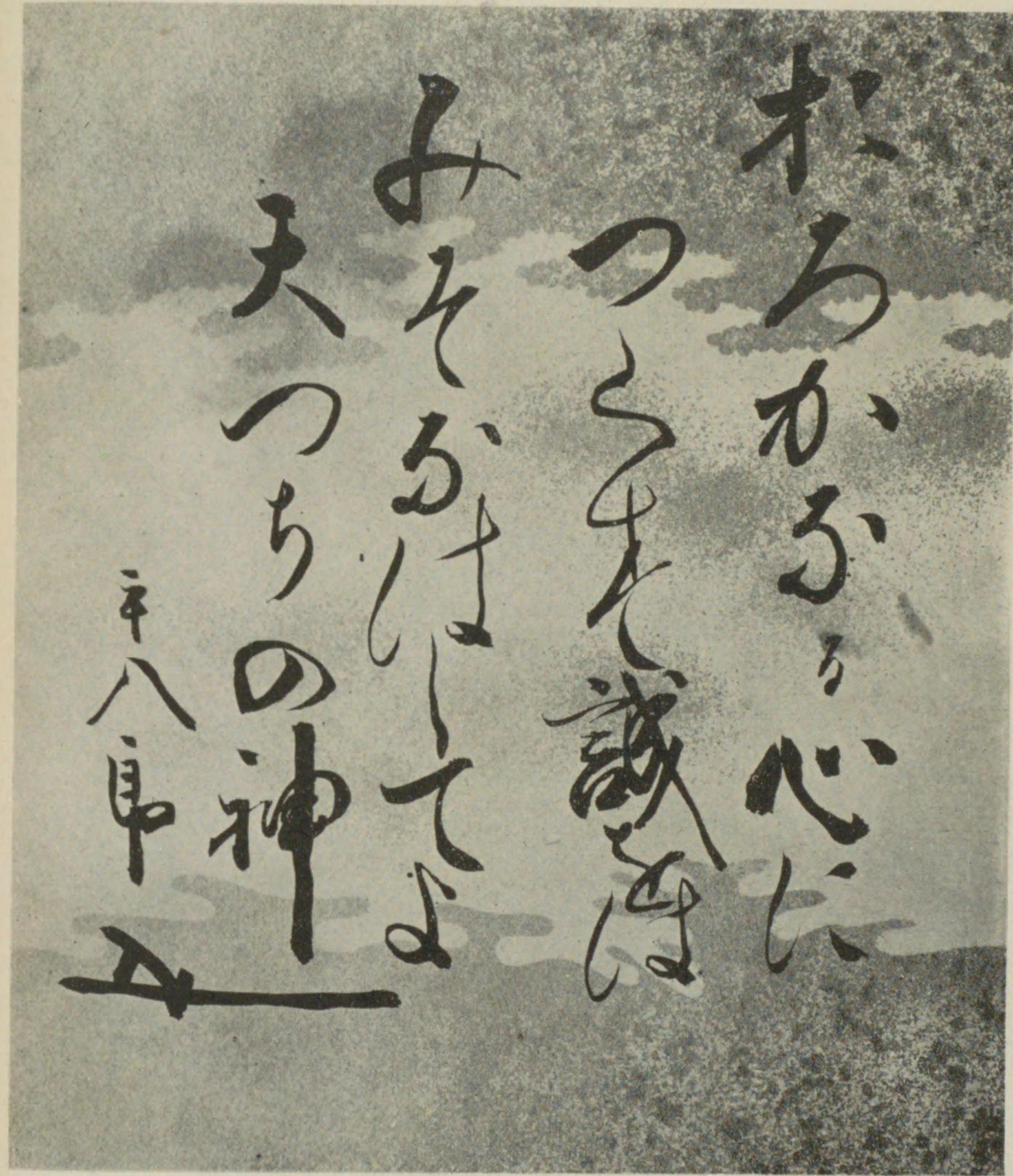
年七歲



元帥畫及讚



國民に語る

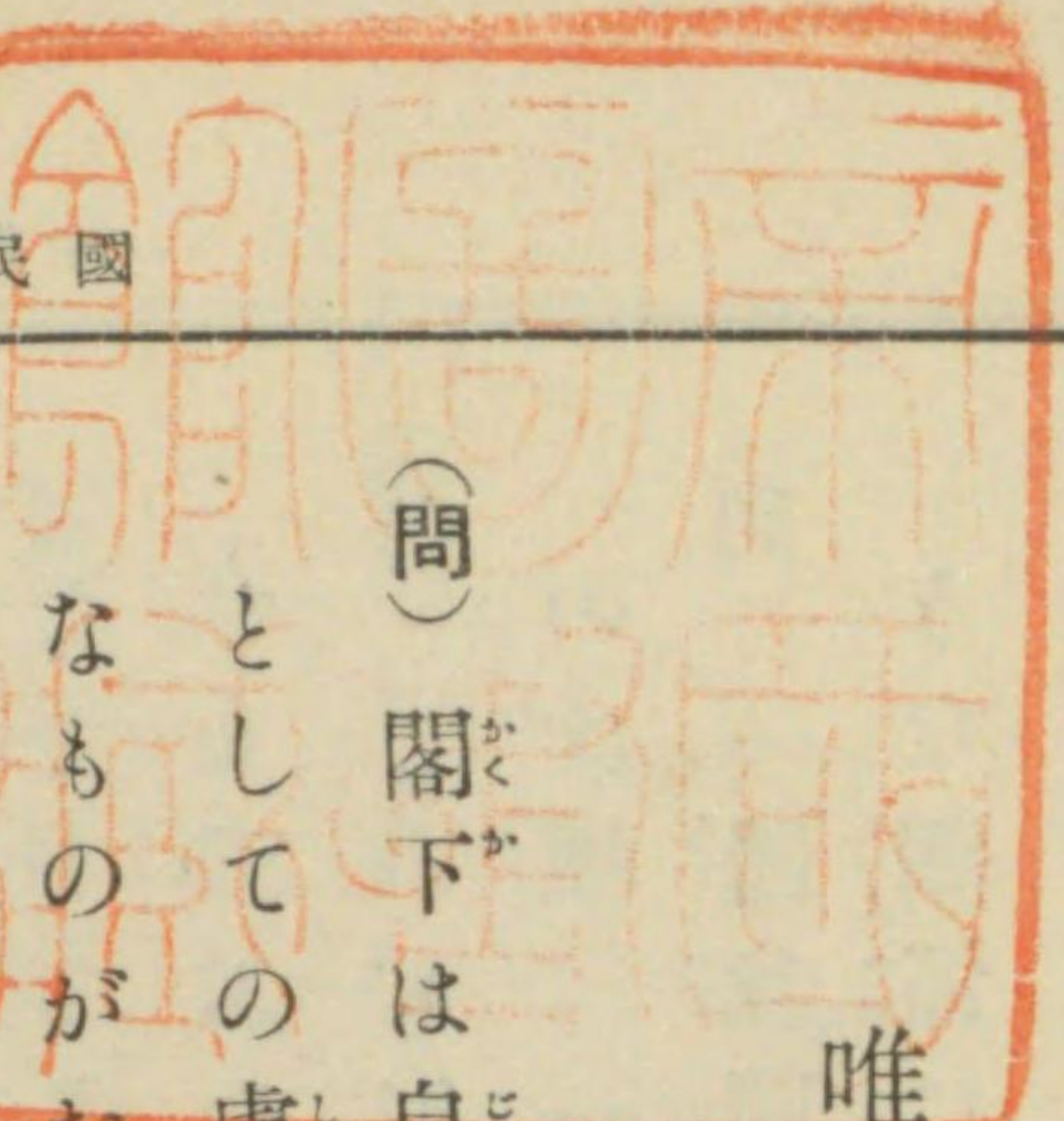


歌 和 の 懐 述



元帥最近の感懐

唯々専心懸命であり度い



(問) 閣下は自分が今日までに、お成りになるまでの間に何かお自分としての處世上に、特別の信條とでも申しますか、さう云つたやうなものがお在りでしたか。

(答) 別に何も無い。唯々自分は軍人として、一意専心その道を踏んで来たまで、ある。





(問) さうでしたか、閣下は嘗て海軍大學校長として、或は今上陛下がまだ東宮に在りました時に、時の御學問所の總裁でもありましたことでしたか、この教育といふことには、何か確乎たる大方針とでも云ふやうなものでもお在りでしたか。

(答) これも別に何も無いが、随分研究はした。軍人の教育といふものは唯一生懸命軍人の學問をすればそれで宜いのである。

(問) 一體我國は萬世一系の天皇を戴いて下國民は恰も一家族のやうな關係にある御國柄でありますのに、近時の世相は誠に面白からぬことのみでありますから、閣下などから見られたらば、嘸厭なことがお在りでせうね。

(答) いや大きに肯かる。

(問) これに就いて何かお考はありませぬか。

(答) いろ／＼あるだらうが、この頃米國邊りの眞似をするからいか

ぬ。何でも彼でも議會で多數であればそれで押付けようとする。按配だから。そして皆んな自分の黨派のすることは、悪いことでも善いやうにしてしまふからいかぬのぢや。もう少し國家のこ

世に處するの道は

(問) それから吾々一般國民の處世上に就いて、何か心得て置くべきことについてお考はありませぬか。

(答) それは正しいことを踏み行つて世に盡すことぢや。事柄は簡單であるけれども、なか／＼これがむつかしいことで、さうして最も大事なことだ。これさへ皆んなが踏み行つて居れば、決して間



違ひはない。即ち悪いことでも、情にほだされたりして、それを悪いと言ひ得なかつたり、又平生憎んで居つた人のことは、それが正しい善いことでも、悪く言つたりするやうではいかぬ。人を忌み妬むといふことが往々あるが、これは宜くないこと。日頃自分の厭な人のことは、それが例へ正しいことでも悪いとし、又懇意にしてゐて何時も自分に同意をするやうな人のことは、悪いことでも悪いと言ひ切らないやうなことでは駄目だ。憎い人でもその正しいことは賞せねばならぬ。これを賞せられないやうではいかぬ。

(問) 能く分りました、正しいことを踏み行つて世に盡す、これですぬ。

(答) さうだ。

學生は本分に精進したい

(問) いや、誠に結構なお話でございます。それでは學生の教育などに就いてお考はどうでございますか。私が思ひますのに、閣下などの時代と違ひまして、今日の教育は餘り學問のみに力を入れて、精神方面を閑却して居るやうに思ひますが、一體文明が進めば進むほど精神教育が一層大事であると思ふのでございますが、どんなものでございませうか。

(答) さうぢや、文明が進めば進む程、いろ／＼智恵が発達して行くから、精神的の教育が最も必要です。今の大學生など、學生は學生として、與へられたる本分といふものがあるのぢやから、一意そのこ



とのみ怠らずにやればいゝのであつて、つまらぬことまでも手を出すから、却つて宜くないことを考へ出すのぢや。皆それぞれ世に處する上に志を立て、斯うと向ふべき方面があるのぢやから、唯、もう一生懸命にやらなければ、世の中のことゝいふものは何一つ成功するものではない。

女は自儘を慎みたい

(問) 婦人殊に女學生に對してはどんなお考でございますか。

(答) 女といふものは自儘になることが一番遺憾なことである。この自儘を慎んでよく守るといふことをしさえすればそれでいゝ。正しい道を守つて行ふ、これぢや。即ち親や先生の教をよく守つ

て行けばいゝ。この頃は餘程自儘になつて來て困つたものだ。

放任主義ではいけなくなつた

(問) 閣下はお孫さん達が居られますが、このお孫さん達に對するお考はどうでございますか。

閣下などのお若い時の子供に對することは成るべく放任主義であつたことゝ思つて居りますが、今日も矢張さう云つたやうなお考をお有ちでございますか。

(答) 吾々の時代は世間が正しかつたから放任をして置いて宜かつた。さうして却つて世間で正しいことを覺えて來たのである。それが今日はなかく、さうは行かぬ。一體子供の教育、躰といふものは、女親が最も注意をせなければいけません。男親もそれは



注意はするが外に出でがちであるから、どうしてもこの女親が十分に分、子供の教育をせなければいけない。子供のことは女親がなかく、大事だ。

(問) 近來一般が萬事自己本位で物質的になつたといふ結果は世の中がなかく、面倒になつたと思ひますが、斯ういふことに對してはどういふお考へですか。

利を利とせず義を利としたい

(答) 聖人の言葉に義を利とするとあり、義を利としさへすれば、何も面倒なことはない。今日は利を利とするからいかぬ。

(問) 義を利とする、誠に立派な聖人の言葉でございます。全く義を

重んじさへすれば、何事もございませぬが、併し今日の如く食ふことがなかく、むつかしくなつて参りますと、食ふことの前に、恩も義理もないといふやうな者が出て來ますから、これは厄介なものではございませぬか。

(答) それはさうだ、食ふに困るやうではいかぬ。併しみんなが都會に出て來てウヨクして居るから、遂に食ふに困るやうになる。みんなが田舎に歸つて百姓でもすれば、食つて行く位のことは何でもない筈だ。

唯、勝つことに専念

(問) 去る五月二十七日は、日本海々戰の記念日に當りまして、この事



は毎年のごとでございませうが、特に本年は二十五周年に當りまして、たので、感慨の殊に深いものがあらうと思ひますが、どんな御感想でございましたか。

(答) 感想も何もない、唯、當時は勝つことのみ考へてゐたので、勝たう／＼といふことのみを考へてゐたから、他に感想などは何もない。

(問) 閣下が今日まで非常な大事に出遭つた事、兎に角一番重大なことは何でありましたか。

(答) それは日露戦争であつた。

(問) さうでしたか、日露戦争と申しますと、旅順の方ですか、日本海の方ですか。

(答) それは旅順の黄海の八月十日の戦争であつた。

(問) 日本海の方は……

(答) 明治三十七年十二月廿日旅順の船はもう一艘も出て来ないといふことが分つたので、態々上陸して乃木を訪ねて引上げていかつたら、もう大丈夫旅順の陥落ももう二三日ぢや、大急ぎで一旦引上げて、さうして戦ひの準備をして呉れといふ話ぢやつたので引上げた。さうして一旦上京登營して御報告を申上げ、船の修理をして居つた。大體ロシアの艦隊は旅順の艦隊が一番強かつた、その旅順の艦隊と戦つた結果、バルチック艦隊の手並も凡そ分つて居る。その上、長途の旅をして船員が疲れて居る、準備が十分に出来ない。そこへ持つて来て日本のは旅順の戦ひより十分に兵も休養して居るし、軍艦の修理も出来て居る、それで朝鮮海峡へ入つて来たら、比方のもので待構へて居つた、だから日本海海戦は誠に樂なものであつた。



先方の手並が分つてゐた

日本海々戦前、九鬼男爵が元帥に對し、これは非常に大事なことです。が東郷さん、どうお考へだらうかと質問されたに對し、若しも日本海で戦争があつたらば、もう戦争はこれで終局ぢやと思つて下さいと元帥は言はれた。九鬼男爵は、實にあなたは心強いことを言つて下さるが……と言はれたさうである。このことに就て、

(問) 實際日本海で戦争になればもう終局だといふことに就いて、何か確信でもあられたのですか。

(答) それは先方の手並が分つて居るからして、來れば斯う來ると思つた、來さへすれば間違ひはないのであるから。

(問) 彼處で、津輕海峡、或は宗谷海峡に廻る報告がありましたか、確か

に朝鮮海峡に來るといふことに就ては、何か觀られる所があつたのですか。

(答) それはさうだ、一體津輕海峡、宗谷海峡の方は非常に濃霧のある所であつて、さうしてあの大艦隊を率ゐて來るのに、あゝいふ所では艦隊行動といふものが出來るものでない、一艘でもなかく、出來ない、それを多くの艦隊を率ゐて參れば、まだ戦争をしない前に、味方の艦と艦とが多く衝突して滅茶苦茶にならぬともいへぬ。その上航路が遠いから石炭も缺乏する。何から見てもどうしても、日本海の方に出て來なくちやならぬのだ。

(問) 成程、それは日本海の方に出て來れば勝つといふことであつたけれども、來るか來ないかに就いては非常に御心配だつたでせう。

(答) フ、ン。

これに就いては何も言はれなかつたが、矢張確信があつたのでせう、大した説明はな



かつた

日露戦争中最も心配したごと

(問) 日露戦争で一番心配だったことは、三十七年八月十日の黄海の海戦だったといふお話を承りました。吾々は實に御心配なことは、日本海々戦だったとすらうと思つて居りましたので、實に事の意外に驚いたのでございます。元帥の……。

(答) それは心配だった然しより、黄海の戦の方が心配であつた。それは勢力が伯仲して居つたのみならず、殊にこつちの方が攻撃であつたからして、敵がどんな風に出て来るか分らないので……。さうしてこつちの方は幾十艘の汽船で陸兵をば護送をせなければ

ならぬ、さうしてそれを無事に上陸をせしめなければならぬので、少しでも先方の方から出て来られるとなか／＼大變だから、實に心配をした。先方から少しでも出て来られると、弱つたのであるけれども、何時も進撃をせずに、砲臺の掩護の下に、砲臺と艦隊と共同で戦はうといふ策戦を取つたものだから、大變宜かつた。さういふやうな譯だつたからして、閉塞隊のやうな無理なことをした、どうしても、一時でも港口をば閉塞をしなければならぬので、あんな閉塞隊などをば繰出したのである。

(問) 能くあゝいふやうな閉塞隊などゝいふやうなことが出来たものですね。

(答) それはなか／＼敵の港口で仕事をするのだから、うまく出来な

(問) いや、併しなか／＼うまく行つたと思つて居ります、殊に吾々と



しましては、大部分が戦死をするのであると思つたのに、生きて歸る人が多數あるのだから全く不思議なものです。

(答) それは吾々の方では出来るだけ助けるやうに、ずつと水雷艇を附けて行つて直ぐ收容するやうにして居る。

(問) さうですか、それで又時には閉塞を終つてから、敵の砲壘の方に飛込んで戦死した人なんかもあるやうでございませぬ。

(答) いや、自分からも飛込むんだから困るんだ。短艇などでも少し壊れるともう面倒くさがつて直ぐ死ぬ氣になるものだから、それでなければまだ大分助けられるのだけれども、皆んながああいふ場合になると、直ぐに死ぬ氣になるものでね。

### 日本海の丁字戦法は必然だつた

(問) 日本海々戦の時、丁字形の戦法を採られて居りますが、あれは吾々は、どうも非常な冒険をされたのが、偶々成功したやうに考へて居りますが、あれは、慥かに冒険であつたのですか、どうでしたか。

(答) あれはあゝ、せなければあんなに勝てないのだ、あゝ、したから勝つたのだよ。

と、冒険であるか、冒険でないかといふことに就いては、何も言はれなかつた。が、あれは冒険的であつて、偶然に成功をしたやうに多く人は考へて居る。一般國民だけならば、兎も角、今日の海軍部内でもさういふ風に考へて居る人がある。それもさうでせう。ところが能く聞いて見ると、確かにこれで行けるといふ確信でやつて居られ



る。偶然でもなければ冒険でもない。先方の手並も分つて居る。此方の力量も分つて居るしこの前の黄海の戦此の時も丁字形の策戦をとられたが結果は十分甘くいかなかつたのださうだ。の経験もある。これに鑑みてこの方法でやれば確かに成功するといふ確信を以てやられたといふことだから之れは十分明かにして置きたいものだ。

歌詠をやるわしの心境

(問) 歌をおやりになるやうでございしますが、一體歌をやる人の中には、ほんの趣味でやる人と、又一方精神修養の爲にやる人とあるだらうと思ひますが、どうでございますか。

(答) 自分は軍人で立つたので一向閑がなかつたから、歌も餘り出来ぬが、少し位はやつた。大體鹿兒島には八田知紀翁、税所敦子さん

などの名人が出られたから、皆んなやつたもんだ、精神修養なんかには矢張なるやうだ。精神修養に就いては、大體軍人は何と言つてもまだ精神教育が普通の人に比較して出来て居る。間違ひでもあれば制裁もあるし、正しく軍人の道として皆んな一生懸命にやつて行く。ところがさうでない方面の者は餘り制裁もない爲なかく、さうも行かぬやうだ。これは會社邊に出る人でも、正しいことをすれば出世をするやうなこともあるだらうけれども、大體がさういふ精神方面に於ては缺けて居るやうだから、どうしても精神教育、精神方面に就いてはしなければいけぬ。

元帥は今猶悠々自適、東京麴町上六番町の例の簡素極る自邸に何時も至誠一貫、黙々として元氣未だ壯者を凌ぐの概もて至誠純忠の生活に精進されつゝある。然し元帥も既に今年昭和五年八十四歳高齡に達せられるので健康には充分の注意を怠らず、何事も醫者の言を厳守され、面會揮毫等も萬止むを得ぬ場合の他は避けられつゝ



ある。以上は本全集のために元帥に直ちに最近の世相や教育道義、日本海戦等の諸問題につき特に元帥にお伺ひしたものの、元帥が眞に日本國民のため衷心より物語られたもの、而も元帥が一々目を通され校閲されたものである。

### 折に觸れての感懐

#### 元旦に少年へ與ふ

左は昭和五年一月一日少年東郷會代表者が元帥邸に參上し、閣下に賀辭を申上げた時、閣下が代表者一同に訓示として述べられた尊き御言葉であります。

少年諸君！

昭和五年一月一日、わざわざ、東郷の家までお尋ね下され、感謝に絶へません。



そればかりか、またここに諸君の心からなる賀辭をいただいて、東郷は感激の至りでありませう。諸君は、ますます、學問に精勵して、健全な精神と身體とを養成して、やがて大日本帝國をひきうけて立つ、確固たる基礎をつくつていたゞきたいと思ひます。

### 元帥の人物試験

人間に一番大切なのは、眞面目といふことぢや、少し利口な奴共は、直ぐに横着心を起して、不眞面目になり、努力を嫌ふぢや、これが不可ん。さうなると他人に信用を失ひ、少しばかりの才氣などは、何の役にも立たなくなる。であるから、若い人達は、たとへ迂遠と笑はるゝも、愚直と誹らるゝも、結局の勝利は必ず眞面目な者に歸するの確信

を有つことが肝要である。

眞面目であるか否かといふのは常に元帥が人物試験に用ひる顯微鏡であるが、元帥はかう語られた。

### 怠慢は才子病

『見識の卑き豪傑ほど厄介なるものは少し。』  
『無愛想もある場合には、人生に必要なことあるべし。』  
『怠慢は才子病とでも言ふべきか、才子動もすれば、これ位の事は、以時にも成し得べしと、自負して努力を缺くことあり。』  
然るに時勢はそれに頓着なく進みゆき、遂ひに世間の落伍者となるべし。



されば何人も才氣を頼まず、誠實に事に當るが處世の第一義なるべし。』

『迂遠と罵らるゝとも、愚直と笑はるゝとも、終局の勝利は必ず誠實なる者に歸すべしとの確信を有すること肝要なり。』

これは折に觸れ或時、四方山の話の間に物語られた元帥の直言で、意味深遠の味が含まれてゐる。

耻を 知れ

本日本校々長始め教官生徒諸子にお會することは、東郷の光榮にする所である。伺つた印に一言申し上げておきます。皆さんも御存知の如く本校の玄關には、嘗つて本校々訓として『耻を知れ』と認め

て置きました。が、この耻を知るといふことは、これを大きく考へても又小さく考へても、頗る意味の深い言葉で、昔の武士はこのことを心に持つて居つた。皆さんも深くこのことを心に有つて頂きたい。耻を知るといふことは、これを大きくしては國家が正義に立つて艱難の際に萬一敗をとる様のことであれば國家の耻辱であり、これを小さく考へると誠の道について人におくれを取らない様にすることであり、また、玄關にかゝげてある『耻を知れ』といふことに就て一言申述べて今日の挨拶として置きます。

昭和四年十月廿三日東京麹町大妻高等女學校に於て、特に元帥と同町内にある學校といふ要望から、職員生徒のため訓諭されたもので、非常な感激の場を呈したが當日大妻校長は、今日元帥閣下をお迎へするに當りまして、われ／＼一同は國寶をいやそれよりも生神様をお迎へする氣持でありました。本日のお訓話の耻を知れといふのは去る大正十三年の夏元帥閣下がお書き下さいましたもので、額として玄關正面に掲げて



ありますが、これは校訓として日々生徒に服膺させて居りましたものです。しかし平生私達の口から百萬遍も聞かされてゐること、あの生神様から一言いはれたゞけで生徒一同は本當に感激いたしました。生徒の思想善道の上に何より有難いこと、思つて居ります。私たち三四年の教育よりも元帥閣下の僅か五分間の御講話の方がどれだけ精神的に効果があつたかわかりません。つまり私達日頃の努力を閣下が生かして下さいましたのです。」

同校では一貫耻を知れの校訓の下に、生徒の訓陶に當つて居る。

### 才よりも力よりも眞心

少年諸君。諸君が此たび東郷の名に依つて本會を組織せられ海軍記念日たる本日を以て發會式を擧げられたるは、洵に恐縮に堪へぬ次第であります。

諸君は御上の御爲、國家の爲、將來の日本國を背負つて立たねばならぬ大切な方々であります。そうして夫れには先、忠孝の二つを勵み、學問を勉強し、身體を健康にし、立派な人になつて、何業によらず眞心を以て務めらるる事が肝要があります。

どんなに才氣があつても又は力があつても眞心が缺けて居ては決して本當の御奉公はできないのでありますから、どうぞ『正直にして誠の道を踏み違へないやうに御願ひ致します。これが東郷の諸君に希望する點であります』で、諸君と共に御上へ御奉公致すやうにする事は、東郷の何よりも嬉しく思ふ所であります。一言以て御挨拶を申します。

昭和四年五月二十七日の海軍記念日を期して、日比谷原頭には、東郷元帥を迎へて、少年東郷會發會式が華々しく擧行された。定刻三時間も前の正午頃から、會衆は續々と長蛇の列を作つて會場に押しよせ、開門を今か今かと待ちあぐむのもいぢらしい。



ステイヂには、右手に主催者側の増田社長、左手東郷元帥席に近く海軍中將子爵小笠原長生閣下、文部大臣代理文部省社會教育課長小尾範治氏、東京市長代理東京市教育局長藤井利譽氏が並び、更にその背後に、少年東郷會賛助員なる都下各小學校長八十餘名の方々が端然と居流れる。

時に三時、筑地水交社に居られた東郷元帥は、愈々三時五十分に會場へ御來場されるといふ情報が入つたので、開會に先立ち、三時から餘興を初める。

餘興の第一席には、琵琶東郷大將を第二世橘旭翁が弾じた琵琶が進んで彼の沈痛な一くさり「旗艦三笠の橋頭に、皇國ノ興廢此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮勵努力セヨ」と信號高く翻へれば、をうたひ出せば、満場は、水を打つたやうな静けさに陥ち、深い感慨に咽ばぬものはない。

琵琶が済むと、次は勇ましい海洋少年團の合唱である、最初が、日本海々戰の歌、次が、戰艦三笠の歌で、海洋少年の意氣高らかな歌ひぶりは、満場の拍手を浴びた。

次は麴町上六小學校二年女生徒の表情遊戯、ちんころ兵隊紅葉のやうな手をふりかざしてピアノにつれて踊る輕快さ「可愛いなあ」「よくあんなに揃ふ」とあつちからもこつちからも讃辭が起る。

拍手を浴びて可愛い一團が退くころから、満場に一種のどよめきが起つた。少年會衆の腫は異様な色に輝やきだした。

三時四十八分、——東郷元帥御來場の時刻となつたのである。

増田社長は、やをら壇上の司會者席を起つて、中央通路を入口へと歩いてゆく。日本少年主筆の青村氏が後に續く。國旗掲揚會の藤江甫氏が元帥通路兩側の兒童達に國旗信號旗を大急ぎに配る。紅紫とりどりの旗が二列にサツとなびく。

『愈々おいでだ』

『元帥のおいでだ』

満場は忽ちどよめき立つ。

『萬歳！ 萬歳！』

『東郷元帥萬歳！』

暴風雨のやうな萬歳の叫びが、にわかに入から起つた。満場は總立ちになつた。感激に燃え立つ會衆は總立ちになつた。

萬歳、萬歳の聲が大空も裂けよと起る。

元帥はお約束の時間を寸分違はず御來場下さつた。



東郷元帥も君が代を歌ふ

正四時、野口青村氏の開會の辭によつて、少年東郷會の發會式は華々しく開催された。元帥も脱帽起立して君ヶ代に唱和された。三萬の小國民が老元帥を圍んで、聲高らかに歌ふ國歌君ヶ代！何といふ莊嚴さであつたらう！

小笠原海軍中將の御講話

社長に續いて、少年東郷會設立に御盡力下さつた海軍中將子爵小笠原長生閣下が起たれて次のやうな有益なお話を遊された子爵の朗々たる音聲に萬場は魅せられたやうに靜まり返つてゐる。

『本日海軍記念日にあたり、この會をこしらへて、東郷元帥の御臨席になられた事は實にたとへ様もない喜びであり、諸君の光榮の至りであると思ふ。』

東郷元帥は凡て大勢の席には出られない。まして一般の人達の前に出られてお話

をなされるなどといふ事は今までに一度もありません。今日が初めての御出席であります。これは少年諸君の至誠が元帥に通じたのである。元帥は申し上ぐるまでもなく至誠の方で、一つの誠心を以て終始せられた方であり、諸君のこの世のけがれに染まぬ純心と、元帥の至誠とが一致したから、元帥の出席といふ他の人達には到底想像も出来ない様な喜びがこゝにあらはれたのである。

元帥を敬慕するこの美しい真心を失はず、御國の爲めに盡す事が大切である。それでこそこの會の意義がある。諸君は廿四年前の皇國興廢在此一戦各員一層奮勵努力の信號を唯愉快な信號だとのみ考へてゐるは間違ひである。その時の元帥のお心を考へねばならぬ。もしあの時元帥の考へられてゐた事がその通りにゆかなかつたら、上は至尊に對し、下萬民に對して何と申し譯をしてよいか分らない御心情にあつたのである。元帥の腹を十位切つても間に合はない様な重大なる責任の立場にあつたのである。世の中には無形の戦争が澤山あるのだから、平常誠心を持つて全力を盡して努め勵み、今日の會を有益有意義の會にされん事を希ふ。この他に何の意義もない。無邪氣な貴い諸君の真心と將軍の至誠の一致が今日のこの光輝ある會を生んだ事を思へば、まことに欣喜に堪へない。



小國民を前に元帥の御訓話

小笠原中將の御講話が大喝采裡に濟むと社長の紹介で、東郷元帥が壇上に歩を運ばれた。萬雷の一時に落つるやうな拍手が滿場から起る。

あとは、ひつそりと靜まり返る。一語も聞き落してはならぬといふ熱心さが緊張が崇敬の念が、びたつと、ざわめきを封じて、三萬の會衆から咳一つ起らない。

元帥の唇頭が搖いで、こゝに、尊い言葉が一つ一つ、力強く小國民に投げかけられた。

三笠の一等水兵だつた加賀谷廣助氏の双眼からは熱い感激の涙が滴り落ちてゐる。來賓も目を潤ませてゐる。新聞記者も泣いてゐる。

師が弟子に訓へるやうに、父が子をさとすやうに、じゆん／＼として語る御言葉は、三萬小國民の魂の一つ一つに喰ひ入るやうにひびいたのであつた。

元帥の御訓示が終ると、すぐに、少年東郷會員總代として小石川小日向臺町小學校生徒小池正宣君が答辯を讀む爲に元帥の前に歩を運んだ。

玲瓏の聲凛然たる態度、當日の感激はこの答辭に到つて、その最高潮に達した。

元帥の眸が二三度動いた。

元帥の眼ぶちに、感激の涙が光つた。

少年の純情に老元帥は心を打たれたのだ。

おゝ、その劇的場面よ！

答 辭

全日本少年ノ敬愛セル東郷元帥閣下 私共ハ閣下ノ御名ヲ聞キ御姿ヲ胸ニエガクゴトニ愛國ノ血潮ニ燃エ オ高イ御人格ヲオ慕ヒスルモノデアリマス 圖ラズモ今日少年東郷會ノ發會式ニアタリ親シク閣下ヲ目捷ニ拜スルコトヲ得タ私共ノ喜ビナント申シ上ゲマセウ ソノ上御心コメタル御訓示マデモ賜リマシタコトハ私共一生ヲ通ジテ決シテ忘ルルコトノ出來ナイ光榮ノ極デアリマス 少年東郷會ハ名ノ如ク閣下ヲ中心トシテ其精神ニ生キントスル少年ノ修養團體デアリマス 私共ハコノ大御代ニ生テウケタル幸福ヲ思ヒ 閣下ノ御高訓ヲ心ニ刻ミ 皇國ノタメアラン限リノ力ヲツクシテ將來ウガ日本帝國ヲ永劫ニ強ク固ク美シキ日本帝國タラシメナケレバナリマセン 至誠ハ天ニ通ズト申シマス ヨシ道ハ遠クトモ私共ノ燃ユル信念ト



絶エザル努力ハ如何ナル困苦ヲモ貫イテ必ズ目的ノ彼岸ニ達スル日ノアルコトヲ堅ク信ジマス 胸ニアフルル私共一同ノ歡喜ト眞心ヲ捧ゲテ茲ニ謹ンデ元帥閣下ニ呈スル答辭トイタシマス

昭和四年五月二十七日

少年東郷會々員總代 小池 正宣

### 日本海戰滿二十週年の追憶

日本海々戰滿二十年に當つて、海軍大臣から東郷元帥に懇請して追懐の一端でも放送せられてはとの事であつたが、元帥は慣れない事でもあるし、當時少々咽喉をも傷めて居られたので小笠原子爵に代つて放送せよとの事であつた、其處で小笠原子爵は元帥の許に参り、親しく口授せられたものについて次の如く元帥に代つて放送された。

大元帥陛下の御稜威と將卒の忠勇と、國を擧げての愛國心とに由り、海戰史上空前の大捷を得たる日本海々戰も、既に二十年の昔となり、心地在致します。殊に忘れられないのは此の海戰に於て生命を君國に捧げた戰友の上で、皇國を無窮に守護しつゝある其等の英靈は勿論今も嚴として我々の行動をも監視して居らるゝであります。私共が本分を盡す上に於て平時と戰時との區別は御座いませぬ、輕重も御座いませぬ。何時如何なる場合にも、唯々至誠を以て一貫すべきのみで、其他を顧みるの必要は更にあるまいと思ひます。斯くて我が軍艦旗をして益々光輝を放たしむると同時に、世界平和の保障たらしめてこそ、此の海戰に或は生命を捧げ或は痛く傷ついた僚友達に始めて向ける顔があると思ひます。其れと今一つ忘れてならぬ事は前にも申しましたが、當時國民諸君が義務奉公の大精神を



活現して燃ゆるが如き熱誠を示されたる一事でありまして出征して居た當時は勿論今より回顧致しましても眞に心強い感が湧き起ります。私は此の國民的大精神は澎湃として永久に漲り以て御國の護りたるべきものと確信致します。

主人が居なくては申譯ない (大正十一年九月一日のこと)

方々に火災が起つて大分危険になつて來たらしいので先づ女子供を避難させた。而しいくら危険になつたからと言つても一家の主人までがゐなくなつては若しどなたか御見舞に來て下らないものでもないその時主人はどこへ行つたか知れんとあつては如何にも恥辱である。それでわしは一人残つて居つた。

暫くすると西隣の家に火がついて燃え始めた。わしはいよ／＼此の家も焼けるかと思つて居るとどうした工合かその家が凄じい音を立て、横様に倒れた。

すると運のよいことにはこちらの家とは反對の側に倒れた。勿論わしの家の方角に倒れればその勢で火はこちらに燃えつくのであつたが反對側に倒れたものぢやから火はそこで止まつて反對側に燃えて行つてしまつた。そのうち御見舞に來て下された方があつて屋根の上に登つてしきりに火の粉を防いで下さつた。

恰度東側は教會になつて居つたがそのうちに今度は火がこちらの方から燃えうつつて來た。そしてしまひにはわしの家のひさしへまで火がついた。そこで愈々こんどこそは燃えるかなと思つて居つたがその時も幸ひその見舞に來て下さつた方が一生懸命に防いでくれられたお蔭でとう／＼そのひさしを焼いた丈でそちらの



火も消し止めてしまつた、さう言ふ譯で圍りの家は焼けてしまつたが、わしの所だけ無事に残つたのでずつと動かんのであるよ。

(佐藤中將談 恰度あの恐ろしい大地震の直後の事であつた。私は閣下の御老體が心配だつたのですぐ御見舞に上つた。

路々あたりを眺めると誠に見るも無慘な有様であつた。何しろまだ地震後幾日もたゝない後の事で焼跡から煙さへも立つてゐる始末である。閣下のお宅のあたりは何一つ残さず焼け失せてゐた。

所が不思議な事には閣下のお宅丈は焼ける所か地震の害さへ受けず、僅かにひさがこはれた位のもので立派に立ち残つてゐる。

私はそれを見て實にこれは天祐であると考へた。あの凄まじい猛火の威勢も、流石に元帥閣下のお家丈は避けて通つたのであらうと思つた。何しろ周圍の家々がすつかり火の手に包まれて一物も残さず焼け落たのに、その真中にあつた閣下のお宅丈が微動だもせず無事であつた事を思へば、實に天祐に歸するより外はなかつたのである。會ふ人毎にその事を話して今更に元帥の天祐の厚いのを祝し合つたのであつた。

しかし私は閣下にお目にかゝつてお見舞申し上げ、親しくお話をうかゞつてから全くその考へが變つてしまつた。

閣下のお宅が無事であつた事は決して天祐に依るのではない。閣下御自身の徳によつて、あの猛火を退ける事が出来たのであつて、假そめにも天祐などと云ふ根のない事によつて得たのではないと云ふ事はつきり判つた。

私は始めて成程と思つた。その家の主人にして此の心懸があるからして、あの猛火を防ぐ事が出来たのである。

此の主人としての責任感としてその責任を果す迄は決して猛火の中にも動かんと云ふ固い意志、此の二つがあつたからこそ、閣下のお宅は無事であつたのである。

若しこれがよその家の様に主人自ら真先に立つて家を見捨て、逃げ出してしまひ一家の主人としての責任も何もほつたらかしてしまつたらどうだらう。

見舞に來た人もそんなに一生懸命に働きもしなかつたらうし。火も廂を焼いた位丈ではすまなかつたに違ひない。

一家の主人と云ふものゝ、大きい責任を感じられて、あの猛火の中をちつと動かれんでをられた閣下の強い意志こそ閣下の家を救はれたのである。



### 大西郷を語る

大西郷と元帥——薩南が生んだ此二大英傑——は、共に日本國家を背負つて立つた英雄であるが、元帥の大西郷觀を拜聴することは、此意味に於いて——英雄英雄を知るの——感がある。文中に問とあるは小笠原長生子爵、答とあるは元帥である。

(問) 閣下の御生れになつた鹿兒島加治屋町の御宅と南洲先生のお宅とは、御近所でしたか。

(答) 南洲先生の宅は私の宅からは三丁程はなれて居つた、私は幼い折、南洲先生の令弟吉次郎氏について勉強したが、末弟の小平氏はちやうど私と同年輩だつたので、いつも机を並べて手習ひなどをしたものだつた。其頃南洲先生は或は大島へ流されたり、國事

に奔走されたりして、多くは宅に居られなかつたが、折々逢ふ事があるといつても『平八ドン、平八ドン』というて居られた。

(問) お會ひになつた際には、何か教訓をされる様な事はありませんでしたか。

(答) 何事でも、こちらから聞けば、懇切に教へてくれたが、自分から進んで教訓されるといふ様な事は無かつた。

いつもニコやかな溫和な顔付をして居られて、何とも云へぬ親しみがいづまでも忘れられぬものであるといふ風であつた。

(問) 何かの新聞で見ましたが、南洲先生の寫眞が発見されて、閣下と大山川村の兩元帥がこれこそ眞の寫眞に相違ないと云はれたとか云ふ事ですが、事實ですか。

(答) イヤ、眞の寫眞と云ふものは見た事が無い。前年板垣伯爵が見えられて、大西郷は實に國家の大恩人で、大切な人であるが、眞に近



い肖像の無いのは、實に遺憾に堪へない。それで畫工に命じて描かせて見たが、一應見てくれと云つて、一枚の油繪を示された。それで私が、どう云ふ風にして描かせましたかと問ふと、其頃まだ在世中だつた大山元帥をモデルにして描かせたと云ふ事であつた私の記憶では、大西郷は肥満しては居られたが、大山元帥程では無かつた様に思ふ。

私の見るところでは大山元帥よりは、西郷從道侯の方が、其の體格の様子も顔付も却つて似て居られた。

從道侯にもう少し肉付の好い體つきで深味のある容貌だつた様に思ふ。

それで私は板垣伯に、大體に於ては結構であるが、なほよく西郷家の親族の方々に見せられた方が宜しいでせうと言つた事があつた。寫眞云々と云ふのは此の話の事であるまいか、どうも大西

郷の肖像畫と云ふのを見ると、如何にも緊張された顔色が現れてゐる。平生はもつとずつと溫和で、えも云へぬ愛嬌のある顔付だつたが、それは繪畫には現せぬのかも知れぬ。

上野の銅像なども、製作には大分苦心された様だが、やはり緊張した顔付だし、少しふとり過ぎて居る様に思ふ。

私の家は平常から懇意にもして居たし、官軍が越後路へ攻め込んだ時に、私の實兄小倉壯九郎は、常に大西郷の旗本にあつて、最も近く親炙し指導も受けて居た。

壯九郎は十年の役にも、矢張り大西郷の傍を離れず、九月二十四日に城山で戦死した。

明治元年八月の事だつたが、私は軍艦春日に乗組んで鹿兒島を發し、同月十日には柏崎に着、僚艦と共に色々活動したが、九月十日には大西郷と其手勢の兵士を新潟から出羽の久保田へ輸送した



事があつた。

(問)

閣下が大西郷に最後にお逢ひになつたのはいつでしたか。

(答)

函館の亂も濟んでから、私は郷里に歸つて、海軍士官の職も辭して、又もとの書生にかへつた。

それは明治二年の事であつたが、幾許もなく私は東都遊學の命を受けたので、横濱に出て、英人ワツクマンと柴田と云ふ人について英語を學んだ。

ちやうど其年の十月の事であつた。

大西郷は池上四郎さんを連れて、何か兵事の事で、鹿兒島に行かれる途上横濱に來られた。

その時私が訪問したのが、お目に掛つた最後だつた。

それから間もなく私は海軍の留學生として英國に留學して、十

一年に歸朝したのであつた。

小笠原長生子爵は語る。

「元帥が英國に留學して居られた時に、十年の戦亂は起り、元帥の一族故舊は盡く大西郷の麾下に馳参じたと云ふ報告に接した、それで同じ留學生の間にも色々議論が起つて、直に歸朝して、大西郷の許に行かうと云ふ様な過激な意見の者も大分あつた。

その時元帥は毅然として、

「自分等は朝命を帯びて留學中の者である。假令本國に如何なる事が起らうとも、自分の成業をせぬ限り、氣儘な歸朝など思ひも寄らぬ事である。」

私共は命ぜられた事を充分におさめて、君國の爲めあく迄本分を盡さねばならぬと、嚴然云ひ切つて、相手を屈服せしめたと云ふ事である。

その後十年の亂も平ぎ元帥の一族がみな大西郷に加擔して中には戦死された人も少からずあつたと云ふ報告に接したので、同僚等が頻りに氣の毒に思つて、元帥を慰めると、元帥は襟を正して、



「私の一族がこぞつて賊軍に投じた事は、何ともお上に對し奉り恐懼に堪へないと言はれた。  
 「従前の事情から推して、若し西郷先生にして起たるゝならば、一門がかう云ふ結果にならうとは、豫てから覺悟して居た處で、今更如何とも致し方がない。せめて私だけでも、ますます命ぜられた海軍の技を修め、後日何かあるから、上命のあるまでは歸朝など思ひもよらぬと云ひ切つたので、人々は元帥の胸中を察して、其の苦衷に感激したと云ふ事である。

堪忍が第一ぢや

小笠原子爵の第四女日佐子嬢が、昭和四年十月佐々木隆一氏に嫁することになつたので、子爵夫人は令嬢を伴ひ、豫て懇親にしてゐる元帥を訪ふて、暇乞をなし、何か心得になるべき一言を承りたしと懇望した。すると元帥は心から其の良縁を祝しいと満足氣に微笑まれつゝ、

「いや夫れはお目出度い。かねてのお躰ぢやから何も申上ることもないが、世の中の事と云ふものは、何事もさう思ひ通りにはゆかぬものぢや、そこで堪忍と云ふものが大切になつてくる、殊に家庭のことは理窟ぢやア通らぬ場合が多い。それを一々理窟に嵌めやうとすると、破綻が生ずるから、堪忍第一と覺悟せねばならぬ。此の節は婦人方が大層強うなつて來たやうぢやから、堪忍など云ふことは時代遅れとして嫌はれるかも知れぬが、一度自分が人の妻となつて家庭に直接の關係を有つやうになつたなら、獨身の時には無暗に強がつてゐた者もしみづ、思ひ當ることがあるぢや、らう、さて其の堪忍と云ふものは、眞心から發する事が多いので、先方の御両親や御良人を大切に思はれたなら、自然堪忍強くなれるものぢや、さうして幾久しく御繁榮あることを望みます。」  
 「恰も自身の孫にでも諭される如く懇切に言はれ、其の翌日、



『龜鶴年壽齊』  
と揮毫して贈られた。日佐子嬢は此の一幅を其の身第一の寶物として祕藏されてをる。(寫眞版参照)

旗艦は先頭に立て

海戦に際して旗艦を何處に置くべきかの問題に關して、元帥はかつて小笠原長生子爵にこんな意味のことをいはれた事がある。

『海戦で勝を制するの極意は、平素の戰術研究と共に、微妙な戰機を捕らへてこれに應ずるの行動が大切だ。それには旗艦が常に先頭にあつて艦隊を率ゐるのが一番行りやすい、また亂軍になつた際でも、旗艦が依然先頭に進んでゐると、必ず遠航するものが出來て、つひには隊列も回復し、勝ちを得るに至るで

あらう。であるからいやしくも行動し得る限り、旗艦は常に先頭に立つ覺悟が必要だ。』



海  
戰  
記



## 大 海 報

大海報は明治卅七八年戦役中海戦に關して當時の聯合艦隊司令長官東郷大將が大  
本營にその戦況を報告したもので他の司令長官の報告も雜つてゐるが茲には主と  
して直接東郷元帥が報告されたるの、みを採録した。號の飛んでゐるのは、そのた  
めである。これを見れば當時の海戦の實況大要が判るであらう。

### 一、旅順攻撃の第一報

#### 大海報第一號明治三十七年二月十一日大本營着電

聯合艦隊は去る六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し八日正子我驅逐隊は  
旅順にある敵を攻撃せり當時敵艦隊の大部隊は旅順港外にありて我驅逐隊の水雷に掛り  
しもの少くとも「ボルター」形一隻巡洋艦「スコリド」外二隻ありしものと認む我艦隊は九



大海報第二號

東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は去る六日佐世保ヲ出發シタル後  
總テ豫定ノ如ク行動シ八日瓜子我駆逐隊  
ハ旅順ニテ敵艦隊ヲ攻撃セリ當時敵艦隊

大本營より發表の原物寫眞

に彼れか士氣を阻喪せしめたるものと信す漸次敵は港内に逃走するものゝ如し午後一時  
戦闘を止め引上げたり此攻撃に於ける我艦隊の損害は輕小にして寸毫も戦闘力を減せず  
死傷は約五十八名にして内戦死四名負傷五十四なり。

仁川方面に向ひたる分遣艦隊の戦況は既に瓜生司令官より直接電報せるか如し。我驅  
逐隊は敵の砲火を冒して攻撃を果し其大部は既に本隊に合せり艦隊に御乗艦の各殿下は  
皆御無事なり我將卒一般の戦闘に従事せる狀況は頗る沈着にして恰も平常の演習に異な  
らず戦闘後に於ける士氣は益々旺盛にして若かも舉動は愈々沈着なり今朝來風波ありて

日午前十時旅順口  
沖に達し正午より  
約四十分間港外に  
殘留せる敵艦隊を  
攻撃せり攻撃の結  
果は未だ明瞭なら  
ざるも敵に少から  
ざる損害を與へ大

艦船間の交通不通なる爲め來だ各艦よりの詳報に接せず不取敢右概況のみ報告す。  
二月十日 東郷聯合艦隊司令長官

### 二、旅順口攻撃の第二報

大海報第二號同二月十六日午後十時十分大本營着

二月十三日驅逐艦の一隊大風雪を冒して旅順口に向ふ途上各艦見失ひて相分離せしも  
司令艇速鳥及朝霧のみ旅順口外に達し朝霧は十四日午前三時港口を偵察し盛に陸岸砲臺  
及哨艇の砲火を蒙りしに拘らず黒烟を上げ居る一軍艦に對し水雷を發射し且つ敵の哨艇  
を砲撃して無事歸り來れり速鳥は同日午前五時旅順口外に達し港口に近接し敵の二艦を  
暗中に發見すると同時に其砲火を受けたるも直に其一軍艦に對し水雷を發射し其爆發を  
確認して無事歸來せり速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の効果は暗夜の爲め之を知るに由なしと  
雖も寡くも敵をして益々戰慄せしむるの大功ありたるは疑ひなしと認む。

備考

本驅逐隊の司令は海軍中佐長井群吉速鳥艦長は海軍少佐竹内次郎にして朝霧艦長  
は海軍少佐石川壽次郎なり。



三、旅順口閉塞隊の報告

大海報第四號同二月廿七日午後二時五分大本營着電

聯合艦隊は去二十日より豫定の行動を開始し途上天候不良の爲め行動を一日順延した  
 後二十二日より旅順口  
 方面に進發し驅逐隊は  
 二十四日午前二時頃旅  
 順口港外を搜索してア  
 ムールのごとき敵の一  
 軍艦を襲撃せしも其結  
 果は明ならず又同日午  
 前三時三十分我忠勇なる旅順口閉塞隊は敵の強力なる四ヶ所の探海電燈と猛烈なる砲火  
 を冒し旅順港口に猛進せしが天津丸は敵の探海電燈の爲に少しく針路を誤り老鐵山の東  
 海岸に座礁し武揚丸は其外方約四百米突に自ら破壊沈没し報國丸は進んで港口燈臺下に  
 達して船首を約北西にして自ら座礁し一隻(武州丸ならんか)は其南東微東二鏈半のところ

に是れ又自ら破壊沈没したり又他の一隻は(仁川丸ならんか)饅頭山下の海岸に座礁せるも  
 の、如し又勇敢なる我水雷艇隊は翌朝黎明迄港外に在り敵の砲火を冒して閉塞隊の收容  
 に従事し前記沈没船五隻にありし勇士を悉く收容し得たり旅順口閉塞隊及水雷艇隊の此  
 勇敢なる行爲は能く帝國軍人の忠勇義烈を表明せるものにして港口閉塞の目的は不幸に  
 して完全に達する能はざりしと雖も其無形の効力莫大なるものありと信ず閉塞隊員中報  
 國丸の下士以下三名敵彈の爲に輕傷を被りしも其他は皆無事なり又各水雷艇隊及驅逐隊  
 にも一の損傷なし。我艦隊は二十四日午前十時旅順口沖に達し巡洋艦隊は直ちに港外を  
 偵察して會々敵の旗艦ノービツク及驅逐艦五隻が老鐵山の方より港内に入らんとするを  
 發見し之を砲撃せり。二十四日夜我驅逐隊は三部隊に分れ第一隊は鳩灣を第二隊は大連  
 灣を搜索したるも敵を發見する能はざりし又第三隊は旅順口港外にて敵の砲火の下に一  
 回の襲撃を試みたるも其効果は詳ならず。

二十五日午前九時我艦隊は再び旅順口外に至り敵艦バヤーンアスコリツドノービツク  
 の三艦港外に在るを見港内の間接射撃を兼ねて遠距離より敵の三艦を砲撃せり敵は要塞  
 と協力して約二十分間應戦せしが須臾にして盡く港内に入れり依つて我艦隊は砲撃を止  
 め港外を去れり此砲戦は距離稍遠かりしを以て其敵艦に對する効果は大ならざりしもの







同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

高 樋 三 城 增 永 加 松 玉 上 高 坂 飯 田 万 田  
 橋 口 利 山 井 木 本 井 野 橋 口 田 中 本 中  
 勝 吉 田 義 銀 右 至 豐 虎 岩 運 力 良 太 郎 三  
 江 郎 郎 三 藏 吉 德 吉 助 郎 次 松 吉 郎 松 郎 九

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
 一等機關兵 一等水兵 三等兵曹

藤 日 高 竹 三 久 貝 青 土 新 田 榎 木 赤 米 加  
 本 高 井 澤 富 屋 原 木 屋 神 尻 原 下 松 田 木  
 金 金 左 彌 山 島 六 吾 勝 卯 藤 龜 虎 健 英  
 太 左 衛 七 太 佐 郎 一 次 太 八 次 吉 郎 一 義  
 郎 門 清 七 郎 吉 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎







報告に依れば武州丸は敵彈の爲め舵機を破壊せられ饅頭山下に擱岸し廣瀬武夫の指揮せる報國丸は殆んど港口に達したるとき其側に坐礁せるレトウキンより猛烈なる射撃を蒙り同じく舵機を破壊せられ且船體に火災を起し遂に燈臺下に擱岸沈没せり又齋藤七五郎の指揮せる仁川丸も港口に入らんとするとき燈臺より南東約二鏈半の位置にて沈船と思はるゝものに觸抵し進行する能はずして其位置に爆發沈没したるものなり右報國丸仁川丸の二隻は完全に港口を開塞せざるも目的の一部は達し得たるものなり仁川丸の閉塞隊員中二等機關兵榎原健三は沈置後端艇を卸さんとする際敵彈の爲め戦死せり其他報國丸の下士卒三名輕傷したる外閉塞隊員は皆無事に我水雷艇隊に收容されたり勇敢なる閉塞隊員並に之れが收容に従事したる水雷艇隊等が天明に至る迄長時間敵の砲火を蒙りしに拘らず斯の如く些少の死傷を以て生還したるは眞に奇異の現象にして一に大元帥陛下御威徳の擁護に因るものと云ふの外なし右前報告に洩れたるを以て更に報告す。

## 六、旅順口猛撃の勝報

大海報同三月十二日午後八時十分大本營着電

聯合艦隊は豫定の如く行動して更に昨日旅順口の敵を攻撃せり。

驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順口外に達し港外を搜索して敵なきを認め天明迄港外に留まりて乙驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置せしが敵の要塞は之に對し時々砲撃したるも我驅逐隊は無事其目的を達するを得たり然るに午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方に於て約六隻よりなる敵の驅逐隊に會し近距離に於て約二十分間激戦し朝潮霞曉の三艦は敵の諸艦と殆ど鉅々相摩せんとするが如く接戦し敵の三四艦に猛烈なる砲火を加へたるを以て敵は或は汽罐を破損し或は火災を起し或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり我三艦も亦敵彈の爲め多少の損害を被り死傷十五名内戦死下士卒七名負傷霞の大機關士南澤安雄の外下士卒七名ありたり就中曉は汽罐の補助汽管を破壊せられ一時漏汽したるが故に機關兵四名熱傷に依り戦死せり但各艦共に戦闘航海に支障あらず又乙驅逐隊は午前七時港外を去らんとする際偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の驅逐艦二隻を發見し直に其前路を遮りて之を攻撃し戦闘約一時間多大の損害を加へたる後其一隻を逸したるも他の一隻ステレグーシチー號を撃破し敵の要塞砲火の下に於て連は之を捕獲し曳航しつゝありしも漏水甚しく且つ波浪高く曳綱切斷せしを以て捕虜四名を收容して捕獲敵艦を放棄せり其後午前十時十五分に至り右ステレグーシチー號は全く沈没



せり。

此戦闘に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず連曙の二艦に戦死卒二名負傷曙の少尉島祐吉外下士卒三名ありたり。

是より先き敵艦ノークキク及バーヤンは港外に出て來りて我乙驅逐隊に向ひ進航し來りしが我巡洋艦隊港外に接近するを見て港内に退却せり。

我主力艦隊は直に港口正面に進み我驅逐隊を掩護し次で主力艦隊も亦老鐵山附近に至り午前十時より午後一時四十分迄連続港口に對し間接射撃を行へり巡洋艦の一隊が港口正面より看的報告するところに依れば其彈着は概して良好にして其効果少からざりしものゝ如し我砲撃中敵の要塞も時々應戦したるも我艦隊の諸艦は一の損傷なかりし又巡洋艦の他の一隊は大連灣外に至り港口三山島に於ける敵の建設物を砲撃破壊せり又高砂千早は特に旅順口半島の西岸を索敵せしも敵を見ず前回の攻撃に於て我巡洋艦隊に撃破せられ鳩灣に擱岸したる敵の驅逐艦はウヌシューテリヌイにして今や檣及煙突の上部を水面上に現はして沈没し居れり。

我各部隊は午後二時戦闘を止め一旦豫定地點に集合したる後引上げたり。

本報告は三月十一日認めたるものなり。

明治三十七年三月十三日

### 七、旅順口攻撃の捕虜

大海報同三月十四日午前三時四十五分大本營着電

去る十日の旅順口攻撃に就き其後驅逐隊司令の報告に據ればストレンジーシチー及其附近海中より救助收容したる捕虜は水雷工一名機關兵三名にして内二名は負傷し居れり同艦には戦死者の外他に殘員を認めず其他は捕獲の前水中に飛入たるものゝ如く尙敵の溺者を認めしを以て之を救助せんとせしも敵要塞の砲撃を止めざるとノークキツクの近接するを見て之を遺棄したり捕虜負傷者は其後大艦に收容して治療を加えたる所其經過良好にして何れも安堵し居れり。

### 八、旅順口の間接射撃報告

大海報同三月廿四日午後六時五十分大本營着電

聯合艦隊は豫定の如く行動し兩驅逐隊は廿一日夜より廿二日未明迄旅順口港外に在りて與へたる任務を遂行せり此間多少敵の砲火を蒙りしも別に損傷なし又本隊及巡洋艦隊



は廿二日午前八時旅順口沖に達し其一部を鳩灣の方向に遣はし富士八島をして港内に對し間接射撃を行はしめたり。

此砲撃中敵艦は漸次に港外に出て來り午後二時過ぎ間接射撃を止むるの頃其數戰艦五隻巡洋艦四隻驅逐艦十隻となれり敵は終始砲臺下に運動し我を誘致せんとするものと認めたり又敵艦よりも間接射撃をなしたるものゝ如く特に富士の附近に着弾多かりしか一も損傷なし。

我各部隊は午後三時迄に港外を去り引上げたり。

### 九、第二回旅順口閉塞の報告

聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ同二十七日午前三時三十分敵港閉塞を執行せり四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し約二海里に達する頃敵の發見する所と爲り兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず四隻相次て港口水道に闖入し第一の千代丸は黄金山の西側に於て海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎて少しく前方に進み投錨せんとするとき敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し次て其位地に爆發沈

没し第三の彌彦丸も福井丸の左側に出て投錨爆沈せり第四の米山丸は稍々後れて港口に達し敵の一驅逐艦の艦尾を衝突しなから既に沈没せる千代丸と福井丸との間を通過し水道の中央に投錨せしとき敵の魚形水雷一發を受け爆裂し隋力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈没せり敵の猛烈なる砲火の下に於て斯の如く閉塞船が勇敢沈着其任務を遂行したるは事業として間然する所なく誠に賞讃するに餘りあり只遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尙ほ空隙を存し完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす此壯烈なる閉塞の再擧は前回之に従事したる勇士の切願を容れ將校及機關士は主として前回の者をして之に任せしめ下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり閉塞隊員中戦死中佐廣瀬武夫兵曹長杉野孫七外下士卒二名重傷中尉島田初藏輕傷大尉正木義太夫大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして其他は悉く無事我か水雷艇驅逐隊に收容されたり戦死者中福井丸の廣瀬中佐及杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戦死せるものゝ如く廣瀬中佐は乗員を端舟に乘移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三たひ船内を搜索したるも船體漸次に沈没海水上甲板に達せしを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の頭部を撃ち中佐の體は一片の肉塊を艇内に



残して海中に墜落したるものなり中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず其最後に於ても萬世不滅の好鑑を残せるものと謂つへし閉塞隊員の掩護收容に就ては直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し天明過くる迄敵の砲火に曝露して其任務遂行せり就中蒼鷹燕の二艇は閉塞船隊を護衛して港口より約一海里に達し敵の驅逐艦一隻と會戦し多大の損害を加へ敵は汽罐を破裂されたるものゝ如く盛に蒸気を吹かしつゝ退却せり閉塞隊の端舟を港外に退却するとき目撃する所によれば敵艦と認むべきもの黄金山下に於て全く進退自由を失ひたるものゝ如くなりしと云ふ

我か水雷艇隊驅逐隊は天明過くる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘らす寸毫も損傷なし閉塞隊員の收容は千代丸及彌彦丸の乗員は燕に米山丸乗員は端舟三隻に分乗して鵠雁に收容され福井丸の乗員は霞に收容されたり

備考

閉塞隊を掩護したる驅逐隊及水雷艇隊は左の如し

驅逐隊

白雲霞朝潮曉雷曙臘電薄雲漣東雲

水雷艇隊

雁蒼鷹、鵠、燕、鵠、真、鶴

## 一〇、旅順口第八次の攻撃報告

大海報同四月十六日午後五時大本營着電

聯合艦隊は去る十一日より豫定の如く行動し更に旅順口の敵に對して第八次の攻撃を爲せり第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及蛟龍丸は十二日夜半旅順口港外に至り敵の探照を冒して港口に近づき計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し直ちに其前路を遮り之を攻撃し約十分間戦闘の後之を撃沈せり又同時頃西方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉して之を攻撃せしか距離遠くして遂に之を港口に逸せり此戦闘に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして唯電の卒二名輕傷せるのみ撃沈せる敵艦の溺者は敵艦「バヤーン」の近つき來りしたため之を救助するの暇なかりし

第三戰隊は午前八時港外に達して第二驅逐隊を掩護し且つ敵情を偵察せり午前九時頃敵艦「バヤーン」我に向ひ突進し來り遠距離より砲撃を開始せしを以て徐々に應戦して之を



撃退せり幾もなく敵艦「ノーヴキツクニアスコリド」チアナ「ベトロパウロウスク」ニボベ  
 ダ「ボルターウ」等「バヤーン」と合し攻勢を取りて反撃し來り第三戰隊は之に應戦しつゝ敵を  
 南東方向約十五海里に誘致せり此時沖合約三十海里に方りて濛氣の内に隠れたる第一戰  
 隊は第三戰隊の無線電信に接し直ちに急進して敵艦隊に逼りしが敵は艦首を轉して港口  
 に向ひ背進せしを以て尙益々追窮して之を港前に壓迫せるとき先頭に占位せる「ベトロパ  
 ウロウスク」と見へたる敵艦一隻前夜沈置したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを見る時  
 に午前十時三十二分なり敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尙ほ外に一敵艦  
 の進退自由を失ひたるの疑ひありしも敵艦隊混雜の爲め其艦を識別する能はさりし其後  
 敵の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲撃しつゝ漸次に港内に入り正午過くる頃  
 港外に敵影を見ざるに至れり此戰鬪の初期砲戰に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害  
 も亦少許なるへく第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近かさりし

當日午後一時艦隊は旅順口港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整  
 へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ發動せり第二驅逐隊第四驅逐隊第五驅逐隊第  
 九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後相次て旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其任務  
 を遂行せり午前七時第三戰隊も港外に現はれ敵情を偵察せしか港外に敵影なく港内寂然

たり又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷三個を發見し一々  
 之を砲撃爆沈し午前十時より春日日進を老鐵山の西方に分派し約二時間港内に對し間接  
 射撃を行はしめたり敵の要塞及港内の敵艦も時々之に應戦せしか兩艦共に損傷あらず此  
 兩艦は此日を以て敵に對し其初彈を發射せしか其射撃の効果は相應に之れありしか如く  
 老鐵山西の新造砲臺も沈黙せしめたり午後一時三十分血隊は交戰を止め歸航せり

此連續せる作戦に於て聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戦果を挙げ得たるものは  
 一に大元帥陛下の御威徳に依るものにして麾下將卒は終始勇往敢爲其の任務を遂行する  
 に忠實なるも其奏功成果に至ては人力の及はざる所多し特に多數の艦艇か晝夜を問はず  
 敵機械水雷の浮流せる洋中を縦横に航行し然かも今日に至るまで一の危害を受けたるこ  
 となきか如きは只天祐と確信するの外あらざるなり

### 一一、第三回旅順口閉塞の報告

聯合艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を  
 決行せり閉塞船隊及之を掩護せる赤城艦長海軍中佐藤本秀四郎鳥海艦長代理海軍中佐岩  
 村團次郎第二驅逐隊司令海軍中佐石田一郎第三驅逐隊司令海軍中佐土屋光金第四驅逐隊



(司令海軍中佐長井群吉)第五驅逐隊(司令海軍中佐眞野巖次郎)第九艇隊(司令海軍中佐矢野純吉)第十艇隊(司令海軍少佐大瀧道助)第十四艇隊鵜、眞鶴を欠き第六十七號艇第七十號艇を加ふ(司令海軍少佐櫻井吉丸)は二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしか不幸にして午後十一時頃より南東の強風俄かに起り波濤高く爲めに閉塞船隊は離散し相失ふに至れり閉塞船隊總指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中止の命を下せしも其信號通達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり然るに三河丸指揮官海軍大尉匝差胤次は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て前續船既に港口に突進せるものと思考し直に港口に向て邁進し佐倉丸指揮官白石葭江)と思はしきもの之に續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し強力なる探照と猛烈なる砲火とを以て之を防禦せしも三河丸は港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨水没す之に次て遠江丸指揮官海軍少佐本田親民)江戶丸指揮官高柳直夫)小樽丸指揮官野村勉)相模丸(指揮官湯淺竹次郎)愛國丸指揮官海軍大尉犬塚太郎)朝顔丸指揮官向菊太郎)も相次て港口に向ひ猛進す此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞員の戦死負傷するもの最も多かりしか遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んど港口の半部を

閉塞して其位置に爆沈し江戶丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戦死し指揮官附海軍中佐永田武次郎直に之に代はり投錨を命し次て爆沈せり小樽丸相模丸と思はしきものも亦港口に入りて沈没せるものゝ如く又愛國丸は港口より約五鏈のところにて敷設水雷に罹り瞬時に沈没し指揮官附内田弘)同機關長青木好次以下八名行衛不明となれり朝顔丸と思はしきものは舵機を損したるものゝ如く港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり右八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認む

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備増大したるに依り前二回のものに比し頗る慘烈を極め戦死負傷は甚た多く特に小樽丸相模丸佐倉丸朝顔丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も其忠烈の事績は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信す閉塞隊員の收容に従事したる各水雷艇隊及驅逐隊は翌朝まで風濤と戦ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此難業中第六十七號艇(艇長海軍中佐平眞雄)は敵彈に汽管を破られ負傷卒三名を出し一時敵前に於て進退自由を失ひしか其僚艇第七十號艇(艇長海軍大佐森本義寛)は之を救助して曳行せり又蒼鷹(司令兼艇長海軍中佐矢島純吉)も敵彈



に左舷機を傷けられ卒一名戦死し準にては下士一名戦死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし

第三戦隊司令官海軍少將出羽重遠は三日午前六時第一戦隊司令長官海軍中將東郷平八郎司令官海軍少將梨羽時起は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇隊を掩護集團し午後四時迄各方面に分れて閉塞隊員の搜索收容に盡力せしか終に得るところなかりし此日濛氣頗る深く爲めに敵状を見ることが能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更に豫定の行動を續行せり

### 一二、旅順港強行偵察の報告

大海報第卅號同五月廿日午後十一時五十五分大本營着電

砲艦の一隊及驅逐艦水雷艇の數隊は二十日午前一時旅順港口に迫り要塞の猛烈なる十字砲火を冒し強行偵察を試み其目的を達し天明に至り引揚げたり砲艦隊に多少の被弾ありしも著しき損害なく又死傷者なし

### 一三、吉野、初瀬の沈没報告

大海報第二十七號其一月十五日午前十時五分大本營着電

本職は茲に三度不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす十五日午前五時千歳出羽司令官より無線電信報告によれば本日午前一時四十分頃第三戦隊は旅順口封鎖の任務より歸航中山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ春日は吉野の左舷艦尾に衝突し吉野は浸水甚しく終に沈没せり春日より出したる救助艇にて收容されたる者機關長以下約九十名なりと濃霧未だ霽れず痛心に堪へず

同第二十七號其二月十五日午後六時大本營着電

本日は海軍に在て最大不幸の日にして茲に又最も不幸なる報告を進達するの止むを得ざるに遭遇せり初瀬敷島八島笠置龍田は本日午前十一時頃旅順口沖にて敵を監視中初瀬は敵の水雷に罹り先づ舵機を破られ初瀬より曳船送れの電信に接したるを以て將に之を發送せんとするとき更に敷島より初瀬は第二の水雷に罹り終に沈没せりとの悲報來れり本職は之を報告するに臨み只た遺憾至極と云ふの外なし善後の處置に就ては夫々出來得る丈けの手段を盡し災厄を増大せざるに努め居れり當地附近濃霧未だ霽れず。



## 同第二十七號其三五月十五日午後十時十分大本營着電

敷島は初瀬遭難狀況報告の爲め當地に歸港しつゝあり驅逐隊全部及二個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず。

## 同第二十七號其四五月十六日午後四時三十七分大本營着電

初瀬か敵の水雷に罹りしは老鐵山の南東約十海里の所にして當時同方面には霧なく又其附近に敵の驅逐艦もあらざりしと云ふ此事實より判斷する時は敵は其附近に機械水雷を沈置したるか或は潜水艇を利用したるものならん初瀬は約三十分間を隔て二回の被害にて瞬時に沈没したるも敷島八島笠置龍田等にて梨羽少將中尾大佐以下三百名を救助收容せり初瀬沈没の頃敵の驅逐隊十六隻旅順口内より出て來り我を追尾せしか會々其地に來りし明石千代田秋津洲大島赤城宇治及高砂は前記諸艦と協力して之を撃退し初瀬生存者の收容を果すことを得たり以上の報告は混信の爲め文意不明瞭なる無線電信と今朝遭難報告の爲め來りし龍田の少尉並に八島の艦載水雷艇指揮官の口頭報告等を綜合して製作したるものなり當地近傍霧未だ霽れず。

## 同第二十七號其五五月十八日午後零時四十分大本營着電

昨朝濃霧霽れ各隊逐次入港す其報告により初瀬は全く敵の機械水雷に罹りしものなることを確かむることを得たり。

## 一四、旅順口退去後の報告

## 大海報同五月十九日午後九時二十分大本營着電

本職は明石秋津洲千代田須磨大島赤城宇治及第十四水雷艇隊を率ひて十五日早朝出發し正午前旅順口沖に至りしとき初瀬か二回敵の機械水雷に觸れ沈没せるの報に接したるを以て先づ大島宇治及水雷艇隊をして豫定の行動を續行せしめ他の諸艦を以て敷島八島笠置等と共に敵驅逐隊の我に向て來襲せんとするものを撃退し又初瀬乗員收容の掩護を爲せり。

夕刻に至り我戰隊は旅順口沖を去り豫定行動に移り渤海灣に進入し十六日正午塔山附近に近き蓋州角附近一帶の沿岸を偵察し陸上多少の敵兵あるを認め之を砲撃す敵は直に遁逃せり。



十七日午後我戦隊は掃海を行ひ金州灣に進入し砲艦をして灣頭に進み鐵道架橋及恰も此時通過せんとせる運兵列車其他敵の建設物を砲撃せしむ其結果何れも多少の損害を與へ得たるものと認む。

### 一五、西山分遣隊状況の報告

大海報同五月二十七日午後一時二十五分大本營着電

今當集合地に歸航しつゝある西山分遣艦隊指揮官よりの無線電信に依れば分遣艦隊(筑紫平遠、赤城、鳥海、並に第一水雷艇隊)は一昨二十五日午後六時金州灣に達し二十六日黎明より第二軍に協力して蘇家屯高地の敵壘を砲撃し就中赤城、鳥海の二艦は其淺吃水を利用して終日戦闘に従事せり午前十一時に至り敵は蘇家屯の高地より退却せしも尙其後方收容陣地より發砲を繼續し我陸軍は夕刻迄敵壘に迫るを認めさりしも午後八時頃之を占領するを見たり我艦隊の損害は戦死鳥海艦長林三子雄外死傷九名にして艦船には差したる損害なし。

### 一六、西山分遣隊の詳報

大海報同五月二十七日午後十時三十分大本營着電

唯今入港の第一水雷艇隊か齎したる西山分遣隊の戦報左の如し。

分遣艦隊は二十五日正午金州灣に達せしも波浪高かりしを以て蘇家屯敵壘の攻撃を見合せ一地に假泊して風波を避けたり二十六日午前五時頃より天候漸次靜穩に復し第二軍は黎明より砲戦を開始せしを以て午前六時赤城、鳥海及び第一艇隊も干潮水淺きに拘らす海岸に近きて之を協力し連續敵壘を砲撃せり此戦闘の初期敵彈鳥海の前甲板を擦過し爲めに分隊長海軍大尉河野通雄負傷し下士以下二名戦死二名負傷す午前八時海面より望見し得る敵の砲壘は一時殆んど沈黙せしを以て砲撃を中止し更に第一艇隊の一部はシャオへ河附近の鐵道線路を砲撃し他の一部は漲潮に乗し航路を測探しつゝ筑紫、平遠を嚮導して海岸に近づき我陸軍右翼の一部か砲火を冒して淺水の海中を徒涉し壯烈に前進するを掩護せり午前十時より分遣艦隊は再び全力を以て敵壘を砲撃し同十一時敵は殆んど退却し我陸兵既に蘇家屯高地の下に達せる如くなりしを以て再び砲撃を中止したり筑紫、平遠は落潮に際し吃水許さる爲め漸次沖合に出て赤城、鳥海及水雷艇隊の一部は依然留まりて敵を監視せり此間我艇隊は第二軍の右翼と通信連絡するを得て蘇家屯の敵兵は既に全く退却せしも尙南關嶺附近にある敵の陣地を砲撃するの要あるを知り更に赤城、鳥海をして直に之を砲撃せしむ此砲撃中敵彈鳥海の砲側に爆發し艦長林子三雄戦死し少尉佐藤巳



之吉外下士卒三名負傷す但し艦體には損害なし其他の艦隊には一も損害なし午後七時三十分分遣艦隊は戦闘を止め艦隊集合地に向け歸航せり。

### 一七、第五驅逐隊の報告

大海報第參拾五號同六月五日午後大本營着電

今朝封鎖任務より歸航したる第五驅逐隊の報告に依れば昨日午後七時四十分同隊が東方より旅順口港外を監視中「ギリヤーク」の如き敵の砲艦一隻城頭山の前面に於て爆裂沈没せり多分我水雷に罹りしものならん尙ほ他に敵の砲艦一隻驅逐艦汽艇等各數隻港外に在りて掃海事業に従事せるものゝ如くなりしが皆惶惶東港内に入れりと云ふ。

備考

「ギリヤーク」は明治三十一年建造の新式装甲砲艦にして開戦以來専ら旅順口の防禦に任し或は港口に繫泊して哨艦の任務に服し我第三閉塞事業の舉行に際しては特に防禦の衝に當りしものなり。

### 一八、旅順口外爆沈の敵艦

大海報第參拾八號同六月七日午後大本營着電

今朝封鎖任務より歸來したる第四驅逐隊司令長井群吉の報告に依れば一昨日午後七時四十分旅順口外に爆沈したる敵艦は「グレンシャスチー」形にて同驅逐隊は當時鮮生角に近つき敵狀監視中嘴砲臺より十數發の砲撃を受けしを以て少しく南方沖合に之を避けしに港外にありし「グレンシャスチー」形の敵艦我に向ひ砲撃しつゝ進行し來りしか幾許もなく城頭山の南方約一海里と思はるゝ所にて大爆煙を擧げ沈没せり又其側にありし「ガイダマーク」形の一敵艦も同時に其艦影を没せり敵は城頭山老鐵山下に沿ふて頻りに掃海を施行しつゝありしものゝ如く掃海艇と思はるゝ舟艇は城頭山下に群集し尙數艇の老鐵山の東方に運動するを見たり是等の舟艇は敵艦の爆沈と共に惶惶港内に通入せり

第四驅逐隊は數個の近弾を受けしも一の損傷なし

以上當時の状況重て報告す

備考

「グレンシャスチー」は明治二十六年建造の装甲砲艦にして「ヲトワズニ」等と同形なり「ガイダマーク」は明治二十七年建造の水雷砲艦にして「ウサドニツク」と同形なり前報告に「ギリヤーク」の如き砲艦とありしは「グレンシャスチー」形を指せしものと認む



## 一九、旅順口強行偵察の報告

大海報第參拾九號同六月七日午後七時十分大本營着電

砲艦四隻は豫定の如く昨夜午前零時過ぎ旅順口港外に至りて強行偵察を行へり敵は猛烈なる砲火を以て之を砲撃し第四號砲艦は敵彈八個を蒙り多少の損害あり卒一名戦死し二名微傷を負ふ其他は皆無事なり

## 二〇、旅順口強行偵察

大海報同六月八日午後大本營着電

昨七日夜より今曉に掛け艦載水雷艇八隻を放て更に旅順口の強行偵察を舉行せり敵は之に對し多少の砲火を加へ八雲艦載水雷艇に下士卒各一名の戦死者を出せり其他損傷なし

## 二一、麾下各隊の狀況報告

大海報第四拾六號同六月十二日午後大本營着電

聯合艦隊は依然旅順口の封鎖を強固にすると共に上陸軍の後方を掩護し時々分遣隊を以て陸上の敵に對し作戰す曩に遼東灣に特派したる第六戰隊赤城宇治及第十水雷艇隊を加ふは去る七八兩日蓋平附近の沿岸に屯在せる敵を砲撃し之に多少の損害を與へ其任務を遂行して今朝當地に歸着せり又封鎖勤務に服せる第四驅逐隊は一昨十日午前十一時より約二時間營城子双臺溝附近の敵兵を砲撃し之亦多少の効果を見たり又當時大連灣附近を巡邏せし第二驅逐隊は正午頃小平島附近迄出て來りたる敵の驅逐艦四隻を發見し之を鮮生角迄追撃せしか敵は急速背進して遂に旅順口に入れり

大連灣及其附近の掃海は着々其歩を進め今や既に其豫定第一期掃海面を掃除して機械水雷七十餘個を爆沈し將に第二期掃海に着手せんとす公海に浮流せる敵の機械水雷は今尚ほ絶へず今日迄我軍にて發見撃沈したるもの既に三十に下らす是等の浮流水雷は風潮の爲め渤海灣にも流入し第四驅逐隊は鐵島の北方に一個を發見して之を撃沈し其他董家口にて三個浮流せりと云ふ

近來の天候一週に一回濃霧あるを常とし去る九日以來の霧は漸く今朝に至りて霽れたり爲に我艦隊の行動に多少影響すと雖も麾下將卒は人力の及ふ限りを盡して各其爲すべき任務を果し幸に吉野沈没以來一も危害を見ざるは本職の深く歡喜する所なり



二二、陸上屯在の敵砲撃報告

大海報第四拾七號同六月十二日午後大本營着電

第六戰隊は豫定の如く去る七日、八日兩日蓋平角より熊岳河口附近に亘る海岸に屯在せる敵を砲撃し尙ほ遼東灣沿岸に於て多少の偵察を遂げ今朝當地に歸着せり其報告に依れば敵は我軍の蓋平縣附近に上陸するに備ふる爲め其沿岸に約三千の歩騎兵を屯し土民の言に依るに海岸の各所に監視哨を配置し居れり孰れも我艦隊の砲撃に逢ひ内地に逃遁せり七日の砲撃中會々南行の汽車熊岳城の北方約三里にて停止し直に北方に引返せり爾後八日迄汽車の通過するものを認めず八日朝蓋平角附近に於て敵の歩兵約二個中隊騎兵約一個中隊の一群を猛撃し多大の損害を與へたり七日營口を出てたる外國汽船々長の言に依れば此砲撃の爲め營口に在りし露兵三千砲二十門は同地を撤退して北方に去れりと云ふ又八日第十水雷艇隊が復州灣にて捕へたる露兵二名は興德縣萬家嶺を發し復州灣より乗船し旅順口に向はんとしたるものにして騎兵第四旅團第一聯隊に屬する騎兵なり其言に依れば萬家嶺、瓦房溝、瓦房店には歩兵二個聯隊騎兵一個聯隊半砲八門ありて五月二十八日より同三十一日迄に二度に到着せり其指揮官はサムソン少將なり此兵力は土民が此附

近にある敵の兵數約五千と云ふに略ほ一致す又捕虜の言に依れば南行の汽車は萬家嶺まで一日三四回通し居るも其以南は稀れに瓦房溝迄徐行すと捕虜は多數の公文を所持し居れり

二二、水雷爆發のため死傷報告

大海報第四拾八號同六月十四日午前大本營着電

聯合艦隊附屬水雷敷設隊臺北丸は昨夜敵前に於て機械水雷沈設中水雷一個俄然爆發し左記の戦死者並に負傷者を出せり船體には大なる損害なし

(戦死)

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 海軍 少佐 眞崎 安一   | 海軍兵曹長 藤井 留楠  |
| 海軍上等兵曹 城谷 仙太郎 | 海軍一等兵曹 富田 由藏 |
| 海軍一等兵曹 田中 稻作  | 海軍二等兵曹 古田 捨吉 |
| 海軍二等兵曹 渡邊 貴徳  | 海軍二等兵曹 今川 藤吉 |
| 海軍二等兵曹 中村 乙槌  | 海軍三等兵曹 菅原 万作 |
| 海軍三等兵曹 平川 松助  | 海軍三等兵曹 松尾 重孝 |



海軍三等兵曹 立松 桑次郎	海軍一等水兵 式 本乙吉
海軍一等水兵 杏名 福太郎	海軍一等水兵 加藤 悦太郎
海軍三等水兵 前田 末治郎	海軍三等水兵 松田 歌治郎
海軍二等機關兵中 尾長 藏	

(重傷)

海軍大主計 森 岡 支(入院後死亡)	海軍一等兵曹 作田 磨津治
海軍一等兵曹 中 村 康胤	海軍一等兵曹 紙 元與吉
海軍二等兵曹 竹 谷 雅治	海軍二等水兵 杉 生庄藏
給仕 一名	

(輕傷)

海軍中佐 小田 喜代藏	給 仕 三宅 福太郎
-------------	------------

### 二四、旅順口強行偵察報告

大海報第四拾九號其一同六月十五日午前大本營着電

山本大尉の指揮せる艦載水雷艇隊は第三驅逐隊及第十四第十六水雷艇隊掩護の下に六

月十三日午後十一時三十分更に旅順口の強行偵察を行ひ各艇敵に發見さるゝことなく探海燈光の下を潜りて豫定の位置に巧に機械水雷の沈置を了し本日無事當地に歸航せり

同其二六月十五日午前大本營着電

土屋第二驅逐隊司令よりの報告に依れば六月十四日同隊及第一、第十四、第十六水雷艇隊は小平島附近に於ける我陸軍の威力偵察に勢援する爲め今朝來小平島以西の陸岸にある敵兵及敵の哨所等を砲撃しつゝありしか午後零時三十分の頃敵艦「ローウキク」及驅逐艦十隻旅順口の方向より突進し來るに會し各隊は盛に之と砲戦しつゝ漸次退却して敵を誘致せしも午後三時頃に至り敵は遂に引還せり我に一の損害なく各隊は日没後再び當夜の豫定哨區に進む午後四時帽島附近に來りし千歳よりの報告に依れば同時旅順口方向に爆發及砲聲の聞ふるを報せり未だ其の何の故なるを知らず

### 二五、機械水雷爆沈の報告

大海報第五四號同六月十八日午後五時大本營着電

一昨十六日午後一時第四驅逐隊は老鐵山の南方約十海里に於て敵の機械水雷三個を發



見し之れを爆沈せり又同所に敵の假裝水雷數個の沈置しあるをも發見し共に之を撃破せり

## 二六、旅順口外の敵艦隊攻撃

大海報第五七號同六月二四日午後十時大本營着電

二十三日午前十一時旅順口外にある哨艦より無線電信を以て敵艦「ペレスウエート」外七隻驅逐艦九隻港口附近に出つとの報告に接し特別任務に従事するものゝ外總艦艇を擧げ發進す敵は戦闘艦六隻巡洋艦五隻驅逐艦十四隻にして南下を試みんとするものゝ如くなりしも日没後に至り港口外に假泊せり

昨夜我驅逐艦水雷艇の大部分は旅順口港外に於て敵艦隊を攻撃し少なくとも「ペレスウエート」型戦闘艦一隻は轟沈したるものゝ如く「セバストポリ」型戦闘艦一隻「デアナ」型一等巡洋艦一隻は今朝曳かれて港内に入るを見たりとの報に接したれば多分大損害を受けたるものならん我艦艇には大なる損害なく驅逐艦白雲は敵彈の爲め士官室を破られ戦死下士卒三名負傷海軍少軍醫宮川正雄外二名を出たし千鳥は後部汽罐室に一彈を受けたるも死傷なし又第六拾四號水雷艇第六拾六號水雷艇には少許の損害あり其他は皆無事なり

備考

敵は損傷せし戦闘艦以下には應急修理を施し又港口閉塞は辛ふして戦闘艦を通過し得る程度に開通したるものと認む。

## 二七、旅順口外敵隊攻撃の勝報

大海報第五八號同六月二六日午前大本營着電

聯合艦隊は一昨二十三日旅順口外に於て敵艦隊を攻撃せり此日早朝より敵艦隊(戦闘艦「ペレスウエート」「ボルターワ」「セワストポリ」裝甲巡洋艦「バヤーン」巡洋艦「バルラーダ」「デアナ」「アスコリド」「ノーウキク」)は數隻の掃海汽船を先頭とし漸次に港外に出てんとするものゝ如く封鎖勤務にある我哨艦は無線電信を以て其舉動を警報せり爰に於て敵の出動に對する豫定計畫に基づき各方面にある諸隊は直に發動の準備を整へ在泊せし艦艇は逐次に出港して急速旅順口に向ひ特別任務にある艦艇の外我艦隊は悉く豫定位置に集中せり是より先き第一驅逐隊司令海軍大佐淺井正次郎第四驅逐隊及第十四艇隊等は港外にありて終始敵の動靜を監視せしか午前十一時頃に至り敵艦隊は戰艦「ツエサレーウキチ」「レトウキザン」「ボベード」を加へ全力悉く港外に出現し其數多の掃海船艇は我機械水雷敷設面を航破して漸次



に通路を開かんとするを見屢々近きて之を妨害し午後三時頃第四驅逐隊第十四艇隊は此掃海を掩護せる敵の驅逐艦七隻と砲戦して之を撃退し其一隻は我弾の爲めに火災を起し港内に遁入せり次て敵艦ノークキ其驅逐艦を掩護する爲め近き來りて我を砲撃せるを以て我驅逐艇隊は遂に退却して戦隊に合せり之を當日戦闘の發端とす然るに敵は其掃海を急行し敵の艦隊はノークキを先頭とし掃海汽船の後方に隨ひ沖合に出て來り午後四時過くるの頃第三戰隊は其部下を集團して敵と觸接を保持し漸次に之を南方に誘致せり敵は始めは南東の針路を取りしか次て正南に變針するか如くなりし此時第一戰隊は遇岩の南方に於て尙敵の視界外にありしか先づ驅逐隊水雷艇隊を集合して襲撃準備を爲さしめ徐ろに敵の洋中に出るを待ちしか午後六時十五分に至り始めて敵艦隊を明に遇岩の北西約八海里に見たり敵はツエサレーウキチを先頭とし戰闘艦を前に巡洋艦を後に十隻の單縦陣をなしノークキ及驅逐艦七隻を右側に置き南に向へり我艦隊は戰闘旗を掲げて戦機の熟するを待てり午後七時三十分彼我の距離一萬四千米突に入り我艦隊は敵の隊列に對し倒まにイの字を書きしか敵は次第に右方に針路を轉し我と同方向に進まんとするものゝ如く我も少しく右方に轉針して終始敵の先頭を壓せり然るに午後八時を過くるの頃敵は遂に針路を北方に反轉し旅順口に向ふ如くなるを以て我艦隊は一齊に右八點に回

頭し横陣を以て暫らく之を追ひしか時將に日没八時二十二分に近く水雷攻撃の時機漸く熟せしを以て午後八時二十分驅逐隊水雷艇隊に襲撃を命し同時に艦隊は左八點に回頭して單縦陣に復す各驅逐隊水雷艇隊は直に我艦隊の後尾を過ぎ疾風の如く敵に向て進めり午後九時三十分の頃第十四艇隊は港外約五海里に於て敵艦隊の後尾に對し既に第一の襲撃を試み第五驅逐隊之に續けり敵の艦隊は倉惶順序を亂し旅順口に向ひしが遂に港内に入る能はずして午後十時三十分の頃皆港外蠻子營砲臺の前面より城頭山の下に投錨せり之より終夜我驅逐艇隊は敵艦隊及敵要塞の無數の探海燈と猛烈なる防禦砲火を冒して天明に至る迄連續前後八回餘の襲撃を爲せり此襲撃中奏功を確認したるは午後十一時三十分頃鮮生角の方向より迂回して急進したる第十六艇隊の攻撃にして若林少佐の指揮せる白鷹は「ベレスウエート」型と見へたる敵艦の艦首に對し斜に二個の水雷を發射し同艦の大火焰を揚げて轟沈せるを目撃せりと云ふ其他の効果に就ては敵防禦砲火の音響激甚なりしと海面を打てる敵弾に依り無數の水柱上りし爲め我艦艇より確實に之を認め得たるものなし翌日天明港外を偵察したる第四第五驅逐隊其他哨艦の見る所を綜合すれば敵艦隊は數に於て「ベレスウエート」型戰艦一隻を滅し外に「セウストボリ」型戰艦一隻「デアナ」型一等巡洋艦二隻だけは自力にて航行し得ざるだけ損害を受けたるものと認む蓋し當夜月



明かにして襲撃に便ならざりしと敵艦の碇泊陣列我發射線に對して狭少の正面を顯はしたる爲め攻撃の効果は多大ならざりしも我攻撃隊に於ても敵砲火の猛烈なりしに拘らず損傷意外に少なく第一驅逐隊の白雲は敵彈に士官室を破られ火災を起し同時に舵機を損し下士卒三名戦死宮川少軍醫外下士卒二名負傷し第十四艇隊の千鳥は其後部汽罐室に炸發せざる巨彈を受けたると第二十艇隊の第六十四號艇第十六號艇隊の第六十六號艇が少許の損害を受けたると第十二艇隊の第五十三號艇の准士官一名負傷したるに過ぎず各戦隊の諸艦に至りては素より損傷なし此戦闘に於て聯合艦隊が少許の損害を以て敵を屈したるものは一に大元帥陛下の御威稜に依る

二十四日旅順口港外の敵艦は或は曳かれ或は自力にて順次に港内に入り午後四時頃城頭山下に擱座せりと見へたる一艦の入港するを最後として港外亦敵影を見ず茲に於て聯合艦隊の諸隊は再び豫定の配備に就けり。

此戦闘の概況は曩に報告せしか今各方面の配備にある諸隊よりの報告を得たるを以て之を綜合し茲に詳細の報告を呈出す。

## 二八、第十二水雷艇隊攻撃の報告

大海報第五九號同七月二日午後七時大本營着電

第十二水雷艇隊司令海軍少佐山田亨は六月二十七日夜旅順港外にある敵の哨艦に對し攻撃を行ひたり其報告に據れば同夜我艇隊は旅順口港外に進航せしに敵の窺知する所と爲り探照燈の熾なる照射と砲臺軍艦の猛烈なる射撃を冒し黄金山下にある二橋三煙突の敵哨艦(戰闘艦又は一等巡洋艦ならん)を襲撃せしに該艦は水柱を揚げて轟沈せり此時敵の驅逐艦は我を攻撃し來りしを以て之と砲火を交へたりしか其内一隻は艦腹を現はし白煙を揚げながら轉覆沈没せり之れ各艇が齊しく敵の探照燈光の下に明認する所なりと云ふ。此の攻撃中戦死海軍大尉權藤薰義以下十三名負傷海軍中尉矢野祐太郎以下二名なり。

## 二九、旅順港無電柱の撃破報告

其一

封鎖の爲め旅順口沖に出動中なりし高木千歳艦長よりの無線電信報告に依れば老鐵山頂に橋四本及哨舎あり其内一本の橋に無線電信用の「ガーフ」の如きものを認むと又今四日朝以來旅順口方面に當り數回の大爆聲を聞き黒煙の盛に揚るを見たりと云ふ石田第二驅



逐隊司令の報告に依れば雷は南三山島沖にて敵の機械水雷を認め是を爆沈せしめたりと

其二

旅順口沖に出動中の高木千歳艦長の電報に依れば北隍城島及大欽島には無線電信柱の如きものを見す又本日(四日)午後七時過ぎ更に旅順方面に當り數回の大爆聲を聞きしも煙は認めさりしと云ふ

三〇、軍艦海門沈没の報告

大海報第六一號同七月七日午後大本營着電

軍艦海門は七月五日特別任務を帯び作業中濃霧に會し大連灣外に於て敵の機械水雷に觸れ破損沈没せり艦員の大部分は救助收容せられたれとも艦長高橋守道主計長塚原喜八掌砲長松下善之丞外下士卒十九名は生死不明なり艦長は總員に退去を命じたる後部下の勸告せしにも拘らず退艦乗艇を固辭し最終まで艦橋に止まり遂に本艦と其運命を共にせしか如し

三一、第六艇隊敵艦襲撃の報告

大海報同七月十日午前大本營着電

第六艇隊司令海軍少佐内田良隆は八日夜旅順口港口に在る敵の哨艦を襲撃する爲め雨霧を冒して港口に近づき索敵せしも天明に至るまで敵を發見せず然るに翌九日午前五時三十分に至り第五十八號艇(艇長心得海軍中尉中牟田武正)は黄金山下濛氣の内に敵艦アスコリツドの碇泊するを認めたるを以て之を襲撃せしか其効果は未だ明かならず同水雷艇隊は敵の要塞より猛烈なる砲撃を受け第五十八號艇第五十九號艇にて各下士一名重傷を負へり

三二、驅逐隊砲戦の報告

大海報第六三號同七月十一日午前大本營着電

九日午前七時頃より敵艦「バーン」(ヂアナ)「パルラーダ」(ボルターワ)「ノーウキツク」砲艦二隻驅逐艦七隻は數多の掃海船艇を先頭として漸次に港外に出て同日午後鮮生角より龍王塘附近まで來れり我驅逐隊の一部は艇の掃海を妨害するの目的を以て屢々之と砲戦し第三艦隊の一部は小平島附近に在て之と對應し午後二時頃に至り敵艦「バーン」と多